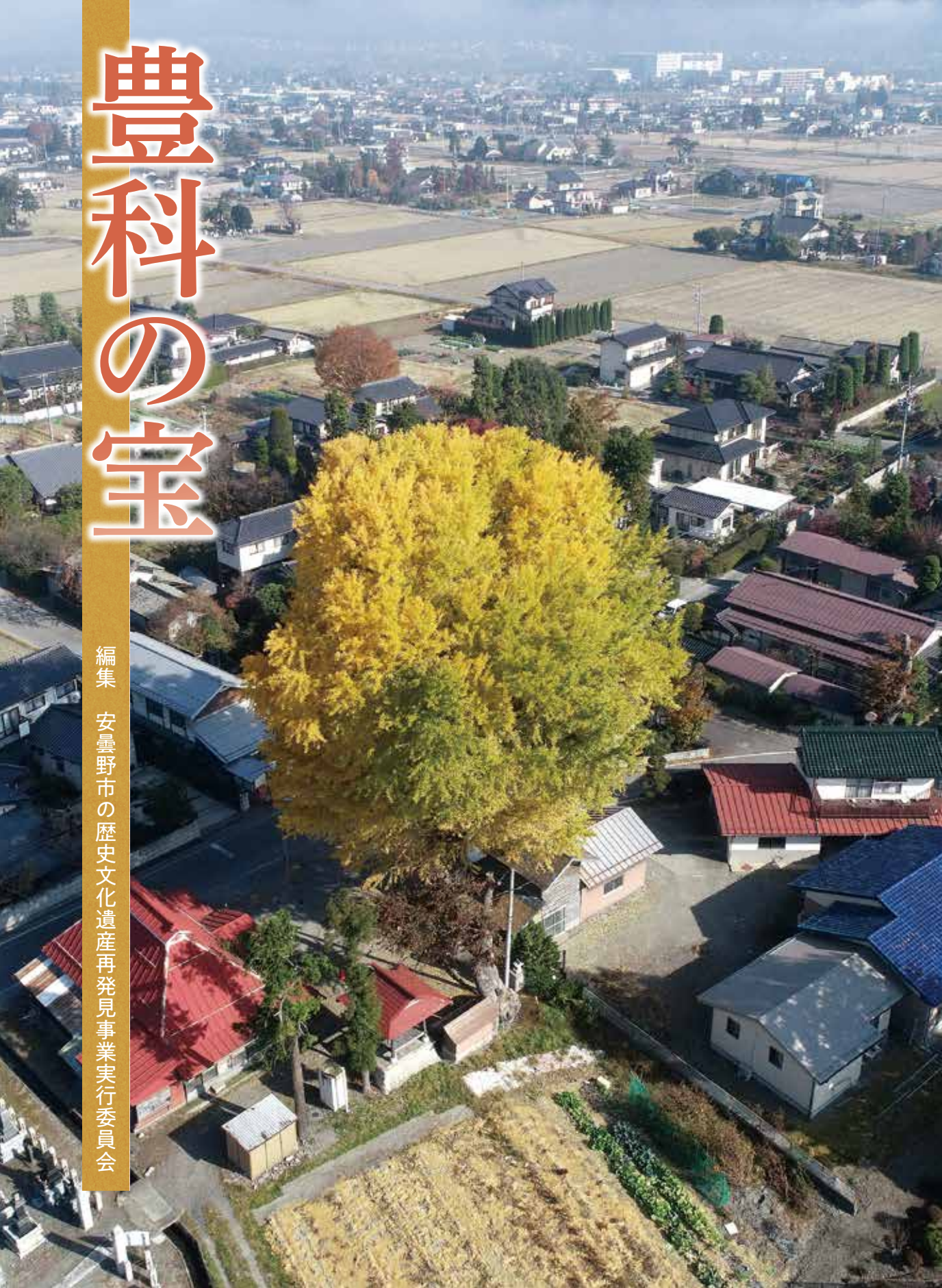


# 豊科の宝

編集

安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会





# はじめに

安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員長 原 明芳

豊科は、六つの村の合併によって明治七年（一八七四）に歴史に登場する。今から一五〇年ほど前である。鳥羽、吉野、新田、成相の最初の一字を並べ、「とよしな」と名づけられ、豊かな里を目指したのであるうか「豊科」と漢字があてられた。その後、南穂高村、高家村、上川手村が合併して、現在の豊科地域ができあがっていく。

今から五〇年ほど前に刊行された『長野県百科事典』（信濃毎日新聞社）に、次のように豊科町が紹介されている。

「人口増加率は地方都市としては県下最高位の一つ。域内の平野は安曇野の主要部を占め、かんがい用水にも恵まれ、水田は耕地の九四割に達し、良質な安曇米を産出する。一〇町当たり収穫量は五八〇<sup>キログラム</sup>で県下最高水準の一つ。：（中略）：一九三七年（昭和一二）には呉羽紡績工場（現東洋紡）を招致し工業の町としての基礎を固めた。：（中略）：工業の町としての性格を高めている」

農業、工業ともに大きく発展する若々しい町として紹介されている。その後も昭和六三年（一九八八）に長野自動車道豊科（現・安曇野）インターチェンジが開通し、その

周辺地域の商工業の発展は著しい。

今回の「豊科の宝」は、明科、穂高を取り上げた前の二冊とは内容が少し違っている。古い歴史がないわけでは決してないが、「豊科」が登場してから、発展し変貌し、その中で生み出され、できあがった宝が多い。

今後、たくましく育った新しい世代が、豊科の宝を発見し、さらに自ら磨きあげて豊科の宝を生み出すことを期待したい。

令和四年三月



# 豊科の宝

## 「目次」

|      |   |
|------|---|
| はじめに | 3 |
| 関連地図 | 7 |

### 第1章 豊科をつくる自然

|                           |    |
|---------------------------|----|
| 1 豊科の大地の形                 | 8  |
| 2 化石が語る豊科の海               | 12 |
| 3 水は次世代からの預かりもの 安曇野の地下水   | 16 |
| 4 田沢神明宮の社叢と光城山の自然         | 22 |
| 5 光城山の桜と野鳥たち              | 26 |
| 6 河川敷の生きもの「不安定さ」が支える生物多様性 | 30 |
| 7 安曇野で冬を越す白鳥たち            | 36 |
| 8 安曇野の景観をつくる屋敷林           | 40 |
| 9 田淵行男と千国安之輔              | 44 |

### 第2章 掘り出された豊科の歴史

|              |    |
|--------------|----|
| 1 発掘調査からみた豊科 | 48 |
| 2 町田遺跡       | 50 |
| 3 上ノ山窯跡群     | 52 |

### 第3章 中世・村のはじまり

|   |                       |    |
|---|-----------------------|----|
| 1 | 小領主たちの館跡              | 56 |
| 2 | 中曽根川と中世の村落開発          | 58 |
| 3 | 光城と田沢城                | 64 |
| 4 | 真々部の七寺八小路 交通の要衝と信仰の拠点 | 69 |

### 第4章 近世・発展の礎

|   |                           |    |
|---|---------------------------|----|
| 1 | 描かれた江戸時代の豊科               | 72 |
| 2 | 堰をめぐる恩恵と苦難 勘左衛門堰と二つの「新田堰」 | 76 |
| 3 | 成相町村と新田町村 人と物が行き交う宿場      | 80 |
| 4 | 豊科を通る街道、橋、渡し場             | 84 |
| 5 | 法蔵寺の山門                    | 92 |
| 6 | 穂高神社の払い下げを受けた神社の本殿        | 94 |

### 第5章 豊科に残る習俗と伝説

|   |                |     |
|---|----------------|-----|
| 1 | 玄蕃稲荷           | 98  |
| 2 | 熊倉の子ども念仏       | 100 |
| 3 | 豊科の道祖神と石造物     | 101 |
| 4 | 七夕と道祖神祭り       | 104 |
| 5 | 成相・新田のあめ市と福俵曳き | 106 |
| 6 | 消えた村 コオロギ      | 112 |
| 7 | 豊科に伝わる「おはなし」   | 114 |

## 第6章 豊科の近代化

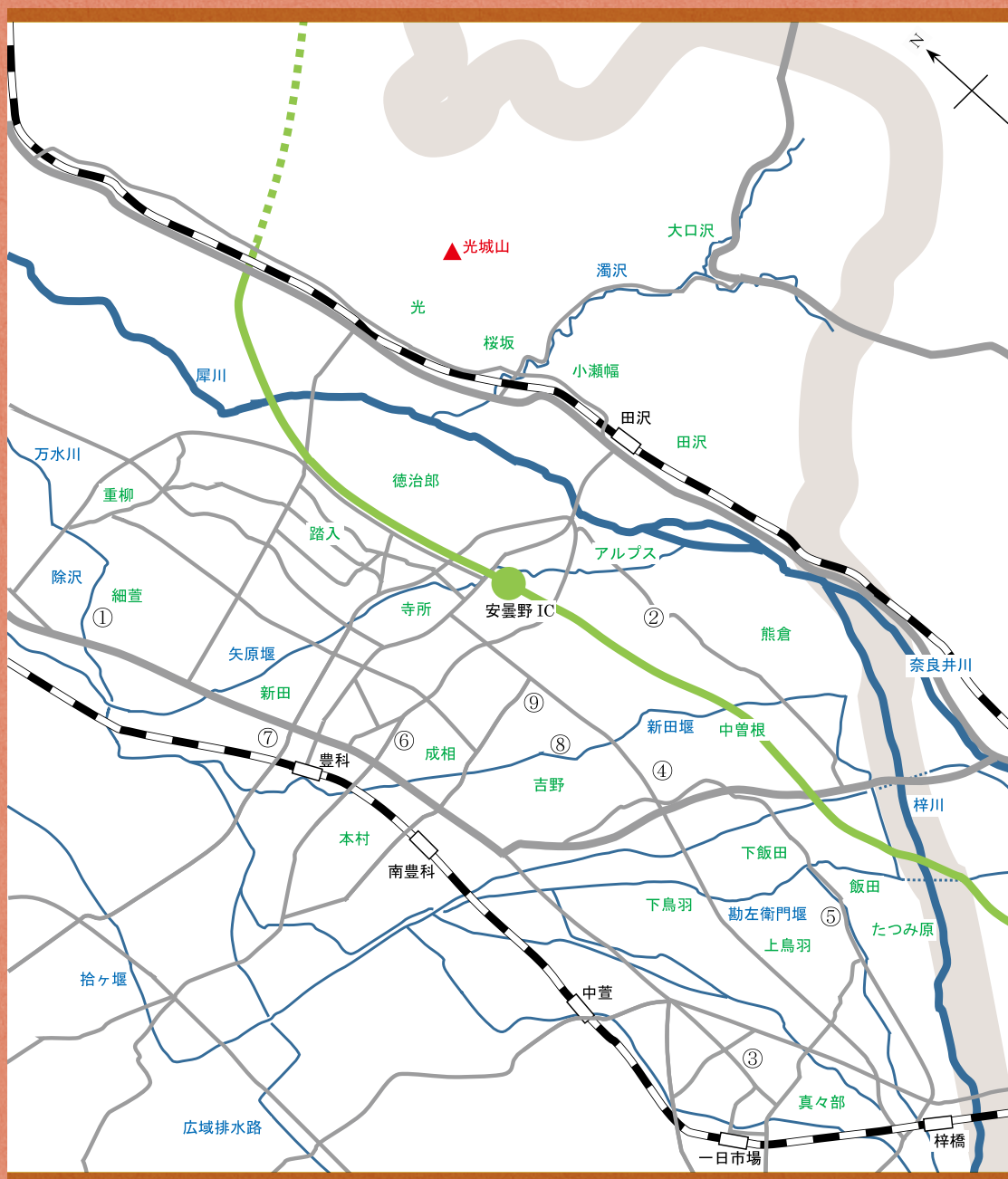
|   |                                 |     |
|---|---------------------------------|-----|
| 1 | 郡の中心地「豊科」                       | 116 |
| 2 | 時代を映す学校教育                       | 120 |
| 3 | 藤森桂谷 安曇野の近代教育の源流を作り、画人・文人として生きる | 126 |
| 4 | 長谷川清登飛行士と複葉機の木製プロペラ             | 130 |
| 5 | 日本のリンドバークと呼ばれた飛行士 飯沼正明          | 133 |
| 6 | 蚕種業家の繁盛                         | 136 |
| 7 | 紡績会社の隆盛と街の賑わい                   | 139 |
| 8 | 商店街の繁栄と祭り                       | 144 |

## 第7章 豊科の現在と未来

|    |                    |     |
|----|--------------------|-----|
| 1  | 豊科の名産品             | 148 |
| 2  | 拾ヶ堰、未曾有のサイフォン工事    | 150 |
| 3  | 工業のまち              | 152 |
| 4  | 安曇平の玄関 安曇野インターチェンジ | 156 |
| 5  | 県立こども病院            | 158 |
| 6  | 地域の健康を守る 安曇野赤十字病院  | 160 |
| 7  | 藤森秀夫と童謡祭り          | 162 |
| 8  | 熊井啓く熊井啓記念館収蔵資料から   | 168 |
| 9  | 五つの心をひとつに 市役所本庁舎   | 174 |
| 10 | 豊科南部総合公園           | 176 |
| 11 | 地域へ飛び出し、地域に学ぶ子どもたち | 178 |

|      |     |
|------|-----|
| 参考文献 | 184 |
|------|-----|

## 『豊科の宝』 関連地図



## 本書で紹介する主な祭り

- ①玄蕃稲荷    ②熊倉の子ども念仏    ③真々部殿村の木造道祖神  
 ④中曽根夫領の道祖神の七夕飾り    ⑤飯田道祖神の七夕飾り    ⑥成相の御柱・福俵  
 ⑦新田の御柱・福俵    ⑧吉野中村の御柱    ⑨吉野梶海渡の御柱

# 1 豊科の大地の形

## 豊科の地形

豊科は安曇野市の南西、松本盆地のほぼ中央に位置する。その大部分は梓川の河岸段丘面の上である。西側は飛騨山脈から流れてくる黒沢川や烏川の扇状地末端に近い。東側は筑摩山地西端の一部である山地地形と急な崖地形が存在する。

豊科の平地は梓川の河岸段丘上にあるが、下流側の地域になるため高い段丘面は見られず比較的低くて新しい丸田段丘面と岩岡段丘面しか分布しない。どちらも完新世の平地である。この段丘面の高低差は梓川の上流側（豊科の南側）ほど大きくなり、下流側（豊科の北側、つまり三川合流付近）ほど小さくなる。

大口沢のある山地は筑摩山地の一部であり、約二五〇〇万年前のフォッサマグナの海で形成された第三紀の別所層と青木層から主に構成される。地形的な特徴として、東西方向で最高地点が山地西端部に寄っており、明科の長峰山（九三三・五メートル）から豊科の光城山（九二一・七メートル）、豊科カントリー倶楽部ゴルフ場付近の上ノ山（八四一・四メートル）、



光城山山頂からの眺め。手前側が豊科

松本市の鳥居山（七四三㍎）、城山（六七八㍎）を結んだ線が主稜線となっている。この山地は東西方向に圧縮作用が加わり、地層が褶曲（しゅうきよく）している。これにより地層面は東または西に傾斜しており、その走行方向に一致するように田沢川や本沢川など、いくつもの沢が流れている。沢が形成する谷は田沢川の最大谷幅で一三〇㍎ほど、安曇野温泉田沢荘付近の最も狭い箇所で二〇㍎

足らずになる。谷が狭いところは大口沢より下流側に多く、大口沢集落の下流部、安曇野温泉田沢荘付近、田沢神明宮南などである。谷幅は砂岩や礫岩地帯で狭く、泥岩地帯で広い傾向を示している。

また、山地の西端部は急な崖であるが、これは松本盆地東縁断層が形成された（筑摩山地西側が陥没して松本盆地を形成した）際にできた断層崖（だんそうがけ）であると考えられている。その断層崖下には二段の河岸段丘が分布しており、高い面は光段丘、低い面は田沢段丘と呼ばれている。段丘は田沢区の南原から明科の会田川の河畔まで長さ

七・五㍎にわたって犀川右岸の山麓にのみ分布している。このうち光段丘面上には筑摩山地から流れ出た沢が形成した小型扇状地が複数存在している。扇状地の構成物質は山地の別所泥岩層から削りだされた泥岩層特有の短冊型の四角っぽい小礫から構成されている。



○が田沢駅。  
その東側の田畑の並びから扇状地の存在がうかがえる

## 豊科の地質

豊科の平地は第四期更新世および完新世の、地質年代上比較的新しい地質からできている。約七〇万年前の更新世中期初頭に松本盆地が陥没し、同時に北アルプスと筑摩山地の隆起運動が起こった。その際に梓川をはじめ多くの河川が山地を侵食して盆地内に厚い砂礫層を形成した。更新世に形成された波田段丘面や森口段丘面は、新しい完新世の砂礫層に覆われて豊科ではほとんど地中に姿を消してしまっている。完新世に形成された丸田段丘面は、松本市梓川の丸田から三郷を経て豊科の真々部区、上鳥羽区、下鳥羽区、吉野区にかけて分布し、それより新しい岩岡段丘面とは段丘崖をもって分かれている。梓川沿いや成相区以北に広がる岩岡段丘面は、おそらく縄文時代に形成された縄文段丘の一つと考えられており、歴史時代になって形成された最も新しい平地であるといえる。

次に豊科の山地だが、先に述べた通り第三紀の別所層と青木層からなる。別所層は昭和六年（一九三一）に本間不二男氏によって、現在の上田市別所温泉付近を模式地に命名された地層である。松本市北部から豊科、明科、生坂村、松本市四賀、上田市別所温泉から伊勢山、上田市塩田、青木村、坂城町にかけてフォッサマグナの中央ほぼ東



豊科東側山地の沢や道では綺麗な地層を見ることができる。  
沢では写真のように河床に地層が見られる箇所も多い



田沢山の巨大礫

西に分布する黒色泥岩層である。特に豊科田沢付近の別所層は田沢黒色泥岩層と呼び、黒色または灰色の泥岩層が主体である。この田沢黒色泥岩層は風化すると薄くはげやすく、柱状、長柱状で短冊形に細かく割れやすい。そのため構成される山地の表面はボロボロになり、水分を含むと容易に粘土化が進行し地すべりが発生しやすくなる。また、別所層はフォッサマグナの海が最も深く拡大した時期の地層であり、貝類、魚、クジラ、鱗の化石が産出する。団

塊（ノジュール）の混入や荷重痕や層内褶曲と呼ばれる深海で形成される非常に複雑な構造を見せることも多い。

その別所層の上位に重なる青木層は同じく昭和六年（一九三一）に本間不二男

氏によって、現在の青木村を名前に付された地層である。

明科から松本市四賀、筑北村、青木村に分布する砂質泥岩と砂岩の互層が主体の地層である。豊科に分布する部分は白牧砂岩礫岩層とその上位に北山砂質泥岩砂岩互層が重なっている。全体的に下位の田沢黒色泥岩が礫質になり、上位へ進むほど砂岩や礫岩、砂質泥岩へ変化していく過程を確認することができる。この青木層に含まれる礫は、赤石山脈や木曽山脈などのかなり遠くから運ばれてきたものが多く、水の力で綺麗に磨かれた円礫である。地層が堆積した当時の波跡（漣痕や流痕）を見ることができ、当時の海流が南から来たことが分かっている。青木層の形成された時代は大きな地盤変動が起きたようで、地層中に異常堆積や切れたり割れたり曲がって複雑な形状をした層が見られる。また、次節でも紹介しているようなアシカ、クジラ、サメなどの海生生物の化石が産出する。

加えて、青木層の特徴として、田沢から大口沢付近の沢には泥岩中に花崗岩やヒン岩を主とする巨礫が含まれている。中には径が二メートルを超えるものもある。『日本地方地質誌四 中部地方』には、これらの巨礫が諏訪湖南側の守屋山一帯から供給されたと推定している記載がある。この巨礫は豊科交流学習センター「きぼう」の敷地内にも設置されており、「田沢山の巨大礫」として、市の天然記念物に指定されている。

（高山裕司）

# 2 化石が語る豊科の海

一二〇〇万年前の海

豊科く松本市四賀の山地には、約一二〇〇万年前に海底で堆積した別所層・青木層が分布している。この山域では、シガマツコウクジラをはじめ、アシカなどの海生哺乳類、サメやニシンなどの魚類、巻貝、二枚貝、カニ・エビ



クジラの椎骨の化石（豊科郷土博物館所蔵）



貝化石の群集（大口沢）



大口沢の生痕化石露頭（豊科郷土博物館にてレプリカを展示）

などの甲殻類、アホウドリ科の海鳥、陸上植物などの多種多様な化石が産出する。貝化石や植物化石などから、当時は現在の九州南部から沖縄のような温かい気候だったと推定されている。

生物の体の化石の他、生活の痕跡である生痕化石も発見されている。大口沢で確認された幅三<sup>ミ</sup>に及ぶ生痕化石は、海底での生物の這いずり跡と巣穴が、海底土石流の堆積物に覆われて形成されたものである。どのような生物の残した生痕なのかは不明だが、生物の動き回る姿を生々しく想像させてくれる。

こうした多彩な化石たちは、クジラ、アシカ、絶滅したアロデスミスといった哺乳類や、サメ、エイ、ニシン、タイなど多様な魚が泳ぎ、空にはアホウドリが舞い、海底では貝類やカニ・ヒトデなどの底生生物が息づく、生命にあふれた豊かな海を私達に伝えてくれる。

## 世界最古のアシカ

平成一五年（二〇〇三）、豊科町は世界最古のアシカ化石発見のニュースに湧いた。その化石は、六・七<sup>センチメートル</sup>の歯と顎の化石だったが、臼歯や顎の特徴から、アシカ科の哺乳類のものと判断された。

化石はアシカ科の左下顎骨の一部で、三本の臼歯が残存

していた。顎自体が小型な点や、第二臼歯がない点など、現代のアシカ科のオットセイの形態に近いことがわかってる。

アシカ、アザラシ、セイウチなど、ヒレ状の足をもつ哺乳類の仲間を<sup>きやくるい</sup>鰭脚類と呼ぶ。鰭脚類は約二八五〇万年前以降に、共通の祖先からセイウチ科やアシカ科等へと分かれたと考えられている。当時世界最古のアシカ科の化石は、北米で発見された約七〇〇万年前のものであり、アシカ科の分岐年代の推定はかなり幅をもったものだった。一方、大口沢の化石が出土した地層の堆積年代は約一三〇〇万年前と推定されているた

め、この化石はアシカ科の世界最古のものとなった。

アシカ科の記録が六〇〇万年さかのぼり、一三〇〇万年前にはすでにアシカ科の仲間が存在していたことを示す証拠となったのである。古いアシカ科の化石の良好な発見例は少なく、アシカ科の進化の過程を解明する上で、貴重な標本である。この化石は、長野県の



世界最古のアシカ科左下顎骨（レプリカ）  
（豊科郷土博物館所蔵）

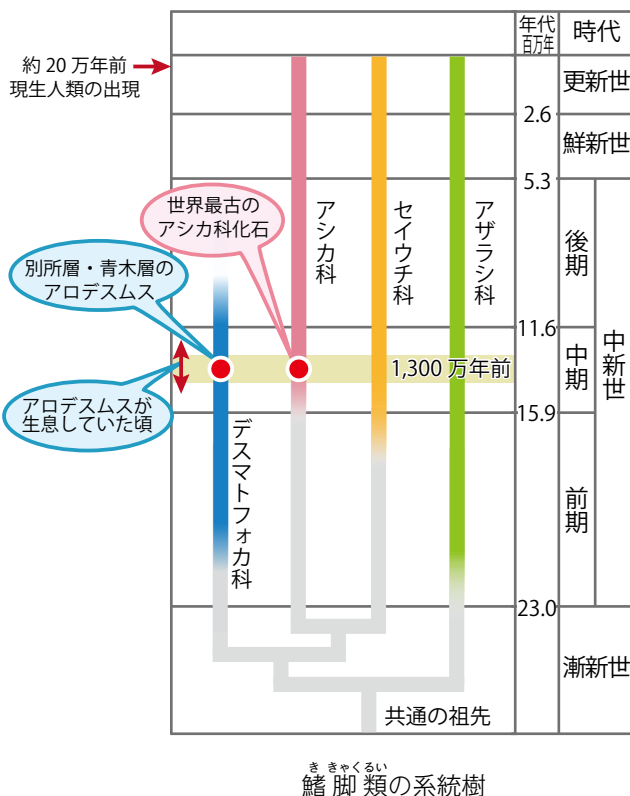


カリフォルニアアシカ



ゴマフアザラシ

(上下とも松本市四賀化石館所蔵のはく製)



天然記念物に指定され、現在、信州新町化石博物館に収蔵されている。

## 絶滅したアロデスムス

アロデスムスは、絶滅したデスマトフォカ科に属する鯨脚類の仲間で、主に北太平洋沿岸に分布していた。後ろ足はアザラシに似るが、体長は二メートルを超える。中でも日本で発見されるシナノアロデスムスは特に大きく、オスの個体では体長四メートルに及ぶものとされている。大きな目や、歯と顎の構造から、海に潜水し、魚やタコ、イカなどを食べていたと考えられている。

豊科・四賀周辺の青木層・別所層からは、数多くのアロデスムス化石が産出する。大正九年（一九二〇）、四賀で、松本盆地周辺では初めての化石が発見された。この標本は、上下の顎が噛み合った状態の化石で、牙や歯が良好に残存していた。シナノトド化石として長野県天然記念物に指定されているが、現在はシナノアロデスムスとして知られている。

大口沢でも、犬歯や頸椎、頭蓋骨、肩甲骨、肋骨など様々な部位のアロデスムスの化石が産出し、鯨脚類の特徴であるヒレ状の前肢が認識できる良好な標本も発見された。昭和三六年（一九六一）には、四メートル以上の大型の個体

のものと思われる頭蓋骨の一部が発見された。

平成二十七年（二〇一五）、大口沢で新たにエナメル質の残る犬歯の化石が発見された。周辺の調査の結果、発見場所の地層から、さらに顎、臼歯、肩甲骨など、一個体のものと考えられるアロデスムスの化石が出土した。歯や顎の化石は、生物の形態や生態を考えるために重要な情報を多く秘めている部分である。一個体の犬歯と臼歯がまとまって発見されたことで、この個体の雌雄・年齢などを探ることが可能である。今後、詳細な研究が進めば、アロデスムスの新たな姿が見えてくるかもしれない。

（松田幸子）



アロデスムス復元図（松本市四賀化石館所蔵）



アロデスムスの臼歯・犬歯化石（平成27年、大口沢）

# 3 水は次世代からの預かりもの

安曇野の地下水

## 安曇野わさび田湧水群と憩いの池

安曇野を代表するもののひとつに、豊富な湧水がある。

とりわけ重柳地区を中心とした豊科地域北部一帯は「安曇野わさび田湧水群」と呼ばれ、日に七〇万リともいわれる豊かな水量を誇る一大湧水地帯である。清冽な湧き水が織りなす「水のある風景」は観光地としても人気が高く、またわさび栽培や養鱒ようそんといった安曇野ならではの産業を支えている。宿泊施設やレストランが集まっている「安曇野の里」敷地内では湧水を汲むことができるため、市の内外から美味しい水を求めて多くの人がやってくる。

「安曇野わさび田湧水群」は昭和六〇年（一九八五）に、環境庁が全国の名水から選定する「名水百選」に選定された。これは、全国の湧水や河川等の中から、水質や水量、周辺の景観、地域の保全活動や保全状況といった観点、また知名度や水に関する伝承・伝統があるか、といった観点も踏まえたうえで、一〇〇ヶ所が選ばれたのである。その後、平成二〇年（二〇〇八）にはさらに一〇〇ヶ所が追加で選定され、現在合計二〇〇ヶ所が「名水」とし



清冽な湧水が豊富に湧き出る、安曇野わさび田湧水群「憩いの池」

て認定されている。

さらにこの湧水は平成二十七年（二〇一五）には環境省が開催した「名水百選選抜総選挙」において四部門中二部門（観光部門、景観部門）で全国一位に輝いている。これは昭和の名水百選選定から三〇周年を記念して開催されたもので、二〇〇ヶ所の名水を対象に「観光地」「景観」「秘境地」「おいしさ」の四部門でインターネット投票により認知度や支持を競い合うイベントである。このことから、安曇野わさび田湧水群は全国的に人気のある湧水であることがうかがえる。



安曇野の里では、湧水を汲むために多くの人が訪れる

## 湧水に生息する生きものたち

湧水群の中心的な親水公園として整備された「憩いの池」と、その周辺の湧水地やわさび田排水路では、水草や水生昆虫、トンボ類といった湧水地帯に特徴的な動植物が多く見られ、美しい水の流れと共に、訪れた人々の目を楽しませている。この一帯はその特徴的な環境から、水温や水質に敏感な水生生物のゆりかごとなっており、希少な生物がいくつか生息している。

例えば、『穂高わさびの歴史と栽培・加工法』（昭和五二年（一九七七））の中で、「昭和三十年頃までは、清水に育つ「おかめどじょう」という茶褐色をしたどじょうがい



ホトケドジョウ



水面に集まるコミズスマシの一群



梅のような花を咲かせたバイカモ



カワヂシャ(手前)とオオカワヂシャ(奥)

た。わさび畑が開発され、清水の出る池がなくなつてから殆ど姿を消してしまった。若し今いたら天然記念物にでも指定されるような魚である。(中略) いわばわさび畑の「どじょう」であつた」と紹介された「どじょう」がいる。ホトケドジョウである。一般的なドジョウに比べて扁平で柔和な顔が「おかめ」を想起させたのだろう。ほとんど姿を消したとあるが、今でも湧水地の一部で辛うじて姿を見ることが出来る。

また、コミズスマシも湧水地特有の水生昆虫である。湧水地の池をのぞき込むと、時折澄んだ水面でくると円を描くように動き回る姿を見ることが出来る。水質汚濁の影響などにより全国的に著しく数を減らしているが、幸い安曇野では高密度で生息しており、国内随一の生息地とも

いわれている。

植物では特筆すべき種として、カワヂシャやバイカモが挙げられる。カワヂシャは五〜六月に小さな白い花をつけるゴマノハグサ科の越年草である。水路の管理放棄や湧水地の開発、特定外来生物に指定されているオオカワヂシャの影響により、個体数が大きく減少している貴重な種だ。市のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅰ類に選定されている。

一方バイカモはキンポウゲ科の多年草で、水中で長く茎を伸ばして水流に揺られている姿が特徴的である。湧水は水温が比較的安定しているため花期が長く、「梅花藻」の名のとおり、梅の花に似た白と黄の花を水上に咲かせる。澄んだ水と葉の緑、花の白が織りなすコントラストは、なんとも言えず美しい。

豊かな湧水とともに、これらの貴重で小さな生きものたちも後世に引き継いでいきたいものである。

## 地下水と湧水の仕組み

この安曇野を特徴づける豊富な湧水はどこからやってくるのだろうか。

安曇野市は松本盆地の中心に位置しているが、松本盆地は主に河川が運んできた土砂や石から成る砂礫層が硬い岩



市内の地下水の流れを可視化した図。三川合流部に向かって地下水が集まってくる様子がわかる  
(安曇野市水環境基本計画より一部改変・信州大学可視化研究成果)

盤の上に積もった地形になっている。基盤岩と呼ばれるこの岩盤はほとんど水を通さない。一方で砂礫層は深いところでは厚さ四〇〇メートルに及ぶが、細かい隙間が多いことから水を通しやすい。そのため、基盤岩がいわば巨大な水瓶の底の役割を果たし、地上に雨として降った水等が地面に染み込むことで基盤岩の上に積もった砂礫層が大量の水を含むことになる。これが松本盆地の地下水である。つまり、安曇野市の地下水は、松本盆地という巨大な水瓶に蓄えられた地下水のうちの一部であるといえる。

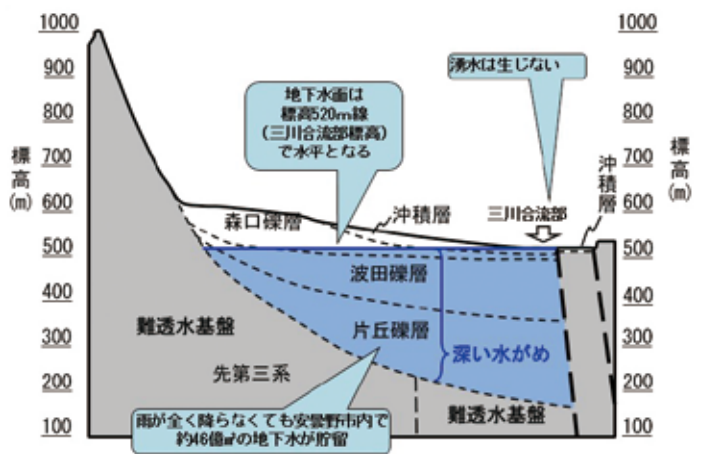
もし仮に松本盆地に雨が一滴も降らず、川や田の水が全て枯れたとすると、最も地表の標高が低い地点と同じ高さで地下水の水面が水平になるだろう。これは地下に蓄えられた水が減ることはないが、一方で湧水も生じない状態である。

この状態から、現実には降水や川の水が地下に浸透すること、浸透地点から最も地表の標高が低い地点に向かって、地下水面の傾きができる。これは地下水が砂礫層の砂粒等の隙間を縫って流れる速度が非常に遅いためだ。そしてこの傾きに沿うように地下水はゆっくりと流れていく。その流速は場所によって様々だが、松本盆地では数年から数十年をかけて湧出地点にたどり着く。この地下水面の傾きが、「水瓶」の中に溜まっている地下水に圧力をかける要因となり、圧力を受けて標高の低い地点から水が湧き出

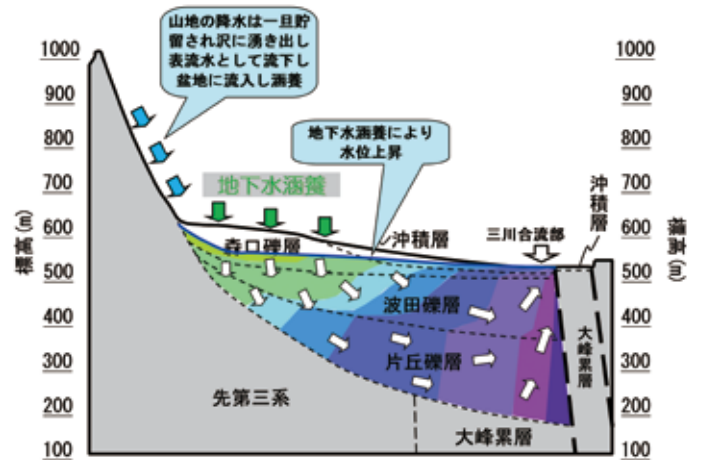
すこととなる。これが湧水の仕組みである。

言い換えると、地下水もまた河川と同じように、標高の高いところから低いところへと流れていくのだ。そして松本盆地で特に標高の低いところで湧水となつて地表に現れる。それが豊科北部から三川合流部にかけての一带というわけである。

松本盆地にはおよそ一九一億立方メートルの地下水が蓄えられており、そのうち安曇野市の地下にある部分は五四億立



仮に降水が全くなかった場合の地下水貯留概念の模式図。  
実際は降水により地下水面が傾く  
(安曇野市水環境基本計画より)



上の図の状態から、降水により地下水面の傾きができて地下水が圧力を受け、湧水となるまでの流れ  
(安曇野市水環境基本計画より一部改変)

のと同じである。

逆に涵養等による圧力が小さくなると、当然湧水量も少なくなる。安曇野市内においても近年湧水量の低下が問題となることがあり、冬場の渇水期に憩いの池の水が枯れる、わさび田の水位が低下して栽培に支障が出る、等の影響が報告されている。これらの地下水位低下の原因として、事業者による地下水の汲み上げを指摘する声も聞かれるが、実際は降水量の不安定化と、農地の縮小に伴う涵養

方が程度である。当然ながら、この地下水はずっと留まっているわけではない。前述したように、雨が降ったり、河川の水や雪解け水が地下に浸透したりすることで、絶え間なく新たな水の供給を受けている。このことを地下水の涵養と呼ぶ。

こうして涵養されることで、地下水は圧力を受け、湧水となつて湧き出るのだが、この涵養量が多いほど湧水の量も多くなる。これは例えるなら、水の入った袋に小さな穴をあけたとき、水の入っている量が多い(＝圧力が高い)方が、より勢いよく噴出する(＝湧水量が多くなる)

量の減少によるところが大きいと考えられている。降水の不安定化とは、降水量が多い時と少ない時の両極端になることだ。

降水量が増えれば一見涵養量も増えるように思えるが、実は雨が降ってもそれが集中しすぎると地面に浸透しきれず表流水として流れ出てしまうため、結果的に涵養量が減ってしまうことになる。また、農地、特に水田は浸透による涵養の多くの部分を占めているため、水田の減少がそのまま涵養量の減少につながっているのだ。

現在、安曇野市では地下水を守り上手に利用していくため、「水は、次世代からの預かりもの」と銘打って水環境基本計画を策定する等、地下水保全の取り組みを進めている。現在安曇野市内の上水道は一〇〇％地下水を水源としていることを考えれば、地下水の安定的な利用はあらゆる市民に関係する重大な課題だといえる。

## 地下水の利用

豊科北部地域は豊富な水資源を生かした産業が盛んである一方、南部地域は扇状地の中



今も現地に残る下鳥羽本郷の井戸

央にあり、古来水が得にくい地域だった。水が染み込みやすく地下水が多い地質であるということは、裏を返せば生活用水や農業用水が確保しにくいことになる。そのためこれらの地域では、古くから用水路の開発が行われ、その水利が得られるところに主な集落が発達したが、一部の地域では井戸を掘って地下水を利用することで生活を維持していた。

下鳥羽地区にある市有形文化財の「下鳥羽本郷の井戸」もそうした生活に欠かせない水として親しまれてきた井戸のひとつである。有形文化財登録指定書の記述によれば、「掘削年時は不明であるが、明治時代初めには既にあったという。河川の水を飲用にすることが多い時代に、流末でそれさえ得ることが困難な当地区において村中共同で利用された。また、村外からの利用者もあったという。早魃（かんばつ）で水不足に悩まされたときも飲料水だけは確保することができ、水道が敷設されるまでの長い期間利用された。多くの住民がその恩恵に浴し、井戸の存在が村落形成の一要因ともなっている」とのことである。

豊科地域には他にも古くから生活用水を得るために利用されてきた井戸がいくつに残っている。これらは、生きていくのに欠かせない水という資源を地下に求めた先人たちの知恵と苦勞を今に伝える、貴重な構造物であるといえよう。

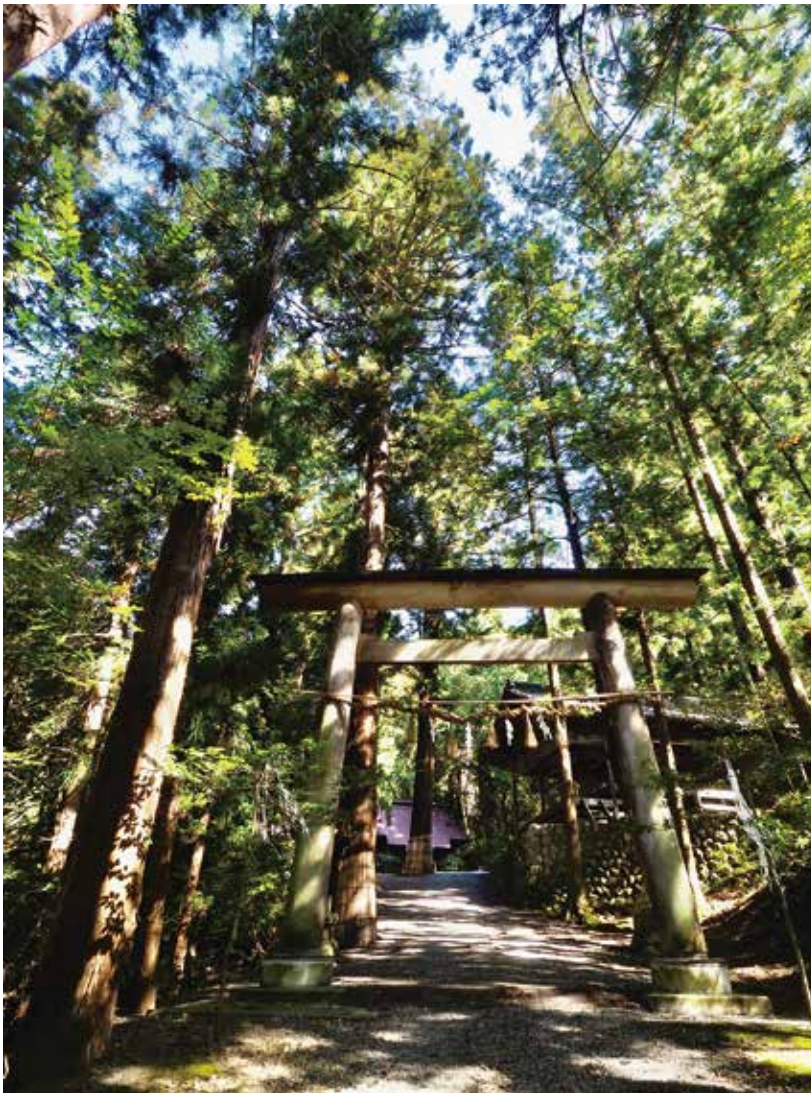
（幅拓哉、斉藤雄太）

# 田沢神明宮の社叢と光城山の自然

本殿、そして天然記念物としての社叢

田沢神明宮は光城山ひかるじょうやまの南の山麓に位置する。地元の領主の田沢氏が鎮守として会田神明を分祀したことが起源とされており、元禄十一年（二六九八）の書上帳にその名が記されている。本殿は寛政年代の建築であり、その後数回、屋根の葺き替えなどが行われている。

大口沢から安曇野へ県道をくだると、右手に鬱蒼うつそうとした神明宮の樹林があらわれる。鳥居を囲んでいるこのひとときわ高い樹林はスギで、奥にはヒノキもみられる。御神木は二本あり、スギとヒノキである。スギのほうは直径が一呎以上、樹高も三〇呎以上あり、境内でもっとも大きな樹木と思われる。スギは鳥居から本



田沢神明宮

殿にかけて、直径一呎前後のものが複数あり、御神木のヒノキも含めて荘厳な樹林をつくっている。これらの樹林、そして下層植生も含めた社叢しゃそうが旧豊科町

時代に町の天然記念物に指定され、現在に至る。

平成三年（一九九一）から四年にかけて行われた調査では三七八種の植物が確認された。境内は山の裾野の斜面を利用して配置されており、里山の植生となっている。現在も斜面にはイカリソウやヒトリシズカが自生しており、大切にされている。

また、田沢神明宮の周辺にはクロヒカゲモドキというチヨウの安曇野最後の生息地があった。かつて市内では西山山麓や東山に記録があったが、一九七〇年代まで確認されていたのは田沢神明宮周辺だけである。しかしこの小さな生息地も一九八〇年代以降は記録が途絶え、現在に至る。安曇野市版レッドデータブックでは絶滅危惧Ⅰ類にランクされているが、絶滅したとみてよいであろう。「豊科昭和八年八月九日」の採集標本が豊科郷土博物館に残されている。

## 松枯れのあとの植生の遷移

光城山への登山道としては、桜並木のコースが有名で利



用者も多いが、田沢神明宮周辺から登るコースもある。こちらは桜の植樹はなく、里山の二次林のなかを登っている。

田沢神明宮の裏手から登るコースでは、登り始めてすぐ、多くのアカマツが倒れて折り重なっている景観を目の当たりにし、松枯れの影響の大きさを実感する。しかし同時に、もう次の世代の広葉樹がぐんぐんと成長し、若い森が育っている。さらに部分的にアカマツの幼樹が再び発芽している。このように植生が時間とともに変化していくことを植生の遷移（せんい）というが、ここではそのダイナミックな変化を観察することができる。



松枯れのあとの植生の変化を観察することができる

## カシワとゼフィルス

この周辺がアカマツの多い植生となっており、その大きな要因は地形と地質にある。周辺の地質は、主に約二五〇〇万年前のフォッサマグナの海で形成された第三紀の別所層と青木層から構成される。登山道を歩くと、細かく風化した砂礫が斜面や足元にみられ、試しに足元の石を手にとって力をいれると、簡単に割れるため砂岩であることがわかる。また斜面の傾斜も大きい。このため表土が少なく、乾燥して養分もあまりない。

アカマツやネズミサシ、ヤマツツジは、こういった厳しい環境を得意とする樹木たちである。これらの樹木のひとつにカシワもあげられる。カシワは痩せ地に育ち、火入れにも強いなど、厳しい環境に自生する。また葉を柏餅に利



カシワの多い樹林

用したり、翌年に新芽が出るまで古い葉が落ちない特性から「代が途切れない」ということで縁起のよい植物として、人々に親しまれてきた樹木でもある。

光城山ではクヌギやコナラとともに樹林をつくっているが、市内でもこれほどカシワが多いところはないだろう。山麓の集落の人々に利用されてきた里山であったことがうかがえる。

このカシワに依存するチョウがいる。ゼフィルス（西風の精の意）と呼ばれるミドリシジミの仲間の、ハヤシミドリシジミとウラジロミドリシジミである。両種とも雄は青緑に輝く金属光沢の翅はねを持つ美しいシジミチョウで、カシワ林にのみ生息するため、市内の分布は豊科から明科にかけての東山一帯に限られる。特に田沢神明宮から田沢城跡へ向かう一帯は両種の貴重な生息地であった。そのほかに



ハヤシミドリシジミ雄（上）とウラジロミドリシジミ雄（下）



②ウラキンシジミ ①ムモンアカシジミ  
④クロミドリシジミ ③ウラナミアカシジミ

もムモンアカシジミ、ウラキンシジミ、ウラナミアカシジミ、クロミドリシジミなど、今では容易に見られないゼフィルス類が多産していた場所でもある。その後、薪炭林としての更新が行われなくなり、山全体が鬱蒼<sup>うつそう</sup>と茂った環境に変化した結果チョウも激減した。近年、松枯れに伴って更新伐などが行われ森林再生が進む中で、美しいゼフィルスの復活となるか、注目される。



ドロバチの巣に寄生するナミハセイボウ



ムツバセイボウ(上) とツマアカセイボウ(下)

### 光城山古峯神社のセイボウたち

光城山山頂には古峯神社があり、トレッキング客が参拝していく。この社殿の柱には甲虫類などがあけた小さな穴が無数にある。六月ともなるとサイジョウハムシドロバチがこの穴にせつせとハムシの幼虫を運び込む。そのドロバチの留守を狙って巣の中に寄生をしようとするハチがいる。美しい虹色の光沢を持つセイボウの仲間である。じつとドロバチの隙をうかがう姿は悪役を連想させるが、つい見とれてしまうほどの美しい輝きである。

(松田貴子、那須野雅好)

# 5 光城山の桜と野鳥たち



「昇り龍」に例えられる、光城山の桜並木

## 桜の名所として

光城山の歴史は戦国時代にさかのぼるが(六四ページ)、現在、光城山は桜の名所として知られる。登山道の桜並木コース沿いには多くの桜が植栽されており、季節になると下から徐々に開花がすすみ、その姿は昇り龍にも例えられる。安曇平から東をみれば遠くからでもその龍を見ることができするため、春を待ちわびる安曇野の人々にとって、早春の格好の話題である。開花期には多くの人が訪れ、次第に咲きのぼる桜のなかでトレッキングを楽しんでいる。

植樹の始まりは大正時代にもさかのぼるとされ、地元市民や市民団体によって継続されてきた。現在は「安曇野市 光城山一〇〇〇人SAKURAプロジェクト」として市民と行政が協働しながら、植林だけでなく観光や歴史などに関する活動も行われている。

桜の品種は全国的にも広く植栽されているソメイヨシノが多いが、近年、同一クローンであることのリスクや、病害(特にテングス病)に弱いことが心配されている。これを踏まえて、プロジェクト内で桜の品種について試験植栽

が行われ、平成二七年度からは、ソメイヨシノに代わりジンダイアケボノが植栽されるようになった。どちらもエドヒガンを親とする品種でありよく似ているが、花を比較してみるとジンダイアケボノのほうは少し花が大きく、花弁のピンク色が濃い傾向がある。

光城山の山頂付近の道路沿いにはオオヤマザクラやヤマザクラなども植栽され、ソメイヨシノとは違った風情を楽しむことができる。これらは開花と同時に若葉が開き、新葉は赤みが強いことが特徴である。オオヤマザクラは安曇野の山野にも自生するが、花弁に赤みがあつて美しく、よく公園などにも植栽されている。一方でヤマザクラは西日本に多く、県内では南信にのみ自生する樹種である。

山頂近くではソメイヨシノの枝に寄生している複数のヤドリギも目にとまる。ヤドリギを間近で観察できる機会は少ないが、実はこの季節、ヤドリギもひっそり開花している。ヤドリギは雌雄異株で、それぞれが小さい花を咲かせる。熟した種は非常に粘り気のある物質に覆われており、枝にしっかりと付着する。そして「宿木<sup>やどりぎ</sup>」という名のとおり、そこから根を差し込んでソメイヨシノの栄養を吸い上げて成長するのだが、その一方で葉を茂らせて自ら光合成も行う「半寄生」の樹木である。桜の葉がしげると、ヤドリギは隠れてしまい、すっかり存在感がなくなってしまう。



満開のソメイヨシノとヤドリギ

## 光城山の桜たち



### ジンダイアケボノ

ソメイヨシノによく似ているが、少し花弁が大きく、ピンク味がある。ソメイヨシノに代わって植栽が進んでいる

### オオヤマザクラ

別名エゾヤマザクラ。開花と同時に若葉が開き、花弁も若葉も赤みがある。花序の下部は明らかに粘りがある



### ヤマザクラ

開花と同時に若葉が開き、若葉は赤いが、花弁は白い。花期はオオヤマザクラよりも少し遅い。花序の下部は粘らない

### カスミザクラ

市内の里山に多く自生している。ソメイヨシノが散る頃に、新緑の林のなかで若葉とともに白い花を咲かせる



## 野鳥たちの甘いごちそう

<sup>ふもと</sup>麓からソメイヨシノが咲きのぼつていくと、待っていたようにメジロの群れが訪れる。メジロは桜や梅など蜜のある花や、庭先においた果物など、甘味が好きな鳥。桜の花のなかへくちばしを差し次々に蜜を舐めている。蜜はカロリーも高く、メジロにとっても大切な栄養源となっている。

実はメジロはアジアの熱帯から亜熱帯地域に起源をもつ鳥で、南国ではハイビスカスのような大型の花の蜜を吸い、花粉の運び屋（送粉者）の役割をしている。メジロの舌は先が筆先状になっていて、蜜を吸うのに適した形をしている。この時期はまだ気温が低い日も多く、昆虫類の活動は限られる。桜にとってメジロは花粉を運んでくれる大切なお客さんなのである。

その一方で、桜のつぼみごと食べてしまう迷惑な来訪者もいる。ウソである。ウソも非繁殖期には群れで過ごしており、三月頃になると、梅や桜の新芽を好

んで食べるようになる。桜や梅の多い場所には自然と群れが集まり、大量に集結した年には、桜の開花が目に見えて少なくなるほど食べられてしまう。

人間にとって桜は楽しみ愛でる対象であるが、野鳥たちにとっては、これからの繁殖期を前にしっかりと栄養を蓄えるための重要な食料なのである。

（松田貴子）



桜を吸蜜するメジロ



桜のつぼみを食べるウソ

# 6 河川敷の生きものの

「不安定さ」が支える生物多様性

## 河川敷の環境

松本市境の奈良井川と梓川との合流点から始まる犀川は、三川合流部までの区間に広い河川敷を有し、その大部分は豊科地籍である。河川敷の内、普段は水が流れていないが洪水の際には水が流れるような場所のことを氾濫原<sup>はんらんげん</sup>という。氾濫原は、時には地形が変わるほど洗われることから、ともすると生きものにとって暮らしにくい環境のように思える。ところが、土壌が安定しないことから樹木が育ちにくく、草原や砂礫地が保たれるため、そのような環境を好む様々な生きものたちのよりどころとなっている。

また、堤防はその機能維持のために定期的な除草作業が行われ、草原環境が保たれている。草原環境は里地里山の管理放棄などにより各地で減少している貴重な環境であり、やはりその環境に依存する生きものたちが堤防に身を寄せ合っている。

このように、河川敷は自然的・人為的それぞれのかく乱によって「不安定さ」が保たれている特殊な環境であり、その環境に適応した特筆すべき生きものが多い。



雨の後の犀川河川敷。川幅が広がっている

## 氾濫原に生きる動物たち

初夏、河川敷を訪れると「ギョギョシ、ギョギョシ：」とけたたましい鳴き声が耳を衝く。氾濫原のヨシ原に営巣するオオヨシキリという鳥である。その騒々しさは「仰々しい」と聞きなしされ、かの小林一茶に「行々子口から先に 生まれたか」と詠まれたほどである。

氾濫原に降り立ち河原を歩くと、足元からパツと飛び立つ虫がいる。河原を代表する虫、その名もカワラバツタである。全身石によく似た灰褐色で風景に巧みに溶け込んでおり、その存在に気が付くのは困難を極めるが、飛び立った時だけに見せる美しい青灰褐色紋は見る者を魅了する。一方で、突如現れる鮮やかな紋様は、天敵に対しては意表を突く目くらましとなるようだ。カワラバツタは砂で締め固められたような河原には少なく、石と石の隙間の多いゴロゴロとした河原を好んで生息していることから、適度な氾濫によってその生息環境が保たれているのであろう。

また、河原は鳥類の繁殖の場としても利用されている。なかでもイカルチドリやコチドリ、イソシギなどは、巢に外敵が近づくと、親鳥はケガをしたふりをして巣から離れ、外敵の注意をひきつける「擬傷<sup>ぎしょう</sup>」という行動をとることで知られる。実際に見てみたい衝動に駆られるが、繁殖



イカルチドリ



カワラバツタ



コチドリ



イソシギ



たくさんの卵を背負うコオイムシ。翅だけでなく胸の部分まで埋め尽くされることもある



大型のガムシ類が持つ牙状の突起は、ゲンゴロウ類と見分けるポイントの一つとなる



豊科地域に多いオオヒメゲンゴロウ

を邪魔しないためにも、繁殖期（三〜六月）は生息地を訪れるのは避けよう。特にイカルチドリの卵は石によく似た色をしているため、不用意に河原を歩くと気が付かずに踏みつけてしまうかもしれない。カワラバツタ探しは九月になってからでも遅くはない。

## 田んぼの生きものたちのふるさと

氾濫原には、洪水や湧水などによってできた水たまりがあり、氾濫原湿地と呼ばれている。田んぼに生息している生きものたちが、稲作が伝わる前に生息していた本来の生息地である。毎年耕起によって掘り起こされる田んぼの環境は、時々起こる洪水によってかく乱される氾濫原湿地の

コオイムシの和名は「子負い虫」を意味し、メスがオスの背中に卵を産み付け、オスが卵を背負うことに由来している。卵を背負ったコオイムシは飛んで逃げることはできないため、命がけの子育てである。この卵には別のオスの子孫が含まれることがあるということを知らず、一層胸に迫るものがある。ガムシは水中で見られる甲虫の中では最大級で、胸に長い突起を持っており、一説にはそれを牙に見立て「牙虫（がむし）」と名付けられたとされている。この牙の役割は長らく未解明であったが、令和三年（二〇二一）の研究で安定して泳ぐことに役立っていることが明らかにになった。身近な生きものでもまだまだ分からないことがあるという好例である。

代替地にうってつけだったのだろう。犀川にも氾濫原湿地は点在しており、多くの生きものが生息している。その中でも、コオイムシやミズカマキリ、ガムシ、小型のゲンゴロウ類は目にする機会が多い。

## 堤防を彩るチョウたち

堤防に目を向けると、色とりどりのチョウが舞っている。中でも、ジャコウアゲハやクロツバメシジミ、ミヤマシジミは堤防の象徴的な種である。というのも、これらのチョウの食草は、乾燥した日当たりのよい環境を好んで分布するという点で共通しており、堤防は格好の環境なのである。クロツバメシジミはその名のとおりに後翅にツバメの尾のような突起（尾状突起）を持つ。その付け根の斑紋と合わせて虫の顔を模しており、天敵の攻撃を後翅に引き付ける効果があるとされている。似たような特徴を持つツバ



クロツバメシジミ。短い尾状突起が特徴



交尾するミヤマシジミ。左上は同じく河川敷でよく見られるウラナシジミ

メシジミも堤防に生息しているが、クロツバメシジミは尾状突起がより短いこと、黒い斑点が大きいこと、翅がやや黒ずんでいることから容易に見分けることができる。

ミヤマシジミの和名に付けられた「深山（みやま）」は、高山蝶をはじめ山地に生息する生きものが冠することが多いが、ミヤマシジミは中でも最も低地に分布する生きものの一つかもしれない。むしろ山地には分布せず、平地の河川沿いを主な生息地としている。そのため、県内では大きな川ごとに異なる遺伝的特徴を持っていることが明らかになっている。絶滅が心配されているチョウであるが、保護のためであっても他所の地域から持ち込むことは避けたい。交雑することで、その地域特有の遺伝的特徴が失われてしまう。

これらのチョウは、春から秋にかけてそれぞれ三回発生する。発生のタイミングはチョウによって異なるので、よく調べてから観察に出かけよう。

## 細流に舞う黒い輝き

犀川河川敷には小河川の流入部などの細流があるが、水質が良好な細流では黒みを帯びたトンボが緩やかに舞う姿を見ることが出来る。このトンボの舞いは五月頃から九月頃まで見られるが、実



ハグロトンボのハーレム。1匹の雄（左上）が、他の雄に産卵を邪魔されないよう見張っている

は二種のよく似たトンボがバトンをつなぐように発生しており、おおよそ五月から七月までに発生するのはアオハダトンボ、八月から九月までに発生のピークを迎えるのがハグロトンボである。いずれも金属光沢のある黒っぽい翅と



アオハダトンボの雄



アオハダトンボの雌

深緑色の胴体を持ち、特にオスはよく似ているが、メスは比較的に見分けるのが容易である。アオハダトンボのメスは翅の先端に白い紋があり、ハグロトンボのメスは全身の黒みが強い。慣れないうちはメスを頼りに見分けると良い。両種とも、繁殖期には一匹のオスが複数のメスを囲うハーレムを形成し、他のオスが近づくと激しい追払い行動を見せる。バチバチと大きな音を立ててドッグファイトを繰り返す。広げる姿は、普段の緩やかな動きからは想像がつかない。両種は姿かたちだけでなく生息環境や生態も似通っているため、競合しないよう発生のピークをずらすことで棲み分けているのであろう。限られた資源を効率よく分け合う両種の生存戦略を前に、我が身を恥じるばかりである。

## ケシヨウヤナギの生きる場所

ケシヨウヤナギ（化粧柳）は晩秋から春にかけて紅色を帯び、またしばしば若い枝が白蠟質<sup>はくろうしつ</sup>におおわれて美しいことから名づけられたヤナギ科の樹木である。国外では朝鮮半島や中国、ロシアなどの寒冷地に多く自生しているが、日本では北海道と長野県の一部、比較的冷涼な河川敷にしか分布していない。このため氷河期の生き残りと考えられている。

ケシヨウヤナギといえば上高地が有名であるが、梓川沿



平成29年（2017）に市内の梓川の河川敷で確認したケシヨウヤナギ。この個体は2年後には見られなくなってしまった

## 変わりゆく河川敷

このように多種多様な生きものをはぐくむ河川敷である  
いに流れ下った松本平にも自生している。ここではかく乱を受ける河川敷の砂礫地にみられる。安曇野市内では、豊科・熊倉で複数のケシヨウヤナギが確認され、梓川水系の最下流に位置することから昭和六二年（一九八七）に旧豊科町の天然記念物として指定された。しかし残念ながら、令和二年（二〇二〇）に最後の一本の枯死が確認された。土壌が安定して生育環境が大きく変化したことも原因のひとつであろう。逆に言えば適した環境があれば、種が飛来して再び根付く可能性はある。しかしそこもまたいつ大水で流されるかわからない環境でもある。その不安定な環境こそがケシヨウヤナギの生きる場所なのである。

が、近年は河川敷特有の環境が失われつつある。ここに紹介した多くの生きものも絶滅が心配されており、数を減らしている。姿を消した生きものはケシヨウヤナギだけではなく、砂礫地に営巣するコアジサシは近年繁殖が確認されておらず、砂地に生息するカワラハンミョウは既に絶滅したとみられている。治水事業により洪水が起こりにくくなったことで、川の流れが固定化し、本来氾濫により草地や砂礫地が保たれる場所の樹林化が進んでいることが主な要因である。樹林化は堤防の日当たりをも悪くし、さらに外来植物の繁茂や護岸工事が追い打ちをかけ、本来の堤防の環境を好む植物や、それをよりどころとする動物も生息地を追われている。また氾濫原湿地も洪水によるかく乱の頻度が減り、多様な生きものが生息できる環境ではなくなりつつある。

我々の生活を守るために川を安定させることが、河川敷の「不安定さ」を好む生きものたちにとって仇になっているということは、何とも皮肉な現実である。災害から街を守る治水事業が必要不可欠なのは言うまでもないが、だからと言って生きものを絶滅させてしまつては地域の生物多様性が失われ、いずれ我々の生活にも悪影響が出てくる。なんとかして両立する道はないものか。

（斉藤雄太、松田貴子）

# 7 安曇野で冬を越す白鳥たち

豊科に白鳥が舞い降りた

安曇野の白鳥の飛来は、いまや冬の風物詩として知られ、彼らの飛来を心待ちにしている人も多い。

安曇野における白鳥の歴史はそれほど古くない。初めて白鳥が記録されたのは昭和五九年（一九八四）の大晦日、犀川のダム湖に五羽のコハクチョウが飛来しているのが確認された。

この湖は中部電力株式会社が犀川に発電用取水口として設置した堰によるダム湖で、広い開水面をもち東岸が段丘になっているため容易に人が近づくことができる。このため水鳥にとって安心して過ごせる空間となっ



横通岳を背景に飛ぶコハクチョウ



豊科の白鳥湖 多くの見物客が訪れる

ており、犀川水系においてガン・カモ類の最多の飛来地となっている。

ただし一帯は猟区であり、猟が始まればすべての水鳥は即座に去っていつてしまう。そこで、野鳥関係者がハンターに協力を呼びかけ、周辺での発砲が自粛された。これが功を奏し、この年は最高五六羽の白鳥が越冬し、それ以来、安曇野は白鳥の越冬地として定着したのである。当時、この優雅な来訪者は大きな話題となったようだ。

このダム湖の白鳥たちは、平成六年（一九九四）明科の御宝田の池にも移りはじめた。安曇野での越冬数はその後増え続け、『アルプス白鳥の会』の記録によると、最初の到来から一〇年を過ぎた頃からは五〇〇羽を超えるようになり、その後はおよそ五〇〇〜一三五〇羽（日最高数）で推移している。現在、県下最大の飛来地である。飛来する白鳥はほとんどがコハクチョウであるが、オオハクチョウが数羽程度みられる年もある。また、毎年ではないがアメリカコハクチョウの飛来も確認されている。

## 白鳥の生態

コハクチョウはユーラシア大陸北部の湿原が広がるツンドラ帯で繁殖し、冬季になるとヨーロッパ、カスピ海周辺、大韓民国、中華人民共和国東部、日本などへ南下し越

冬する。食性は草食性が強く、日本の越冬地では、湖沼や河川で水草の葉や根などを採餌したり、陸上で落ち穂や青草を食べて過ごす。潜水することができないため、水の深さは一層以内でなければ餌を得ることができない。

ところが国内ではため池や湿地をはじめ、水草が豊富な浅い水域は埋め立てられるなど造成が進み、多くが失われてしまった。特に新潟など日本海側で自然的要因により形成された「潟」と呼ばれる低湿地も、時代とともに人為的影響を受け、水鳥たちが越冬する環境は大きく変化した。

人間による給餌にはこうした背景もある。一方で野生動物の餌付けについては全国的にも議論がなされており、野生性が失われることや、野鳥が集中して生息することで感染症のリスクが高まることなどが懸念されている。このため給餌については配慮が求められている。



水張り水田で採餌するコハクチョウ

## 水辺の鳥の宝庫

白鳥湖ではコハクチョウと共に多くの水鳥が飛来し冬を越す。マガンやオオヒシクイも少数ではあるが白鳥湖やその近くの水田などに姿を見せ、両種ともV字型に隊列を組んで飛ぶ。興味深いのは大勢で採餌していても必ず「見張



田んぼで採餌するヒシクイの群れ



白鳥湖のマガモ、オナガガモの群れ



ハクチョウの周りに集まるカモたち

り番」がいて、首を長くして周囲の警戒を怠らないことである。

カモ類も数多く集まってくる。マガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、キンクロハジロなどは群れて数も多い。河床が浅いところでは、コハクチョウの周りにたくさんのカモが集まる。コハクチョウが採餌の際に川底をかく乱するのを狙って一斉にカモたちも首を突っ込み、おこぼれに預かるうとする行動が観察できる。嘴が極端に広く大きいハシビロガモも姿を見せることがある。古来「巡り鴨」とも呼ば



ミコアイサ雄（左）とカワアイサ雌（右）



面白い顔つきのハシヒロガモ

れ、集団でぐるぐると反時計回りに回転し水流を起こし、餌となるプランクトンなどを円の中央に集めて採餌するという面白い習性を持つ。

潜水ガモとして知られるカワアイサやミコアイサも稀に姿を見せる。カワアイサは近年諏訪湖に大挙して飛来し、特産のワカサギに深刻な漁業被害が発生している。



白鳥湖近くに姿を見せたハイタカの雌

害が発生している。白鳥湖の周辺には毎年少数の群れが飛来している。ミコアイサの雄はパンダを思わせる配色で野鳥愛好家からの人気が高い。いずれも警戒心が強く、近くで見ることが難しい。

集まるカモ類を狙って姿を見せる猛禽がオオタカやハイタカである。河畔林の枝などに止まり、群れから離れたカモ類を狙う。

白鳥湖やその周辺の河川ではカワセミを見かける。青い光沢の羽で覆われた美しい鳥で、漢字では宝石のヒスイと同じく「翡翠」と表記するが、ヒスイの語源がカワセミに由来するともいわれている。冬枯れの野にカワセミの輝きはいっそう増して見える。

（松田貴子、那須野雅好）



カワセミの雌

# 安曇野の景観をつくる屋敷林

## 屋敷林とは

安曇野の景観は、安曇野の大きな魅力だと感じている人が多い。その景観を構成するひとつの特徴として屋敷林があげられる。

屋敷林について、じつは明確な定義があるわけではない。日本各地でみられるが、地域によって大きく役割や形態が



屋敷林や堰が集落の景観をつくる（飯田）

違うからである。おおまかに言えば屋敷林とは「屋敷内の家屋の周囲に人為的に植栽された樹林」である。

安曇野の屋敷林のもともとの役割は、防風林であったと考えられている。安曇野を含む松本平において、穂高や松川村などの北部では特に北や西方向からの風、松本周辺では南からの風が強いことは、これまでの気象データにもあらわれている。特に春の強い南風は松本平に住む多くの人を経験的にも実感している。安曇野の広い扇状地では強風や突風を遮るものはないに等しい。民家の屋根といえは、かつては茅葺きや板などの自然素材が使われていたように、構造的にも現在のように頑丈ではなかった。人々が家の近隣に植林することによって防風の効果を求めたことは自然の成り行きだろう。

ここでは豊科の屋敷林を紹介しよう。豊科では特に梓川や犀川の西に広がる集落に屋敷林がみられる。元来は扇状地であったところに、主に江戸時代に堰を通すことによって土地が切り開かれ、集落が形成されたり、道が整備されてきた歴史をもつところが多い。そういったところでは、堰や道に沿って家々が並び屋敷林が育ち、現代に受け継がれて集落の景観をつくっている。



広葉樹で構成される屋敷林（上）と屋敷神（下）（重柳）

## 屋敷神をもつ屋敷林

また豊科や明科では、現代の堤防など大規模な治水施設が建設される以前は、度重なる河川の氾濫に対峙してきた歴史をもつ。豊科の重柳はその地名からも、一帯は犀川の氾濫原と重なりヤナギ類が多く自生していたことがうかがわれる。

重柳には、犀川の洪水被害を鎮めるための屋敷神（伊勢宮）がある民家の敷地内に祭られている。その起源は近世初頭にまでさかのぼるという。そしてその周囲は、ケヤキを主体として、まさに鎮守の森ともいえるべき樹林が形成されている。主な樹種はケヤキのほか、エノキ、エドヒガン、イチチョウである。平成三〇年（二〇一八）に樹木調査を行った結果、胸高直径が七〇センチを超える樹木が八本も確認された。これらが主体となって安曇野でもほかに類を見ないほどの広葉樹の樹林を形成している。この伊勢宮は今も大切にされ、毎年八月に当家によって祭りが行われている。



樹種の上位10種とその本数

|    | 樹 種    | 本数   | %    |
|----|--------|------|------|
| 1  | ヒノキ●   | 171  | 20.4 |
| 2  | イチイ●   | 139  | 16.5 |
| 3  | スギ●    | 117  | 13.9 |
| 4  | モミジ類●  | 57   | 6.8  |
| 5  | サワラ●   | 33   | 3.9  |
| 6  | アカマツ●  | 33   | 3.9  |
| 7  | ケヤキ●   | 27   | 3.2  |
| 8  | チャボヒバ● | 23   | 2.7  |
| 9  | ビャクシン● | 21   | 2.5  |
| 10 | ネズコ●   | 14   | 1.7  |
| 合計 |        | 635本 | 100% |

●常緑針葉樹 ●落葉広葉樹

## 屋敷林の樹種にあらわれる地域性

平成二九年（二〇一七）から三〇年にかけて、安曇野市内の八軒の屋敷林の樹木八三九本について調査が行われた。このうち、上位一〇種の樹種の構成を右表に示す。上位三位のヒノキ、イチイ、スギが突出して多く、全体の約半数を占める。また落葉広葉樹よりも常緑針葉樹の方が圧倒的に多い。

一位のヒノキは有用な樹木としてよく植栽される。東日本の屋敷林ではスギのほうが一般的であるが、安曇野ではヒノキの方が好まれている。これはもともとスギの自生がないことも要因だと思われる。二位のイチイは庭木や生垣



ヒノキとサワラで構成される屋敷林（細萱）

などで一般的に使われる樹木である。

上位一〇種のなかにはヒノキのほかに、サワラ、ネズコがあがっているが、これらは「木曾五木」として有名な価値の高い樹種である。本数は多くなかったが、木曾五木の残り二種のコウヤマキとアスナロもみられた。このうち、サワラ、ネズコは安曇野の北アルプスの山林に自生する。これらは古くから建築材料に利用されてきた身近な樹木である。安曇野の屋敷林にこれらの樹種が植栽されてきたの

は、単に防風の役割だけではなく、こうした歴史や価値観が反映されていると考えられる。  
ほかにも屋敷林を構成する樹木の中には、地域の自然植生と共通する植物が多くみられた。例えば、モミジ類のう



国の重要文化財曾根原家住宅における屋根の吹替えの様子（2018年）  
かつてはこのような板屋根がみられ、水に強いサワラが多く用いられた



屋敷林に多く植栽されているオオモミジ（細萱）

ち、半数がオオモミジであった。オオモミジは安曇野の山林に多く自生する種で、紅葉も美しいことからよく用いられたのだろう。このほかコマツガやチョウセンゴヨウ、クロモジ、シナノキ、ソヨゴ、コミネカエデなどがみられた。昔は庭木にする苗木は現在ほど流通しておらず、身近な山林から採取することが多かったのだろう。安曇野の屋敷林には地域の自然植生が映し出されている。

（松田貴子）

# 9 田淵行男と千国安之輔

## 田淵行男の愛した昆虫たち

豊科の見岳町に小さな記念碑がある。南を向いて慎ましくやかに立つ石碑には「この地史の落し子たちに安らかな旅をつづけさせねばならぬ」と刻まれている。

山岳写真家であり昆虫の生態研究家で知られる田淵行男が、昭和三四年（一九五九）刊行の著書『高山蝶』（朋文堂）

の冒頭に残した一節である。地史の落し子について田淵は次のように解説している。



見岳町の記念碑

「高山蝶については、その適地が高地へ絞られていくのを追って移住したものと考えられる。つまり水陸の分布の変動により退路を断たれて故里へも帰れず、さりとて温暖にも馴致できず、やむなく高地へ閉じ込められたというわけである。こう考えてくると、これらの小動物は、いわば地史の落し子、洪積世の遺児ともいえる文字どおりの貴重な天然記念物である。（後略）」

高山チョウについて田淵は、タカネヒカゲを「ハイマツ

仙人」、ミヤマモンキチョウを「山の娘」の愛称で呼ぶなど、単に生態研究の対象というだけでない深い愛情を持って接していた。碑の一節は、高山帯に最後の生活圏を求めた九種のチョウたちに向けた慈愛の言葉である。

記念碑のある場所に田淵が転居したのは昭和三六年（一九六一）、五六歳のことである。東京から穂高牧に疎開後、初めての著書『田淵行男 山岳写真傑作集』（一九五一年、朝日新聞社 アサヒカメラ臨時増刊）を四六歳で出版し、遅咲きのデビューを果たしてから十年の後になる。

見岳町に拠点を移してからも精力的に撮影や執筆に取り組んだ田淵は、転居の翌年『小さなラガーたち アシナガバチの生態』（一九六二年、講談社）を出版する。小さなラガー



田淵行男（自宅の居間にて 昭和39年（1964））

たちとは、ユニホームを連想させる色彩と巢にひしめく姿をラグビー選手に見立ててのことである。頁のタイトルも《女王奮闘》《傷心の女王たち》《招かざる客 スズメバチの襲撃》など小さな生き物を慈しむ言葉であふれている。ただ、この大著には印刷の出来に大きな不満があり、自分では一冊も受け取らなかったという。常々「本が私のすべてだ」と語っていた田淵の、完璧を迫り求める強い意志を実感させるエピソードである。この大きな心残りは、昭和六三年（一九八八）に出版された生前最後の著書『アシナガバチ 日本産全種生態』（講談社）をもつてようやく完結することになる。



ヒメギフチョウ♀  
(細密画)

高山チョウやアシナガバチと共に、田淵が生態観察に膨大な時間を費やしたのが、ギフチョウとヒメギフチョウである。その研究成果は、『ヒメギフチョウ』（一九五七年、誠文堂新光社）、『ギフチョウ・ヒメギフチョウ』（一九七四年、講談社）として世に送り出されている。田淵の主な観察地は、穂高の牧や大町、白馬であつたが、この小ぶりなアゲハチョウは豊科にも生息している。光城山が桜の花の見ごろを迎えるころ、ヒメギフチョウが可憐な姿を見せる。サクラやスミレで吸蜜する姿は「春の女神」と呼ぶにふさわしい美しさ

を持つが、同時に春の儂い命（スプリング・エフェメラル）の象徴でもある。

田淵が暮らした見岳町の家は、道路の拡幅に伴い今ももう面影すらないが、その庭は野趣あふれるものであつた。チョウに関わる植物が多く植えられ、その様子は『安曇野挽歌』（一九八二年、朝日新聞社）の中に見て取れる。「我が庭の博物誌」の頁の写真で地面を覆うウスバサイシンは、ヒメギフチョウの食草である。他にもキハダ、エノキ、シモツケ、カラタチやサンショウなどの食樹も名を連ねていた。チョウたちの来訪に心を躍らせていた田淵は、自宅周辺が変貌し緑が少なくなっていく中で、この場所を「虫たちにとつての駆け込み寺」と表現していたが、我が家の庭で育ちゆく昆虫はことのほか愛おしかったのであろう。チョウに限らずアケビコノハやシンジュサンなどのガの他、ハキリバチが丸く切り取った葉や、ハルニレの葉に残されたニレハムシの食痕にさえ美しさを見出してカメラを向けた田淵。そこには虫への限らない愛情が感じられる。



5月初旬の我が庭（昭和57年（1982））

## 安曇野のファール千国安之輔

平成一七年（二〇〇五）三月一〇日、クモ研究家千国安之輔<sup>ちくにやす</sup>は、九三歳の生涯を終える。千国を師と仰いだ新海栄一氏（日本蜘蛛学会評議員、東京蜘蛛談話会会長）が述べた弔辞の一節を紹介する。

先日、東京都写真美術館に行ってみました。企画展は『ナチュラリスト田淵行男の世界』でした。田淵行男氏は昭和二〇年から安曇野に移り住まれた日本を代表する山岳写真家であり、最初の昆虫写真家でもあります。このすぐ近くに記念館もございます。私は、この写真展を見ていて、ふと、千国先生が目指したのはこの田淵行男氏なのではなかったのか。との思いが込み上げてきました。田淵氏の高山蝶やアシナガバチなどの生態写真も、多くの昆虫のスケッチも、さらに自然から学び、様々な現象を読み取る姿勢も、実によく似ています。千国先生はおそらく、この六歳上の写真家をライバルとして写真撮影と研究を続けられたのではないのでしょうか。

千国は、田淵の六歳下である。戦後、南安曇郡内の理科教師は、研修会の講師として何度か田淵を招いている。理科教師であった千国は、田淵から直接撮影技法を学んでいたことが想像できる。

千国は安曇野のファールと評されているが、その理由は、千国の一五冊の著書を見れば明らかである。

『ウドンゲのなぞをとく』

（一九七二年、大日本図書）は、青少年読書感想文

全国コンクール小学校課題図書である。『オトシブミ』（一九七八年、偕成社）は、サンケイ児童出版文化賞大賞を受賞している。受賞理由に「子どもたちは未来である」という言い方がびつたりする主張を持った本。この感動が大賞を射止めた。写真と文章のバランスがいい。特に観察のこまかさはおどろくべきもの」と記されている。

本人の「あとがき」には、「ひとりの女の子がひろってきたクリの葉の筒に、クラスのなかまが疑問を抱き、そのなぞをとくためにグループで研究活動をはじめ。友だちの協力や教師の助言と指導を受けながら二年間にわたる観察をつづけ、ついにオトシブミの一生の生態をつきとめていくというのが、この本の内容です。これは、私が小学校の教師をしていたとき、実際にあったできごとです。」とある。登場する名前は、担任した子どもたちの名前なのである。モデルは、堀金小学校三年・四年のクラス。その時の子どもたちはもう七〇を超えている。教え子の一人、曾



『オトシブミ』（1978年）表紙



クモ標本液浸資料（豊科郷土博）



ちくに観察会(令和元年(2019))

根原節生氏は、当時のことを「休日になると三股や烏川溪谷をフィールドにすがれ追いや虫捕りなど千国先生と自然の中で興じていた。」と話してくれた。千国の著書は、図鑑としてだけでなく、対象のすぐれた知恵と技能の記録であり、観察者の感動の記録でもある。

千国は、二〇代後半の豊科尋常小学校勤務時代に郡内の理科教師と共に蜘蛛の生態を調査し、『日本アルプス山系の蜘蛛』（一九四一年、信濃教育会南安曇部会）を発行する。その液浸の資料は、安曇野市教育会から寄贈され、豊科郷土博物館に収蔵されている。

平成二九年（二〇一七）に千国が生涯をかけて研究を進めてきたフィールドの保全と子どもたちの自然環境に関する教育普及を目的として『ちくに生きものみらい基金』（元資はご遺族千国峰子氏より寄贈）が設立され、利用されている。千国の遺志は生かされている。

## 二人のナチュラリスト

安曇野を拠点に活動した田淵、千国という二人のナチュラリスト。高山チョウとクモと、観察対象は違うが、写真や文章で小さな生き物の驚くような生態を多くの人に伝えている。その自然を見つめる温かい眼差しは、それぞれの著書の随所に見ることができる。わが国の生物学に確かな足跡を残し、豊かな安曇野の自然を内外に示した。「自然」は安曇野の代名詞であり、文化や産業など人々の暮らしもその上に成り立っている。しかし近年はどうだろう。子ども感性を養うカブトムシやホタルが見られる場所はほとんど見当たらない。里山は放置された結果、ササや高木に覆われた暗い環境が広がる。東山の地滑りを止めてきたアカマツは松枯れで無残な姿となるなど、自然が豊かなはずだった安曇野も大きく変貌した。生前、田淵は建設の計画が進む田淵行男記念館に、本物の虫に触れることができる「飼育室」の設置を望み、千国は児童図書を通して生き物の面白さを説いた。二人は未来を担う子どもたちに目を向けていたのである。安曇野に残された自然を守り、活用しながら、子どもたちに二人のナチュラリストの想いを伝えたいものである。

（中田信好、平沢重人、那須野雅好）

# 1 発掘調査からみた豊科

## 豊科の地形と遺跡の分布

豊科地域は、犀川の右岸と左岸で地形が異なる。犀川左岸は、梓川や犀川が運搬した砂礫が堆積した平地が広がる。右岸は二段の河岸段丘が発達し、背後は筑摩山地に続いている。

豊科地域の遺跡分布は、その地形と密接に結びついている。犀川左岸の砂礫からなる平地では、梶海渡遺跡、吉野町館跡などで平安時代の遺構や遺物が見つかっており、

吉野町館跡、鳥羽館跡、飯田砦跡などの中世の館跡も残る。犀川右岸では段丘上に遺跡が分布している。

濁沢川が犀川にそそぐ両岸には、北に町田遺跡、南に小瀬幅遺跡がある。この両遺跡とも弥生時代と平安時代の集落跡であることがわかっていく。筑摩山



小瀬幅遺跡出土の弥生土器

地には、上ノ山窯跡群や菖蒲平窯跡群といった古代の窯跡、光城跡や田沢城跡などの中世の山城が存在する。

## 縄文時代の豊科

豊科地域では、縄文時代の遺跡は犀川右岸及び筑摩山地に少し見られ、犀川左岸では熊倉や成相などでわずかに遺物が採集されているのみである。

このうち筑摩山地にある上ノ山窯跡群では、昭和六二年（一九八七）の発掘調査で、○八地区から縄文土器、○五地区から石鏃が出土した。縄文土器は、小破片であるが三



上ノ山一帯から出土した石鏃

六点出土し、時期は早期から中期初頭にわたる。この調査以前から、上ノ山一帯では縄文時代の土器や石器が採集されており、中には長さ八・五センチの大きな石鏃（写真中央）もある。（土屋和章）



豊科の主な遺跡

# 2 町田遺跡

## 町田遺跡の弥生集落

町田遺跡は、豊科田沢の町田地籍に所在する弥生時代及び平安時代の集落跡である。この遺跡では、砂防事業に際して平成一〇年（一九九八）に豊科町教育委員会が発掘調査を実施し、竪穴住居跡一〇棟、掘立柱建物跡三棟などの遺構と弥生土器・石器が見つかった。

町田遺跡の集落は、出土土器から弥生時代中期後半に営まれたことがわかった。この時代は、北信地域を中心とする栗林式土器の文化圏が、東・中信地域、北関東・北陸の一部地域にまで拡大した時代であり、土器だけでなく石器や墓制に独自性がある。これに対し、南信では伊那谷を中心として北原式土器の文化圏が広がり、諏訪盆地や松本盆地は、両文化の接触地域となっている。

## 稲・武器

弥生時代は、日本列島で水田での稲作が始まり本格化した時代とされる。これは単に生業として狩猟採集に農業が

加わったということにとどまらず、共同体の枠組みと、それを構成する人々が協業する社会システムが大きく転換したことを意味する。

安曇野の弥生文化の萌芽は、芝宮南遺跡（穂高）、みどりヶ丘遺跡（明科七貴）などで見られ、町田遺跡や黒沢川右岸遺跡（三郷小倉）が続く。みどりヶ丘遺跡や黒沢川右岸遺跡では、土器に粉の痕跡が残っており、稲作が始まっていたことがわかる。

弥生時代は、武力的な争いが本格化した時代ともいわれる。町田遺跡からは、弥生文化に特徴的な磨製石鏃と呼ばれる石の鏃が多く出土した。未完成品が多量にあり、素材となった剥片や研磨に使った砥石も出土したことから、この集落で素材の粗割から仕上げの研磨・穿孔まで行われていたと考えられる。磨製石鏃は、松本市の県町遺跡、出川南遺跡などでも多出している。各集落がこの石鏃を武器



磨製石鏃（長さ 左：4.62cm・右：2.18cm）



1・2・3・4 打製石包丁  
5・6 大型刃器  
7・8・9・10・11 太型蛤刃石斧

町田遺跡出土石器

として製作・保有したと仮定すると、松本盆地の集落どうしが緊張関係にあったのかもしれないと想像できる。

## 長野盆地の石斧と伊那谷の刃器

大陸系磨製石器と呼ばれる、弥生文化特有の石器の一群がある。このうち、太型蛤刃石斧という長さ二〇センチ近い重量感のある両刃の磨製石斧と、扁平片刃石斧という長さ一〇センチ程度の薄い磨製石斧は、弥生時代中期後半に長野盆地の榎田遺跡・松原遺跡などで製作されており、これらの遺跡が日本列島における一つの製作拠点であったことがわ

かっている。長野盆地製の石斧は、石川県や神奈川県などでも出土しており、半径約二〇〇メートルにわたる広い地域で流通したことがわかってきた。町田遺跡でも長野盆地から運ばれてきたと考えられる太型蛤刃石斧が五点、扁平片刃石斧が三点出土している。

これと同じ時代、南信の伊那谷では打製の大型刃器、打製石包丁などの石器が使用された。伊那谷の石器群は、塩尻市の和手遺跡で弥生時代後期の集落から出土している。今回、町田遺跡の石器を見直したところ、打製の大型刃器や打製石包丁が存在することがわかってきた。伊那谷で大型刃器を使用した理由は、天竜川の河岸段丘で営まれた陸稻栽培や畑作で使用するためだとする説がある。この見方にたつと、犀川の河岸段丘上に広がる町田遺跡に伊那谷と共通する石器群があることには納得がいく。

現在の長野県は、県歌「信濃の国」にある「四つの平」ごとに文化が異なり、おそらくその起源は定住の始まった縄文時代にまで遡る。長野県では、縄文時代の多様な文化圏が、弥生時代中・後期に南北の大きな文化圏に収斂していく過程が明瞭で、この動きが列島単位で進行したクニの誕生と軌を一にしているという考え方もある。町田遺跡の弥生人は、長野盆地・伊那谷という隣接地域の文化を上手に取り入れ、集落どうしが対立する緊張の時代を生き抜いたのであろうか。

(土屋和章)

# 3 上ノ山窯跡群

## 古代の「土器づくりのムラ」



上ノ山窯跡群遠景（調査前）

上ノ山窯跡群は、ＪＲ篠ノ井線田沢駅東方の上ノ山（標高八四一・四メートル）に連なる山中に位置する。今はゴルフ場のグリーンが映えるこの一帯も、数十年前までは木々がうっそうと茂る丘陵地だった。この丘陵地は西側こそ比高二〇〇メートルに及ぶ断層崖を形成しているが、東側は比較的穏やかで浅い谷が発達している。また、随所に風化した粘土層が露出し、湧水も豊富だった。

ここに遺跡が発見されたのは、昭和五二年（一九七七）。林道開設の際に、炭の混じった真つ黒な土の中から無数の土器のかけらが出てきたことによる。その後、豊科高等学校地歴クラブ生徒らが実施した分布調査等によって、須恵器という古代の土器を焼いた長野県下有数の生産遺跡であることがわかってきた。

須恵器は青灰色の硬質な土器で、穴窯で高温で焼かれる。窯を築くに適当な斜面、良質の粘土や燃料となる薪木の存在、そして消費地である松本盆地に近いこと。この丘陵は「土器づくりのムラ」として絶好の場所だったに違いない。

## 発掘調査の実施

そのムラの姿が、ゴルフ場造成に先立ち昭和六二年（一九八七）に豊科町教育委員会と多くの大学が参加して実施した発掘調査によって明らかになった。

調査は地形と遺跡のまとまりをもとに一八の地区に分けて実施された。その結果、今から千数百年前の奈良・平安時代に須恵器を焼いた穴窯が一七基、陶工たちが工房や住

## 窯の構造

須恵器の窯は斜面に細長い穴を掘って、ワラなどを刻み

居として使用した<sup>たてあな</sup>建物<sup>たてもの</sup>が二五軒発見されている。また、土師器<sup>はじき</sup>という弥生土器<sup>やよいどき</sup>の系譜をひく褐色の素焼き土器や、その椀・皿の内面を磨き炭素を吸着させて質感を高めた黒色土器<sup>こくしよくどき</sup>を焼いた窯<sup>しやうせい</sup>（焼成坑）も見つかっている。さらに、粘土を貯蔵した穴や、多数の炭窯も発見された。一窯跡群内でこれだけ多くの窯や建物などが発掘されたことは長野県において例が無く、土器づくりの一連の体系と、その展開を知ることができる貴重な発見となった。



調査中の上ノ山窯跡群  
（手前：02地区、奥：01地区）



須恵器の窯（02地区1号窯）

込んだ粘土で天井を架けたもので、ちょうどトンネルを斜めにしたような構造をしている。燃料を燃やす焚口<sup>たきぐち</sup>から奥の煙出し<sup>けむりだ</sup>まで、長さ四〜八メートル前後、幅一・二メートルほど、古い窯ほど大きく、新しくなるにつれ小さくなる。製品を焼き上げる焼成部<sup>しやうせいぶ</sup>の床は三〇〜四〇度の急傾斜をなしていた。焚口の手前の斜面は灰原<sup>はいばら</sup>といい、窯から掻き出された炭や灰、焼き損じの須恵器が厚く堆積している。

穴窯で高温で焼く須恵器の技術は古墳時代に朝鮮半島から伝わり国内に伝播したもので、時の権力者や有力者と密接に結びついていたことが知られている。上ノ山窯跡群においても、開窯にあたって有力者の関与があったことは間違いない。

## 生産された土器はどこへ？

上ノ山窯跡群では、お椀や皿類、大小の壺や甕<sup>かめ</sup>など、人々の日常生活に欠かせない様々な器が焼かれていた。その量は整理用コンテナで千箱以上に及ぶ。発掘調査で出土した土器は灰原に捨てられた失敗品がほとんどなので、実際はその何倍もの土器が焼かれていたことになる。

松本市岡田から四賀にかけて連なる山中には、上ノ山窯跡群の他にもいくつもの須恵器窯跡群が分布している。これらの窯跡群は、松本盆地の消費地に一元的に須恵器を供



11地区の竪穴建物（左）と土師器の窯（右）

一方、土師器や黒色土器を焼いた窯は、須恵器窯のように大がかりでなく、地面を浅く掘り窪めた簡単な構造をしている。規模は一〜二坪の長方形のものが多く、また須恵器窯より遅れて出現し、竪穴建物と近接して発見された例も多い。

給していたと考えられている。上ノ山窯跡群で生産された須恵器も、松本盆地に暮らす人々の食膳に並んだであろう。

一方、上ノ山窯跡群では脚に蓮華<sup>れんげ</sup>が描かれた硯<sup>いん</sup>や、集落遺跡では見かけない台の付いたお椀や皿なども焼かれている。これらは、寺院や、この時代に松本盆地にあったとされる信濃国府<sup>こくふ</sup>（今でいう長野県庁）などに納められる予定のものだったかもしれない。

## ソバも栽培されていた〜多様な生産〜

谷底に堆積していた粘土に含まれる花粉化石を分析したところ、須恵器生産が展開する時期に樹木花粉が減少し、それに伴ってソバの花粉が出現することが明らかになった。また、貯蔵されていた粘土にもソバの花粉を多量に含んだ例があった。燃料材として森林が伐採され開かれた空間が畑地へと開発されていたこと、さらに土器生産とソ



脚に蓮華が描かれた硯（高さ：8.2センチメートル）



上ノ山窯跡群近景（15地区から14地区を望む）

バ栽培が同時に行われていたことを知ることができる。

窯跡群内では炭窯も発見されている。また、窯を見下ろす高台に見つかったひと際大きな竪穴建物跡からは、粘土の他に、鉄製の鎌や糸を紡ぐ道具なども出土した。土器づくりだけでなく、多様な生産すなわち山林資源の経営・山野用益活動が行われていたことがわかる。

### 「土器づくりのムラ」の終焉

平安時代になると、松本盆地の土器は東海地方から多量に持ち運ばれた灰釉陶器かいゆうとうきと在地で生産された土師器で占められるようになり、須恵器は次第に姿を消していく。

上ノ山窯跡群においても、須恵器窯が小型化し、土師器や黒色土器の生産が盛んになり、竪穴建物が出現した。

松本盆地に一元的に須恵器を供給した組織された生産体制が変容し、小規模分散化したことがわかる。多様な生産の一部には、私的な活動もあったであろう。

こうして、奈良時代から二〇〇年近く続いた上ノ山窯跡群での土器づくりも、終焉を迎えることとなる。

以後、この丘陵から土器を焼く煙が立ち上ることはなかった。花粉化石の分析からは、ほどなく荒れ地が拡大し、やがて二次林としてのアカマツ林が形成されたことが明らかにになっている。

（山田真一）

# 1 小領主たちの館跡

中世、豊科地域で大きな勢力を持っていた武士として、細萱氏がいる。矢原庄の開発にも携わったとも考えられており、細萱の殿村に残る館跡は、室町時代の一五世紀にさかのぼるともいわれる。戦国時代前半には、穂高神社の遷宮の大旦那を務め、また堀金の大同寺に薬師如来像を寄進するなど穂高や堀金方面にも勢力を伸ばしていた。また犀川右岸域では、小県郡の海野氏の流れを汲む光氏や田沢氏が城館を構えていた（六四頁参照）。

一方、豊科地域の中南



細萱氏館跡遠景

部には地侍という小領主が散在していたことが、遺構や史料から確認できる。

上鳥羽の東部の段丘上に鳥羽館跡がある。その規模は東西四八畧、南北七二畧、北西隅に堀跡を残している。

館跡からは、一五世紀

後半から一六世紀に製造された陶磁器などが出土している。また戦国時代後期の天正七年（一五七九）には、諏訪大社下社春宮の造営のため、鳥羽郷に割り当てられた費用



鳥羽館の堀跡

徴収の代官を、丸山菅三という人物が務めており、丸山氏が館主であったと考えられている。

このほか丸山氏の館として、吉野中村の堀屋敷と吉野町館がある。吉野郷が史料上に初めて見えるのは、戦国時代末期の天正一〇年（一五八二）であり、それ以前は、現在の吉野と寺所の境付近に唐笠木郷からかさぎの郷があった。吉野郷はこの唐笠木郷の衰退に代わって発生したものであろう。その開発の中心的な役割を果たしたのが丸山氏であった。なかでも堀屋敷に住む丸山氏は、江戸時代に保高組の大庄屋を務め穂高地域にまで影響力を持っていた。

丸山氏は仁科氏の一族で、現在の生坂村の出身と伝えられる。戦国時代、同地の犀川の河岸段丘上やその背後の山に城館を構えて要塞化した日岐氏は、その一族である。いつごろのことかわからないが、豊科の地に來住してから



吉野堀屋敷の堀跡

は、平瀬城（現松本市島内）の平瀬氏に属したという。

伝承地ではあるが、成相本村には成相氏の館があった。また江戸

時代初期に新田町村が開発される前、現在の法蔵寺には館があったという。法蔵寺館の館主が誰であったかは伝わっていないが、成相氏の一族と推測されている。また寺の南方にある「構えの墓」も館跡と伝えられる。「構え」とは防御施設のこと、ここは法蔵寺館の前衛であったと考えられている。「構えの墓」は、「カマイ墓地」と訛って呼ばれることもあるが、館の跡であったという伝承は忘れられていない。

（逸見大悟）



構えの墓館跡（成相）

# 2 中曽根川と中世の村落開発

豊科地域を流れる代表的な堰たとえば、勘左衛門堰や新田堰、矢原堰や拾ヶ堰が挙げられるだろう。だが当地の江戸時代の村をみると、真々部、飯田、中曽根など、これらの堰が開削される前、中世の郷村から続く村々が多い。

その郷村の大半は、梓川から分岐した中曽根川に水源を求めていた。現在は、圃場整備や高速道路の開通によって、流路が改変されたり、一部の川筋が消滅するなどして、往時の姿は留めていない。すでに近世には水量補強のために、勘左衛門堰や矢原堰などの水も利用しており、純粹に梓川から分岐しただけの川ではなくなっていた。

だがここから枝分かれした何本もの堰が、豊科地域の中央部を流れ、多くの水田を潤してきたのである。

## 穂高神社に奉祀した郷村

中世、穂高神社では遷宮の費用を周辺の郷村に所役として割り当てていた。このうち二階建ての「御門屋<sup>みかどや</sup>」の建て替え費用は、住吉庄内<sup>すみよしのしょう</sup>にあった十八の郷に課せられている。すなわち、飯田、熊倉、中曽根、中萱、戸間（鳥羽）、氷室、大妻、唐笠木、成合、楡、久木（小住吉か?）、二

| 飯田              | 中曽根             | 中萱              | 唐笠木             | 氷室              |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 二階 住吉庄所役        | 初一石九斗 御幣袋 十九枚半  | 初一石九斗 御幣袋 十九枚半  | 初一石九斗 御幣袋 十九枚半  | 初一石九斗 御幣袋 十九枚半  |
| 白米一斗九升 手束麻 十九枚半 | 白米一斗九升 手束麻 十九枚半 | 白米一斗九升 手束麻 十九枚半 | 白米一斗九升 手束麻 十九枚半 | 白米一斗九升 手束麻 十九枚半 |
| 釘十九銭 十九文 十枚 手束  | 釘十九銭 十九文 十枚 手束  | 釘十九銭 十九文 十枚 手束  | 釘十九銭 十九文 十枚 手束  | 釘十九銭 十九文 十枚 手束  |
| 初六斗五升 白米六升六合    | 初六斗五升 白米六升六合    | 初六斗五升 白米六升六合    | 初六斗五升 白米六升六合    | 初六斗五升 白米六升六合    |
| 御幣袋六枚半 手束麻六枚半   | 御幣袋六枚半 手束麻六枚半   | 御幣袋六枚半 手束麻六枚半   | 御幣袋六枚半 手束麻六枚半   | 御幣袋六枚半 手束麻六枚半   |
| 釘六半 銭六文半        | 釘六半 銭六文半        | 釘六半 銭六文半        | 釘六半 銭六文半        | 釘六半 銭六文半        |
| 初一斗七升六合 白米七升七合  | 初一斗七升六合 白米七升七合  | 初一斗七升六合 白米七升七合  | 初一斗七升六合 白米七升七合  | 初一斗七升六合 白米七升七合  |
| 御幣袋七枚半 手束麻七枚半   | 御幣袋七枚半 手束麻七枚半   | 御幣袋七枚半 手束麻七枚半   | 御幣袋七枚半 手束麻七枚半   | 御幣袋七枚半 手束麻七枚半   |
| 釘五 銭六文          | 釘五 銭六文          | 釘五 銭六文          | 釘五 銭六文          | 釘五 銭六文          |
| 初八斗六升 白米八升六合    | 初八斗六升 白米八升六合    | 初八斗六升 白米八升六合    | 初八斗六升 白米八升六合    | 初八斗六升 白米八升六合    |
| 御幣袋八枚半 手束麻八枚半   | 御幣袋八枚半 手束麻八枚半   | 御幣袋八枚半 手束麻八枚半   | 御幣袋八枚半 手束麻八枚半   | 御幣袋八枚半 手束麻八枚半   |

『三宮穂高社御造宮定日記』(明応10年(1501))  
穂高神社の遷宮における各郷の所役が書かれている

木、及木、角懸<sup>つのかけ</sup>、杏<sup>からもも</sup>、長尾、寺所、間々部<sup>ままべ</sup>である。これらは住吉庄の中心となる住吉神社を核として何らかのつながりをもっていたとみられ、「住吉庄十八ヶ郷」と呼ばれている。このうち中曽根川から堰を引き、開発された郷村

は、飯田、中曽根、唐笠木、寺所の四郷である。

このほか低湿地にあつた針俣<sup>はりまた</sup>（踏入）、細萱、重柳も、湧水とともに、中曽根川に水源を求めた灌漑が行われた。

## 河岸段丘に挟まれた中曽根川

松本平へと流れる梓川は、旧安曇村大野田の谷口を扇頂として左右に大きく振れて度々流路を変えており、これによって広大な扇状地が形づくられた。またその過程で、旧梓川村域から安曇野市域にかけて、いくつかの河岸段丘ができた。豊科地域では、真々部から下鳥羽にかけて、現在のこども病院の西方は一段高くなっている。そこから高速道路を挟んで東方の熊倉には春日神社や仏法寺が建てられた丘陵が梓川に面している。中曽根川は、このような東西の微



下鳥羽を南北に縦貫するかつての梓川河岸段丘

高地に挟まれた低地を蛇行しつつ、その下流で低湿地帯の豊富な湧水を合水して万水川へと流れ込んでいた。

水田の土壌と水路の調査から地域の歴史の解明に取り組んだ小穴喜一氏によれば、古代・中世の水田開発は、初めは自然流が利用されたが、次第に肥沃で湛水力のある稲作に適した耕土の深い地域に向けて、大小の河川から計画的に水路が引かれて開発が進んだという。中曽根川流域でも同様に耕土の深さ四〇～七〇<sup>センチメートル</sup>以上の地域に導水され、水田が開発されて集落ができあがっていった。

## 消えた郷村・唐笠木

中曽根川やその流域で最も早く文献上に姿を見せる郷村は、唐笠木<sup>からかさぎ</sup>である。鎌倉時代末期の嘉暦<sup>かりやく</sup>四年（一二三九）、諏訪大社上社の造営にあたり、安曇野市域では、猪鹿<sup>がのまき</sup>牧・草深（ともに現在の穂高牧）両郷とともにその費用を負担している。唐笠木郷の上社への奉仕は、戦国時代まで続いていた。天正七年（一五七九）に同社の外垣を整備<sup>さいとう</sup>するための費用を徴収した唐笠木郷の代官として「才藤<sup>さいとう</sup>二郎左衛門尉」なる人名がみえる。また先に述べたように、穂高神社の遷宮では、庁屋を建て直す費用も負担していた。

だが唐笠木郷は、天正一〇年（一五八二）頃を境に史料

上から見えなくなり、代わって吉野郷が現れる。だがなぜ唐笠木郷が姿を消したのかは、明らかでない。

なお唐笠木郷の中心は、吉野の北部、梶海渡<sup>かじがひと</sup>地籍にあったと考えられており、また寺所の吉野境には傘木の小字が残る。現在、寺所の西部を唐笠木堰が流れているが、この郷を灌漑していたのはそれより南を流れる東沢であったと考えられる。

### 寺所堰が支えた二つの集落、寺所西側と踏入本郷

寺所の地名の由来は明らかではないが、『豊科町誌』によれば、観音堂がその発祥にかかわるのではないかとはいえない。

堂の西方には西側集落<sup>にしのがわ</sup>の南北の通りがあり、そこを流れる西側表堰（西側東堰）はかつて飲み水として利用されていた。

中曽根川から分派した寺所堰（大堰）は、大木田地籍内、現在の



寺所観音堂



西側表堰（右）と西側裏堰（左）の分岐  
（寺所・大木田地籍）

寺所集会所の南方で三つに分かれる。その中央が西側表堰で、西を流れる西側裏堰と、東を流れて観音堂に至る堰は、集落の農業用水路であった。

また集会所付近には、明治時代まで氏神の大木神社があったが、今は稻荷社の小祠のみを残す。とすれば、三本の堰の上流に氏神社、下流の集落のはずれに観音堂を配した西側集落が寺所郷の発祥であって、ここから南の辛子田<sup>からしだ</sup>や



踏入八幡宮の裏を流れる宮堰

東南の四ツ家などへと広がっていった可能性は高い。

さらに西側裏堰沿いで、奈良時代末から平安初期にかけての須恵器や土師器も出土しており、考古学的見地からも、そのことが裏付けられるのではないかと思う。

寺所堰からは、唐笠木堰と宮堰も分派しているが、この二本の堰は、寺所の北の踏入本郷を灌漑している。宮堰は、寺所の諏訪松尾神社の脇を抜けて踏入八幡宮の裏を通る。一方の唐笠木堰は、矢原堰の下をくぐり抜けて荒堰と名を変え、宮堰と合流する。宮堰を挟んで西側は踏入本郷、東側は細萱の東新屋集落となるが、東新屋はこの荒堰の開削によって成立したと考えられる。

ところで、現在の踏入八幡宮は、踏入の南、寺所との境にあるが、かつては本郷と北踏入の間の松田地籍にあっ

た。付近に「八幡宮古

趾」の石碑が立つ。八幡宮は江戸時代中期の元禄十一年（一六九八）から享保十三年（一七二八）の間に現在地に移ったことが知られている。

中世、踏入の地にあったのは、針俣という郷村であった。その中心地は明らかではないが、北踏入を流れて重柳で中曽根川に合流する「とはの川（戸川）」によって灌漑されたと推定される。しかもその水源は、八幡宮の旧地である松田地籍にあった「八幡ドブ」だということから、踏入八幡宮は元来、針俣郷の水神として祭られていたのかもしれない。「踏入」は、郷内にあった小地名が、近世に入って村名として定着したものらしい。中曽根川上流域の中曽根で新たな堰が開削されたことで、唐笠木堰と宮堰の水量が補強され、踏入本郷が開発されたといわれており、以前の針俣郷とは主要な水源を異にしていたのである。



「八幡宮古趾」の碑

## 中曽根の開発を促した四本の堰

「中曽根川」という名前が付けられたのは、中曽根がこの川から最も自然な形で導水することができたからではないかと考えられている。中世末までに、中曽根川から主要な堰が四本引かれ、各集落の水田が灌漑されていた。

このうち中沢は、元来飯田の南部で中曽根川から分岐していた自然流であった。これが上中曽根から耕土の深い夫領<sup>りょう</sup>にかけて灌漑する堰として整備され、末端は一丁田地籍



中曽根諏訪神社へ流れる中沢と一丁田の道祖神

にある諏訪神社の西側に至っている。しかし本来自然流であった中沢は、水量が安定しなかったため、その西を流れる藤ノ木堰から小さな堰を掘り、途中で水量を補強した。

また中沢より下流で中曽根川から分かれた並柳堰も、夫領地籍の水量を補強す



中曽根諏訪神社の前を流れる並柳堰

る。本来、並柳堰は元町の開発を意図して開削された堰であった。今も並柳堰から幾筋かの堰が分岐し、後世に開削された新田堰を越えて元町の水田を灌漑している。

下中曽根は、堂前堰によって開発された。堂前堰ももとは中曽根川を水源としていたが、現在は元町の東で新田堰から分かれた下堰に取水口が設けられている。

中曽根村は、近世前期まで水源の大部分を中曽根川に依存していたが、もともと自然流であったためか水量が安定しなかった。貞享二年（一六八五）、勘左衛門堰が開削されると、中曽根川本流や中沢、藤ノ木堰などへ水量を補強する役割も果たすようになる。以後、勘左衛門堰より上流の中曽根川の水は不要になったが、昭和五〇年代まではかすかにその跡が堰筋として残っていたという。



飯田堰(右)と旧中曽根川(左)の分岐(真々部)

恵器や土師器が出土している。上飯田から下飯田にかけて南北に貫流する飯田堰は、このところからの歴史を秘めた古堰ではないかとも推想されている。

現在の飯田堰は、JR大糸線梓橋駅西側のガード下付近で旧中曽根川と分かれている。ここからすぐに辰巳原堰を分岐させ、旧飛騨街道に沿って北流する。途

## 「い田」が由来? 飯田集落と飯田堰

梓川の氾濫原であった辰巳原を除き、飯田は耕土が厚く堆積した稲作に適した土地柄であった。耕土の深さは五〇センチ以上、下飯田の才ノ神地籍では二畝にも及んでいたという。飯田の地名が「いい田」に由来するという説もあるくらい肥沃な土壌に恵まれていた。

飯田集落のために開削されたのが、飯田堰を本線とする諸堰である。前述の才ノ神地籍の西、下飯田諏訪神社の南側に位置する宮ノ前地籍からは、平安時代にさかのぼる須

中、上飯田では原田堰や池堰、中飯田では倉堰、下飯田では才ノ神堰などを分派し、流末は小海渡堰に合流している。

戦国時代後期の天正七年(一五七九)、諏訪大社下社春宮を造営する際に、飯田郷から費用を徴収する代官として「飯田右馬允、二

木清介、竹内筑後」の名がみえる。飯田氏や竹内氏は今も飯田に残る名字である。特に飯田氏館跡(飯田砦跡)には、今も四〇畝四方の土塁がめぐらされ、内堀の小字が残る。また館跡の北と東には勘左衛門堰が流れており、堀跡を堰として利用したと考えられている。

後世に書かれた『岩岡家記』には、天正一〇年(一五八二)に松本城主の小笠原氏に属し、大野田夏道砦(現松本市安曇)で木曾氏と戦った部将として「飯田右馬助」という人物がみえる。「右馬允」と同一人物であろうか。

中曽根川支流域に開発された郷村の経営に携わった人々の痕跡を垣間見ることのできる史料である。(逸見大悟)



飯田砦跡の土塁と勘左衛門堰(写真手前)

# 3 光城と田沢城

連日多くの市民が訪れる光城山は、市街地からのアクセスも容易で、散策や軽登山の場として親しまれている。

光城山はその名のとおり、戦国時代の山城であった。平地が大部分を占める豊科地域では数少ない山城の一つである。その南の尾根伝いには田沢城という城もあった。

## 伝えられた二つの光城

江戸時代中期に松本藩が編纂した地歴書『信府統記』しんぶとうきには、光城山とみられる記述が二つある。

### ○田沢山古城地

田沢村高札場より大城は子丑に当たりて十八町四十八間、大城より六町三十間下に小城とてあり。

真田四郎これ海野幸継の四男なり。この所を領して田沢四郎と云う。是より幾代ありけるにや、詳かならず。また没落も知れず。その後花村若狭と云う者持てり。その墨印今にありとかや。

### ○光仁場山古城地

光村高札場より巳の方、十七町四十二間。本城の平南北二十五間 東西十八間

海野信濃守幸継の六男この所に居て光の六郎と云う。幾代住せるにや、海野大和と云う者あり。落着知れず。

(片仮名を平仮名に直し、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いにして句読点を付した。)

田沢山古城地の「大城」と光仁場山古城地の「本城」は、書かれた方角や距離からして、同じ光城山を指していると思われる。田沢と光の境界はこの山頂付近を通っており、『信府統記』編纂時にこの両村を別々に調査したため、記述が二つに分けられてしまったものだろう。

この二つの記述には違いもみられる。光村では光城を「仁場」にば城と呼び、その城主は、海野幸継の六男「光の六郎」であったと伝える。

田沢村では、光城を「大城」と呼び、その尾



光城 (①) と田沢城 (②) (安曇野市役所本庁舎から撮影)  
(白い点線は田沢城へ続く尾根、黄色い点線は田沢神明宮へ続く尾根)

根伝いの城を「小城」としている。この小城が田沢城である。田沢村ではこの両城の城主は、同じく海野幸継の四男「真田四郎」または「田沢四郎」だと言ひ、その後花村若狭という人物が継いだと伝えている。

## 小県の名族・海野氏の流れを汲む光氏と田沢氏

光・田沢両氏は、小県郡の有力な在地領主であつた海野氏の出身である。中世、海野氏は周辺地域に一族の者を分出して勢力を広げるとともに、一族として結束していた。

江戸時代後期に作られた系図『寛政重修諸家譜』によれば、先に触れた海野幸継の子に六人の兄弟がいて、小太郎幸春は海野惣領家を継ぎ、そのほかの庶子は筑摩郡北部に領地を与えられた。彼らはそれぞれの地名を名字に冠して、会田小次郎（会田次郎とも）、塔原三郎、田沢四郎、借屋原五郎、光の六郎と名乗つたという。

また明科の光久寺に安置されている日光・月光菩薩立像の墨書銘には鎌倉時代末期の文保元年（一一三一七）の年号とともに、海野氏の一族と思われる女性の名前が見える。先の系図の信憑性には検討の余地はあるものの、当時、犀川東岸地域に海野氏の一族がやってきていたことは確かである。

室町時代の応永七年（一四〇〇）、信濃守護として京か

ら赴任した小笠原長秀と、村上氏や仁科氏ら国衆一揆との間で合戦が起きた。長野市篠ノ井にあつた「大塔の古要害」などが戦場となつたことから「大塔合戦」と呼ばれる。

この戦いに国衆一揆側として参加した海野総領家の宮内少輔幸義は、「会田岩下、大葦、飛賀留、田沢、塔原」らの一族を率いている。このうちの「飛賀留」は「ひかる」と読むことができ、光氏や田沢氏らがともに海野一族として結束して敵にあたつていたと考えられている。

なお、戦国時代に小県郡で勢力を伸ばした真田氏は、小県の名族・海野氏の流れを汲むことを系図で殊更に強調した。『信府統記』にあつた「真田四郎」は、真田氏が有名になっていく中で、後世に創作された人名なのかもしれない。



大塔の古要害があつたとされる大当地区（長野市篠ノ井二ツ柳）

## 光城と田沢城の戦国時代

光城と田沢城は、その形態から戦国時代に使用された山城と考えられている。だが当時の史料からは、この二城に関する記述は、まったく見ることができない。

天文二〇年（一五五一）ごろ、甲州の戦国大名・武田晴信（のちの信玄）は、安曇平に侵攻を開始した。天文二一年（一五五二）には穂高有明の小岩嶺城（こいわたけ）を攻め落とし、安曇郡南部をほぼ制圧した。だがそれは犀川西岸のことで、東岸地域の諸城への影響は少なかったようだ。

翌天文二二年、今度は松本市の旧四賀村域の刈谷原城が攻め落とされた。明科の塔原城ではこれを見て、「自落」すなわち自ら落城させて逃亡した。光城と田沢城は、塔原城と同じ長峰山の尾根伝いにあり、同じ海野一族の城であったから、同様に逃亡したか降伏したものと考えられる。

それから約三〇年後の天正九年（一五八一）に書かれた古文書には「ひかるやまと」の名がみえる。これが『信府統記』に記された「海野大和」のことと思われる。

翌天正一〇年（一五八二）に武田氏が滅亡すると、松本平は小笠原氏が支配を拡大し、近世の松本藩につながる基礎を創っていった。小笠原氏の家臣に光才三（みつぞう）という人物がみえる。光大和と才三の二代が光城の城主として当地を治



古峰神社の背後をめぐる土塁

めていたのであろう。

また当時、田沢神明宮の神官と思われる「田沢神介」という人物もみられるが、田沢の領主としての実権は花村氏

に移っていたようだ。

## 光城山に残る城の跡

古峯神社が祭られた光城山の山頂部の平場は、光城の主郭（本丸）であった。今も神社の建物の背後を囲むように土塁が残されている。さらにその下、東側から北側にかけて、数段の平場が続く。ここから南東へ続く尾根道は田沢



光城の背後の堀切

神明宮の裏へと通じており、人の行き来があつたためか、幾筋かの堀切ほりきりが設けられていた。

北方の長峰山へ向かう道には、現在木橋が架けられている。ここが城の背後の堀切である。主郭の背後に設けられた大きな堀切は、松本平周辺の山城によく見られる特徴である。背後からの逆落

としを防ぐためのものであろう。

主郭の南、現在管理棟が建つ平場も、人工的に削平された曲輪まがわである。この東側にも長い土塁が築かれ、その外側にまた南北に長い曲輪が設けられている。

この曲輪と主郭の間には二重の堀切が設けられ、さらにその連絡路にも防御が施されている。城の出入口を虎口こぐち（小口）と呼ぶが、主郭南側に設けられた虎口の通路は、屈曲した坂道になつている。こ

れは戦闘時に主郭に押し寄せる攻撃側の勢いを封じするためと考えられる。公園に整備されてしまふと見過ごされがちなカーブした小径だが、防御施設であつたことを頭において歩きたいものだ。



光城主郭へと虎口（手前）と堀切

## 光城山の「小城」か？ 田沢城の立地と防御施設

田沢城跡へは、田沢神明宮の西方、県道五七号のチェー  
ン着脱所から登る道がある。九十九折りの坂を登ると、南  
北に長く広い曲輪に出る。この左手の尾根上に、テレビの  
中継塔が立つ曲輪がある。この奥の少し高いところに曲輪  
がもうひとつあって、さらに進むと主郭に至る。

主郭にはかつて「こたか様」という神様を祭った祠があ  
ったそうで、わずかに残る石垣はその祠の跡である。

その背後には土塁が築かれ、さらなる防御のために二重  
または三重の堀切が掘られている。またその後ろにいくつ  
かの曲輪が設けられて、背後を守る。ここから尾根道を急  
登して光城山へ向かうこともできる。

また桜坂団地の南を流れる高松沢から登り主郭の背後に  
出る道もある。沢の南側を登っていくと、山腹に開けた緩  
斜面がある。もとは畑だったようだが、「出城」とも呼ば  
れており、根小屋として使われた可能性も考えられる。

田沢城は光城山の南の尾根上の平坦地に築かれた城で、  
その規模も小さい。「大城」光城に対する「小城」すなわ  
ち属城として使用されても不思議ではない。だが主郭の背  
後に二重三重の堀切を設けるなど、田沢城単独でも防御で  
きる態勢が取られていたことはどう考えればよいだろうか。

今後、研究の余地がありそうである。

（逸見大悟）



田沢城主郭

田沢城背後の堀切



# 4

## 真々部の七寺八小路

交通の要衝と信仰の拠点



金龍寺境内に残る真々部氏館の土塁跡

真々部の乗護山金龍寺は、市内では数少ない臨済宗寺院のひとつである。戦国時代、ここに真々部氏の館があった。

甲州の戦国大名・武田氏は、安曇郡経略の拠点として当地に城館を築き、仁科氏の一族であった真々部氏に支配させた。金龍寺の裏には今も土塁の跡がみられ、「殿村」の地区名にもそ

の名残を留めている。当時、真々部では、同じく千国道沿いの大町、穂高とともに定期的に市が開かれて馬などが交易されていた。

真々部には、「七寺八小路<sup>ななでらやこうじ</sup>」という言葉がある。これは具体的な数というよりも、真々部氏館跡周辺の繁栄ぶりを表現したものだと言われている。

ただし館の周囲に配された八本の通りと、江戸時代前半までに成立した七寺を指すこともある。

### 交通の要衝に整備された八本の小路

八本の小路とは、真々部氏館周辺の東西南北の小路と、千国道沿線の上町、中町、下町、そして真行寺小路である。館の四周の小路には真々部氏の同心たちが住んだのだろうか。千国道は安曇郡の最も主要な道路であり、真行寺小路は千国道から分かれて熊倉道を経て松本へと通じる。

戦国時代、武田氏は松本城の前身の深志城を整備し、松本平支配の一大拠点とした。安曇郡南部の交通の要衝であった真々部にも城館と町を整備したのは、軍事面だけでなく、地域経済の拠点とする意図もあったのだろう。

## 真々部の七ヶ寺——信仰の拠点として

七寺は、金龍寺のほか、浄土宗の無量山阿弥陀院専念寺、松本城下の浄土真宗寺院・正行寺の末寺の大円山真行寺と勢至山円通寺、曹洞宗の住吉山真光寺とその末寺の瑠璃光山常松寺と仏花山法蘭寺で、宗旨も様々であった。

金龍寺は近世初頭に一時衰退して、塔頭のひとつである金桑山真珠院だけが残った。無住の時代もあったが、慶安年間（一六四八―一五二）に法岩和尚が中興したと伝えられる。中世、金龍寺は現在地よりも東方にあったといわれており、現在地に移ったのはこの時かもしれない。江戸後期には、観音霊場として川西三十四番札所の十六番目に数えられた。

専念寺は、室町時代の寛正年間（一四六〇―一六六）の創建と伝えられる。かつては六つの坊があったが、元禄年間（一六八八―一七〇四）には源周庵を残すのみとなっていた。それでも及木村観音堂（荻ノ堂）、楡村阿弥陀堂、中曽根村薬師堂を支配下に置いており、周辺の村人たちの信仰を集めていたと思われる。

一方、住吉山真光寺は、同地の常松寺や中萱村の法蘭寺のほか、等々力村の東龍寺（現在の東光寺）を末寺に抱え

ていたというから、もともとは大寺院だったようだ。戦国時代に上州室田（現在の群馬県高崎市）の長年寺の養父紹舜和尚が仁科氏に招かれて開山したとされ、末寺の三ヶ寺は江戸時代に入ってから開山である。ところが江戸時代中期の享保三年（一七一八）以降、檀家や本山の長年寺と度々対立し、加えて幕末の安政四年（一八五七）には火災に遭って衰退を迎える。

末寺の東龍寺と法蘭寺は、江戸後期に川西三十四番札所の八番及び十八番となり、観音霊場として信仰を集めた。

真行寺と円通寺はともに浄土真宗寺院である。松本地方ではこの宗派の寺院は極めて少ない。そのうち江戸時代中期に編まれた『信府統記』をみると、安曇野市域ではこの二ヶ寺のほかは新田町村の清浄山円証寺しかない。

円通寺は尾州清洲（現在の愛知県清須市）の円通寺の僧侶が室町時代の明応年間（一四九二―一五〇一）、に当地に居住したのが始まりと伝えられているし、真行寺の前身である東泉坊は、武田氏の支配下にあった永禄年間（一五五八―一七〇）には存在したと考えられている。武田信玄の正室は公家の三条氏の出身で、その妹が浄土真宗本願寺派の宗主・顕如光佐の夫人であった。そのこともあってか、信玄本人は禅宗の僧侶であったが、真宗寺院も厚く保護している。武田氏の拠点であった真々部に真宗寺院が二ヶ寺もあったのは、このことと関係があるのだろうか。

## 廃仏毀釈と寺院の再興

真々部の七寺は、明治の廃仏毀釈により一旦廃絶する。

このうち真珠院は、かつての寺号「金龍寺」を冠して明治一一年（一八七八）復活した。専念寺も同じく明治二二年（一八八九）に再興を果たした。

住吉山真光寺は、明治一六年（一八八三）に一日市場にあった善導寺の跡地に興国山真光寺として再興され、旧真光寺の本尊であった釈迦如来像を再び安置している。

その末寺の法因寺の再興はかなわなかったが、明治三三

年（一九〇〇）に、境内の十王堂跡に上伊那七久保（現在の飯島町）から臨済宗妙心寺派の見石山歓喜寺が移された。川西三十四番のうち十八番目の札所の本尊として信仰を集めた観音像は、現在当寺によって管理されている。

浄土真宗寺院のうち真行寺の跡地には、明治三一年（一八九八）に松山市から正敬寺しょうきょうじが移された。当寺には、阿弥陀如来像三軀が安置されている。一軀は旧真行寺の本尊である。ほかの仏像は、廃仏毀釈で廃寺となった円通寺の本尊と、明治二七年（一八九四）に新田の大火で罹災した円証寺の本尊である。豊科地域では数少ない浄土真宗の寺院を頼って仏像が集められたものだろう。（逸見大悟）



旧真行寺の本尊と伝わる阿弥陀如来立像  
（正敬寺蔵）

# 1 描かれた江戸時代の豊科

松本藩領内では、いくつかの村々を集めて組という行政単位がつくられていた。現在の豊科地域でいえば、犀川東岸にあった光村と、西岸に枝郷の徳治郎を出していた田沢村が麻績組に属している。また犀川西岸域のうち、南部の村々は成相組、北部は保高組（穂高組）に分かれていた。

成相組には、真々部村、飯田村、下鳥羽村、上鳥羽村、成相本村、成相新田村、成相町村、中曽根村、小海渡村<sup>こがいと</sup>の他、梓川の対岸の現在の松本市島内地区が含まれており、その範囲は広がった。また、犀川の東岸の下平瀬村の枝郷の山田なども含まれていた。そのためか、当時の安曇郡と筑摩郡の境は梓川ではなく、さらに南の榑木川<sup>くればき</sup>であった。

江戸幕府は諸国に国絵図の製作を三回にわたって命じている。最初の国絵図は、正保四年（一六四八）頃までに製作された。正保の信濃国絵図では、安曇郡と筑摩郡の境が梓川となっている。ところが二度目の元禄一五年（一七〇二）までに製作された元禄国絵図では榑木川に沿って郡境が記された。いずれも松本藩主水野氏の時代であり、その支配期間中に郡境が変わったのであろう。

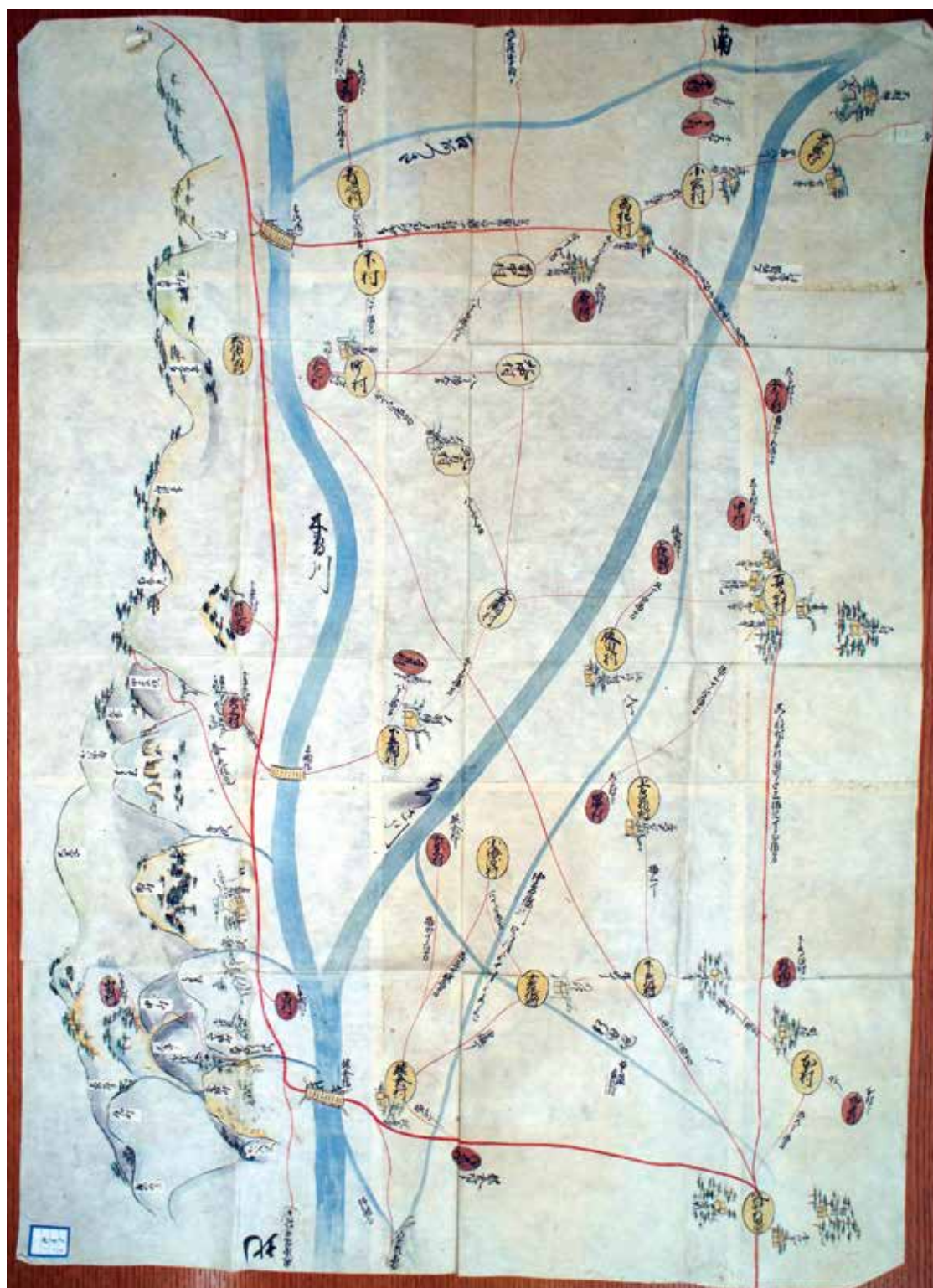
一方、豊科地域北部の細萱村、重柳村、踏入村、寺所村、吉野村は保高組に属していた。

長野県立歴史館では、この二つの組の組絵図を所蔵している。両図を比べてみると、描かれている向きが正反対であることがわかる。背後に描かれた風景は、成相組の絵図は犀川の対岸の東山であるのに対し、保高組は西山である。二つの組の山に対する意識も違っていたのであろう。それぞれの絵図を少し詳しく観察してみたい。

## 成相組絵図

成相組の絵図に新田堰は描かれているが、勘左衛門堰はみられない。史料上に新田堰が登場するのは寛文四年（一六六四）、勘左衛門堰が開削されたのは貞享二年（一六八五）である。また鳥羽村が上下両村に分かれていることから、鳥羽が分村した寛文六年（一六六六）以降、約二〇年の間に製作されたものと考えられる。

この絵図は東を上にして描かれており、右下（南西）から左上（北東）に向かって斜めに「あつさ川（梓川）」が流れ、やや上方に描かれた木曽川（奈良井川）と合流する。その途中、真々部の南方で、中曽根川が分かれている。これが飯田、中曽根、寺所などを灌漑する。



成相組絵図（長野県立歴史館蔵）。この絵図は左側（東）を上にして見る

道は、「成相新田町」、おそらく成相町・新田町の両町村を指すと思われるが、そこで大町から来た糸魚川街道が四つに分かれる。江戸時代、両町村が宿場として賑わった様子は、この枝分かれした道からも窺い知ることができだろう（八四頁参照）。

四本の道のうち、最も太く描かれているのは、熊倉村で橋を渡り、川手道に合流して松本へ向かう道である。この熊倉橋は橋脚も含めて立派に描かれており、主要な道だったと推測される。この道沿いには熊倉の観音堂があり、犀川をはさんで下平瀬村枝郷の下田村には仏法寺が描かれている。現在、熊倉の観音堂の参道に、旧仏法寺の石造百体観音が並んでおり、この地図よりのちの時代に仏法寺が熊倉へ移されたと考えられる。

一方、新田町から南へ向かう道は、梓川を渡り、新橋を経て松本に入る。現在の県道三二六号とほぼ重なる。途中の真々部村には、円通寺、真光寺、真珠院（現在の金龍寺）、専念寺、真行寺の五ヶ寺と大明神（現在の真々部諏訪神社）が描かれ、その数は周辺の村々より多い。かつて「七寺八小路」とまで称された真々部の繁栄をみるようである（六九頁参照）。

## 保高組絵図

絵図の上方、西側に烏帽子岳が象徴的に描かれる。手前、犀川の東側が「御料」すなわち幕府領と記されており、後期戸田氏が松本藩主になった享保一〇年（一七二五）以降に描かれたことがわかる。ただし文化一三年（一八一六）に開削された拾ヶ堰はみえない。

吉野・寺所の両村域は、成相組の村々と入り組んでいる。この近辺の村々が、どのような理由で二つの組に分けられたか知りたいところである。保高組の村々は、三川合流地点を囲むように描かれるが、牧村だけが山麓に位置している。

矢原堰も描かれており、現在と同じように細萱村で西から北へと流れの向きを変えていた。その屈曲地点の南西に、正覚院が描かれているが、現在正覚院跡として伝わっているのは、矢原堰の屈曲点の北東、「細萱大明神」（現在の洲波神社）の西北西にあたる。伝承地が絵図に描かれた位置と異なっており、この絵図が正しければ、正覚院が細萱村内の別の場所から矢原堰をはさんで対岸に移転したと考えられる。正覚院は等々力村の東龍寺（現在の東光寺）の境内にあった堂を移転したものと伝えられているが、それ以上のことはわかっていない。これが分かれば、正覚院の歴史とともに、この絵図の製作年代も絞られてくるのではないだろうか。

（原明芳、逸見大悟）



保高組絵図（長野県立歴史館蔵）

# 2 堰をめぐる恩恵と苦難

勘左衛門堰と二つの「新田堰」

犀川左岸の豊科地域の用水堰は、古代・中世を通じて梓川やその支流の中曽根川に水源を求め、稲作に適した耕土の深い地域の水田へと導水する方法が採られていた。それらは灌漑したい集落よりも標高の高い地点から堰を分派して、低地へと流したことから「縦堰」と呼ばれている。

近世に入ると、さらなる開田の必要に迫られた。そのため梓川の水量に限界が生じ、水源を「木曽川」（現在の奈良井川）や犀川に求め、等高線に沿うように水を流す「横堰」が開削されるようになった。

横堰はそれまで開田されてこなかった耕土の浅い地域への導水だけでなく、従来の堰の水量補強の役割を果たしたという。これによって、新田の開発だけでなく、既存の水田の面積を広げる「切添い<sup>きりそ</sup>」や、畑から水田へ転換する「畑田成り<sup>はただな</sup>」をも促した。

またゆつくりと流れる横堰の水は、苗の発育に適した温度まで温められて、田に送られるなどの利点もあったが、末流まで水が届きにくくなるという欠点もあった。そのため、設計や工事に高度な技術を要し、完成後も堰浚い<sup>せきざらい</sup>や改修などのこまめな維持管理が必要であった。

## 安曇平初の横堰・新田堰

安曇野平で最初に開削された横堰は、新田堰である。

その開削年代は明確ではないが、江戸時代前期の寛文四年（一六六四）の史料に見られることから、このころには使用されていたとみられる。成相町村と

新田町村が宿場として整備された江戸時代初頭、両町村は成相堰（現在の真鳥羽<sup>しんとば</sup>堰）から堰を分派し延長させていた。だがのちに新田町村はこの新田堰に乗り換えたという。

新田堰は熊倉丘陵の南側から梓川の水を導水し、下平瀬の



新田堰（中曽根付近）

冠ヶ鼻の余り水も利用したという。冠ヶ鼻が具体的にどこを指すのかはわからないが、おそらく梓川と奈良井川の合流点のことと思われる。この附近には、松本市島内を貫流する嶋堰の末流が来ている。梓川右岸にあった高松村などの上流で取り入れた水の余りを有効活用したものだろう。

### 勘左衛門堰をめぐる苦難

新田堰よりさらに大規模化した横堰が勘左衛門堰である。松本藩が計画し、寛文二年（一六六二）に標高五八〇呎付近を堰筋として開削を試みたが失敗。担当した代官は切腹したと伝えられる。

貞享二年（一六八五）三月、再び堰開削に挑み、五月に一応の完成をみる事ができた。「木曾川荒井前小麦渕」（現在の松本市荒井付近）から取水し、開削当初は、上下平瀬及び北方（現松本市島内）の三ヶ村を灌漑して、梓川を横断し、飯田から上下鳥羽までの計一〇ヶ村の田へ水を送った。二年後の貞享四年には、成相の本村と町村も組合加入した。この堰は拾ヶ堰ができるまで「新堰」と呼ばれていたが、のちに堰開削を担当した藩の代官・二木勘左衛門に因んで「勘左衛門堰」と呼ばれるようになった。

だが長大な横堰は、長年の使用により水の停滞を生じてしまう。特に末流であった成相の本村と町村の状況は深刻

で、規定どおりの年貢が納められず、「破免<sup>はめん</sup>」<sup>（破免）</sup>といって、藩役人による検見<sup>けんみ</sup>（現地確認）の上、大幅に減免された年もあった。

一八世紀終わりごろ、勘左衛門堰は二度の大改修が行われている。

一回目は天明二年（一七八二）で、取入口の木曾川小麦渕から梓川の西端（左岸）までの改修であった。二度目の寛政一〇年（一七九八）には、下堀金村作世<sup>さくぜ</sup>話役<sup>わやく</sup>の平倉六郎右衛門の指揮で堰の改修が行われた。堰幅を広くして水流を改善



勘左衛門堰の取入口（松本市荒井）

する工事で、堰筋も下堀金村まで延長された。井懸<sup>いがか</sup>り村（灌漑されている村）には、下堀・吉野・新田町村が新たに加わり一五ヶ村となった。

現在の取入口は、開削当初より三〇<sup>メートル</sup>ほど上流に設けられている。また流末は、中堀地区の北部で除沢に落ちている。これは拾ヶ堰の開削によって下堀金村では勘左衛門堰の水が不要になったことによる。ただ当時の流れは、下堀段丘直下に巾下堰として跡を留めている。

## もうひとつの「新田堰」——真鳥羽堰

新田町村の成立は、江戸時代初頭の慶長一三年（一六〇八）であるという。だが成立当初は現在の新田堰とは別の「新田堰」から導水していた。旧梓川村の岩岡から取水し、成相・新田の両町村へ通じた縦堰であった。これを古くは「成相堰」と呼び、「新田堰」と名を変え、「中堀堰」、さらに「真鳥羽堰」へと改称された。これほど名前が変わったのは、時代の経過とともに状況が変わり、灌漑を要する村が変わっていったからである。

元来この堰は、成相本村の開発を意図して開削された。江戸時代初頭までに成相町村と新田町村が開かれると、この両町村を灌漑する堰として「新田堰」と称した。ところが貞享四年（一六八七）に中堀新田村が開発されると、松



除沢へ落ちる勘左衛門堰の流末（中堀）

本藩の命令で同村の用水堰に付け替えられ「中堀堰」と呼ばれるようになる。

この「新田堰」に頼っていた成相本村と成相町村の両村へは、梓川から引水する主要な堰を手放す代わりに、貞享二年（一六八五）開削の「新堰」、のちの勘左衛門堰が与えられた。だが勘左衛門堰は横堰で、両村はその流末にあたる。水が届かず不作に悩まされることもしばしばで、明和八年（一七七二）までの間、もとの堰へ復帰したいとの訴えが藩に度々出されている。やがて勘左衛門堰が改修されるに及んで、この窮状も改善されたようである。

この「中堀堰」は、江戸時代末期に真々部と上下鳥羽の三ヶ村の堰となった。それでも明治末までは「中堀堰」と

呼ばれており、真々部・鳥羽を意味する「真鳥羽堰」に変わったのは、大正時代に入ってからのことである。

## 水争いから始まった梓川農業水利改良事業

大正一三年（一九二四）、全国的な雨不足で安曇野も大旱魃<sup>かんばつ</sup>に見舞われた。当時、梓川両岸には一四もの堰の取入口があつて、それぞれに牛柁などを置いて取水していたが、下流の堰ほど取水は不利であつた。

七月、真鳥羽堰の井掛りの村々と、対岸の島内側との対立が表面化する。真鳥羽堰側の農民たちは梓川端に押しかけ、島内側と投石を始めるに及んで流血の惨事に発展した。島内側では、高松堰の取入口に置かれていた牛柁が破壊され、数名の重傷者が出た。この騒乱は松本と豊科の警察署が出動してようやくおさまったが、真鳥羽堰に十分な水が来ることはなかった。上鳥羽や下鳥羽では秋に実りがなく、泣く泣く稲に火をつけて焼いたという。

この流血の惨事がきっかけとなり、梓川農業水利改良事業が始まった。現在の松本市の島々谷、赤松地籍に頭首工を設け、梓

川両岸の取水を一本化する。左岸と右岸の幹線に分水したのち、各堰へと配水されることになった。

真々部の小笠原孫市はこの事業の先頭に立ち、反対者の説得にあたるなど大いに尽力したという。工事が完成したのは、昭和六年（一九三一）のこと。小笠原はこの四年前に世を去っていた。昭和八年、梓川左岸第一耕地整理組合では、真鳥羽堰の端に「小笠原孫市翁彰功碑」を建てて彼の功績を称えた。

現在、赤松頭首工は右岸と左岸の幹線への分水工となり、さらに上流の梓川頭首工で取水している。（逸見大悟）



真鳥羽堰の水神と小笠原孫市彰功碑（真々部）



現在の赤松分水工（松本市島々）

# 3 成相町村と新田町村

人と物が行き交う宿場

豊科駅が置かれ、国道一四七号が縦貫する豊科の中心市街地は、江戸時代から安曇郡南部の物資流通の拠点であった。糸魚川街道の沿線に造られた成相・新田の両町村には、周辺の村々と、越後や松本とを結ぶ道が整備され、人や物が行き交う宿場町へと発展を遂げていった。

## 武田氏の時代が原形か？両町の成立

古文書によれば、新田町村が宿場として整備されたのは、江戸時代初頭の慶長一三年（一六〇八）であるという。松本城主・石川氏は、城郭や城下町、さらに街道の宿場の整備にも取り組んだ。新田・成相の両町村に宿場が整えられたのも、その一環であろう。ただ両町の原形は、武田氏が支配した戦国時代にさかのぼると考えられている。

当地には、成相堰から分かれた何本かの堰が千国道に並行して流れており、現在の法蔵寺にあった館（法蔵寺館）へも導水されていた。町場もこれらの道や堰に沿って造られている。このことから、武田氏が北方への備えとして館や郷町を整備したといわれる。さらにこれらの堰は耕土が浅い所を流れており、農業用水というよりも軍事上の必要

から開削されたという指摘もある。

成相町村は、成相本村の住人が移り住んだ枝郷である。対して新田町村の芝<sup>しば</sup>切<sup>きり</sup>（開発者）

は、藤森、中島、丸山の三家であり、他所から移り住んだ人々が中心となっている。この藤森氏と、芝切ではないが旧家として続く有賀氏も、諏訪地方に由来する名字であり、武田氏に従ってやってきたという伝承を持つ。



現在の新田の町並み



成相新田両町の切絵図  
(『豊科町誌』より)

これも新田町村成立の起源を伝えているのであろうか。

### 「うなぎの寝床」のような町割り

一般に、宿場町に造られた家の敷地は、間口が狭く奥行きが長い。「うなぎの寝床」のようだと いわれる。江戸時代の糸魚川街道沿いに立ち並ぶ新田・成相両町の家々も同様で、今も敷地の形に名残を留めている。その町割りは、間口を七間（約一二・七メートル）、奥行きは、道の東は六五間（約一一八メートル）、西は六〇間（約一〇九メートル）と決められていた。

東西の町割りの外側にはそれぞれ、生活用水路として利

用する呑堰のみせぎが流れていた。

また中央の街道はまっすぐ縦貫しており、鉤かぎの手がない。鉤の手とは、戦時に攻め寄せてくる軍兵の勢いを弱めるため、道を曲げたりずらしたりした防衛設備のことです。この点は保高宿と異なる。戦乱がおさまり、防御の必要性が低下した江戸時代にできた宿場だったから、設けられなかったと考えられている。

### 物資流通をめぐるトラブル

宿場といえば、旅人のための旅籠はたごが並ぶ情景をイメージされる方も多いだろう。だがそれ以上に、公用の旅客や荷



かつての呑堰のみせぎが東西に分かれる  
(現在は暗渠になっている)

物、書状の継ぎ立てを行う重要な役割を持っており、そのために輸送用の人馬を常備しなければならなかった。一方で民間の荷物を宿継ぎする業務も担い、利益を上げていた。

糸魚川街道が「塩の道」とも呼ばれるように、越後から松本に至る街道、そして宿場を、塩や魚などが通過した。このほかに越中木綿や高岡の金物、輪島漆器、九谷焼など、北陸地方の特産物も運ばれている。

だが宿継ぎをすると手間がかかり、そのたびに駄賃が請求される。そこで江戸時代中期以降、中馬<sup>ちゅうま</sup>といって目的地まで宿継ぎせずに付け通しする運送が登場した。その方が迅速で運賃も安く、荷物の傷みも少なかった。近郷からは<sup>あぶらえ</sup>油荳、<sup>あぶらかす</sup>油粕、米などを運び込み、松本からは日用品や<sup>しも</sup>下肥、灰などを付けて帰ってきて売る。松本城下や村方の人々も気軽に利用できたことだろう。中馬は、近隣の百姓が農閑期の作間稼<sup>さくま</sup>ぎとして行うことが多かったが、これが宿場の経営を圧迫するとして甲信地方各地で相論が起きた。

糸魚川街道での争いは、享保一二年（一七二七）に始まる。中馬稼ぎをしていた細萱村の者が新田町で取り押さえられたのがきっかけであった。これに池田・保高・新田の三宿と大町宿との利害が絡み、事態は複雑化した。この事件は享保一五年に一旦決着する。結局、松本から越後方面

への下り荷物

は、いずれも中馬による付け通

しを行ってよい

こと、松本方面

への上り荷物の

うち、紙、布、

平のし蓆<sup>ひら</sup>、漆、

真綿、木綿、

茶、椀、魚など

は期間を定めて

宿継ぎとするこ

とが決まった。

だがこれ以降も

宿場と中馬との

争いは断続的に

起きている。

相論の記録か

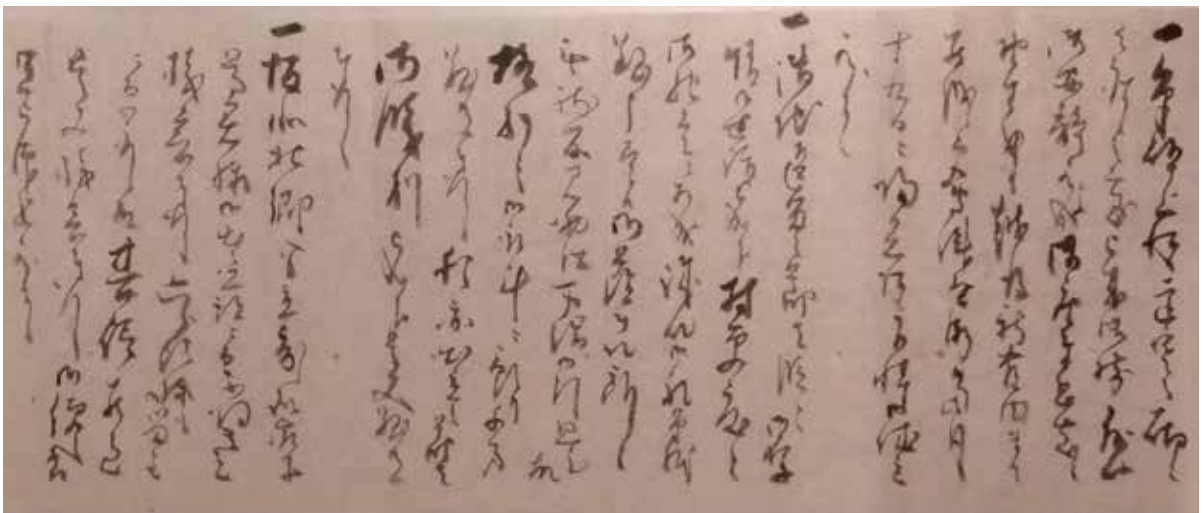
ら宿場を行き交

った物資や、物

流の担い手を知

ることができ

るのは、いささか



重田一九（十返舎一九）から藤森善兵衛に宛てられた礼状（個人蔵）

皮肉なことである。

## 文化人の交流——藤森善兵衛と十返舎一九

芝切のひとつ藤森家は、成相組のなかでも大きな力を持つ家に成長した。中心的な家筋としては、「おやかた」「おかしら」「問屋」「藤野屋」の屋号を持つ四家があった。

特に「おやかた」は大庄屋を指す。大庄屋は他家に交代することもあったが、近世後半には、藤森善兵衛または善太夫を襲名する人物が出て、北は新田町村から南は岩岡・高松・青島村まで広範囲にわたる成相組の村々を統括した。

とりわけ文化一二〜一四年（一八一五―一七）に大庄屋を務めた藤森善兵衛は、文化人としても知られる。「新田園おさ丸」と号して狂歌（洒落や滑稽、風刺などを織り交ぜた短歌）を楽しみ、松本の書店の主人であった高見屋甚左衛門とも交流した。

またそれが縁となって、当時の人気作家となっていた十返舎一九を新田に招くことができた。一九は『東海道中膝栗毛』に続く『続膝栗毛』出版のため、取材旅行に当地を訪れたのである。善兵衛は一九を満願寺に案内するなどして取材に協力し、さらに厚くもてなしたようだ。江戸帰着後、一九は善兵衛に礼状をしたためた。これによれば、

信州を後にした一九は、越後新発田や会津へも足を延ばしたという。

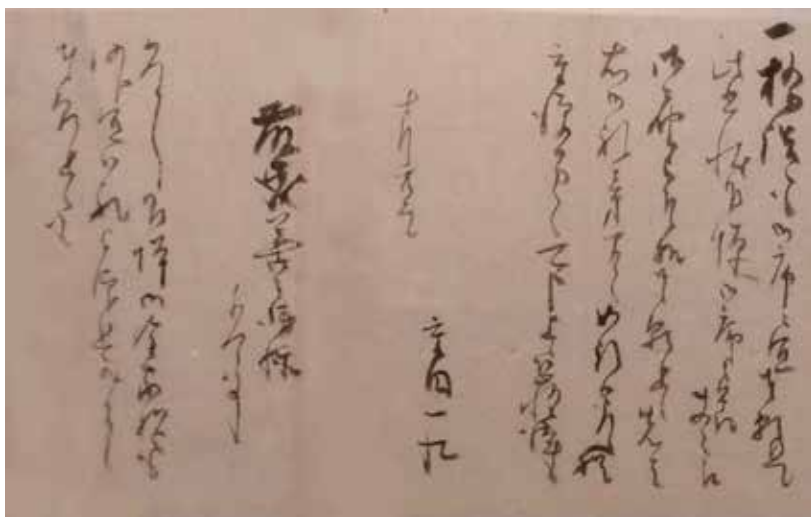
『続膝栗毛』には、松本から新田、そして満願寺へと旅を続ける主人公の弥次さんと喜多さんの珍道中が描かれている。

また二人を案内するいかかわしい医者も登場する。そのモデルになったのが、この藤森善兵衛だと考えられている。

この四家の出身ではないが、明治時代に藤森寿平（桂谷）が法蔵寺境内で成新学校を開いている。教師として木曾から武居用拙（ようせつ）を招き、穂高の松澤求策らを学ばせるなど、多くの英俊を集め、自由民権運動へとつなげていった。

物資とともに、様々な人が行き交った宿場の姿がうかがえる。

（逸見大悟）



# 4 豊科を通る街道、橋、渡し場

「敵に塩を送る」という言葉がある。越後の戦国大名・上杉謙信が、敵対する武田信玄の領国であった信州の民の困窮を救うため、日本海側の塩を送ったという伝説による。あまりにも有名な話だが、むろん史実ではない。

だが実際、江戸時代には越後から大町、穂高を経て松本へと続く街道を、塩や魚などの海産物が運ばれていた。

安曇郡を南北に貫くこの「塩の道」、中世は千国道と呼ばれたが、近世には仁科街道、北国脇往還など、地域により呼び方が異なっていた。糸魚川街道の呼称が定着するのは、明治に入ってからである。またそのルートもしばしば変わっており、さらに複数の道に枝分かれしていたから、実態を把握することは難しい。

ただ、その時の政治や経済の情勢に影響された変化も見て取ることができる。

## 中世の千国道と在地領主たち

中世、穂高神社の東を「千国大道」が通っていた。この道は、矢原郷から穂高を経て古厩郷、さらに大町へ通じていたと考えられている。当時、全国に「御厨」と呼ばれる

伊勢神宮の荘園が散在していた。安曇郡にも、矢原

御厨と、現在の大町市社を中心とする仁科御厨があった。室町時代、

仁科御厨の年貢は木曾から美濃を通って伊勢へと運ばれていた。仁科・矢原両御厨から木曾方面に通じる千国大道は、伊勢神宮への年貢運搬の道でもあっただろう。

仁科御厨の管理者は、在地領主の仁科氏であった。戦国時代には、この一族が古厩郷に移って古厩氏を名乗っている。郷村とともに千国大道の交通もおさえていたのだらう。

一方、矢原御厨の現地の管理者は、よくわかっていない。鎌倉時代に起きた承久の乱には、矢原太郎という武士が幕府方として参加しており、この矢原氏が管理者であったとも推測される。隣接する細萱郷に來住した細萱氏が管



細萱の町並の鉤の手  
(手前から右へ折れる道)

理するようになったのは、一四世紀ごろからである。

さて、千国道に話を戻そう。『豊科町誌』によれば、中世、穂高神社から矢原御厨の中心地であった矢原郷や、針俣<sup>はりまた</sup>（現在の踏入）、寺所を通って熊倉で犀川を渡り、府中と呼ばれた松本方面へ向かう道があったという。

だが細萱氏が力をつけてくると、細萱の町並地籍、現在の細萱洲<sup>すわ</sup>波神社附近へと道筋がずれていく。神社の北には、鉤の手に折れた道が残っているが、これより南は、戦後の圃場整備によって道跡が消えてしまった。以前はここから細萱の新屋を経て、唐笠木<sup>からかさぎ</sup>の長者池（現在の成相八坂神社東側附近）に至る道があったという。

### 真々部の千国道は戦国時代の棒道か

戦国時代後期、安曇郡を掌握した武田氏は、仁科氏の一族を真々部に配置した。この真々部氏の館を中心に町場が展開していた（六九頁参照）。千国道の一本は、当地を南北に縦貫しており、棒道のひとつであったといわれている。棒道とは、越後の上杉氏との戦いに備えて武田氏が整備した軍用道路で、武田の騎馬隊が早く移動できるよう、棒のようにまっすぐな道に仕上げられたという。

確かにこの道が軍勢の行軍に利用されたことは想像に難くないが、棒道の存在については異論もある。そもそも戦

国時代の軍団の編成として騎馬隊の存在は疑問視されているし、棒道そのものの史料の根拠も薄いという指摘である。だが当時、真々部には市<sup>いち</sup>が開かれていた。周辺の鄉村から物資が集まり、交易されていたという点では、当地は地域の経済の中心であった。

また真々部の市は、大町や穂高の市のような千国道沿いの主要な市と同列に扱われていた。だから真々部を通る千国道も、軍用道路ならずとも、地域を支える主要な道のひとつであったことに変わりはない。



真々部を通る千国道

## 熊倉道と熊倉橋

中世末期、千国道の沿道に成相郷の枝町として成相町が開かれ、さらに近世初頭に新田町村が整備された。ここから周辺の村々への道も分かれており、成相新田宿が豊科地域の地域経済の中心となっていた。

成相町村からは、松本方面へ向かう道が三本延びていた。熊倉道、飯田へ抜ける松本往還（または松本街道）、そして真々部を通る飛騨街道（真々部道）である。

熊倉道は、現在の豊科公民館前や八坂神社の北を通る。そして吉野村の梶海渡、熊倉村の柳原を経て熊倉橋で犀川を渡り、松本城下へと向かっていた。



八坂神社北側を通る熊倉道

熊倉には渡し場があった。貞享騒動の頭取として罪に問われた多田加助も、この渡し場から犀川を渡り、松本城下の牢へと連行されていたと伝えられている。

だが熊倉の渡しの利用実態が確認されているのは、むしろ近現代に入ってからである。昭和三〇年代まで犀川を対岸へ渡す舟が運行されていた。

鉄線と鉄鎖で固定した線で結ばれた舟が犀川を往復するものだったという。

江戸時代にさかのぼってみると、川の増水で橋が流された際に、一時的に渡し舟が出されたことはあったが、基本的には橋が架けられていたようだ。

初めて橋が架けられたのは貞享騒動を四〇年ほどさかのぼる正保二年（一六四四）のことである。享保三年（一七一八）の架け替えの記録によれば、長さ四一間（約七四・五尺）余り、幅八尺（約二・四尺）の橋だったという。



熊倉の渡し跡のモニュメント

成相町で分かれた熊倉道は、犀川の幅の最も狭い場所に架けられた熊倉の橋から対岸の下田へと渡り、養老坂を経て松本城下へと通じていたのである。

ただし享保十一年（一七二六）以降、川手筋の田沢・光以北が松本藩領から幕府領になると、藩はその境となる下田集落に口留番所くちどめを置いた。ここでは人改めや犀川下りの筏や船荷物の改めなどを行った。初めは大飼新田村の望月氏が番所役人を務めていたが、宝暦年間（一七五一―六四）ころから熊倉の高木氏が任に当たったという。

この橋は、江戸後期に出版された『続膝栗毛』ぞくひばりげで狂歌にも詠まれている。本書の取材旅行に訪れた十返舎一九も渡ったのであろう。

熊むらのはしくま（倉）（橋）はさぞかし タこへて

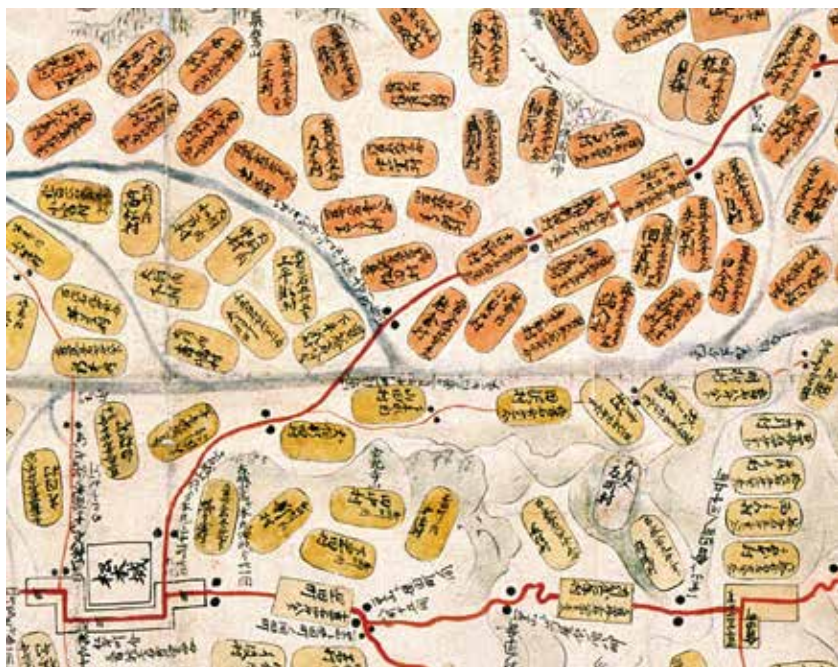
照てりわたるらん 夏なつの月の輪わ



熊倉橋跡の碑

## 松本往還と飯田前

松本市立博物館には、「信州安曇筑摩郡画図」（写真）が所蔵されている。作成年代は書かれていないものの、村々



「信州安曇筑摩郡画図」（部分・上が西）（松本市立博物館蔵）



成相の追分で分岐する  
松本往還（左手の道）と  
飛騨街道（手前の国道147号）

の名称などからして、江戸時代前期に作成された「正保の国絵図」のもとになった絵図であろうと推定されている。

主要道は赤い線で示されている。前頁に掲載した写真の左下から右上へと延びる赤線が、安曇郡へのルートである。松本城の北から宮渕・犬飼新田の両村を通って木曽川（現在の奈良井川）を渡り、下平瀬村から梓川を渡って飯田村の東に至っている。そこから吉野、成相新田を経て等々力・保高の両町へと抜ける道がある。当時は、この道が松本城下と安曇郡とを結ぶ主要道になっていたのである。

豊科郷土博物館所蔵の拾ヶ堰の絵図にもこの道が描かれている。本図は拾ヶ堰開削の二年前、文化十一年（一八一



拾ヶ堰の計画図（豊科郷土博物館蔵）  
熊倉橋と飯田前から梓川を渡る「松本往来」の道が赤い線で描かれる

四）五月に描かれた計画図であると推定されており、現在の堰筋とはやや異なっている。「飯田宮（現在の下飯田諏訪神社）」の北側を通り、梓川を渡る「松本往来」という道が赤線で描かれている。松本往還のことである。正保年間にも文化年間にもこの道が示されている一方で、拾ヶ堰

の計画図には熊倉橋も描かれている。熊倉道とともにこの松本往還も江戸時代を通じて主要道として利用されたと考えてよいだろう。

飯田から梓川を渡る地点を、「飯田前」と呼ぶ。ここに簡易な橋も架けられていたらしい。松本往還ルートは、明治一年（一八七八）の村絵図にも描かれている。また下飯田と飯田前の間には新町という集落もあった。だが、梓川を通る糸魚川街道や、大正四年（一九一五）の信濃鉄道（現在の大糸線）の開通によって交通量が減少する。さらに大火によって新町集落が衰微してしまい、飯田前の渡河も行われなくなったようだ。

### 真々部道から糸魚川街道へ

成相町村の追分から南へまっすぐ延びる飛騨街道（真々部道）は、上真々部で長尾道と合して、長尾前で梓川を渡る。長尾道は、上長尾の平福寺への参詣道でもあった。近世には飛騨方面から松本城下を通り、善光寺へと参詣する人々が通る道としても利用されたというから、この渡し場は交通の要衝であっただろう。

長尾前の渡しは江戸時代初期からあったようで、元禄年間（一六八八―一七〇三）には丸太の仮橋が渡され、江戸時代末期の嘉永二年（一八四九）に渡し舟が始められたと

いう。この渡し場は七日市場村の庄屋が管理していた。梓川の水量の少ない時期に、小倉御林（のちの小倉官林）から九間（約一六㍎）ほどの木材を伐り出し、四本一組にして橋を架けた。だが川の水量が安定せず、通年の使用は困難であったと考えられている。

松本市島内の梓川端に長尾前の渡し跡の標柱があるが、ここに道祖神文字碑とともに「船魂御神石」の碑が並ぶ。渡し舟が利用された痕跡である。

明治一〇年代、新たに糸魚川街道を開削する計画が持ち上がった際も、この長尾前の渡し付近を通るルートを設定する案が出て、高



「船魂御神石」が建つ長尾前の渡し跡（松本市島内）



明治43年（1910）に架けられた梓橋の写真（個人蔵）

家村などの賛同を得た。だが豊科村の町部から松本へ出るにはやや遠回りになる。そこで吉野を経て飯田で渡河するルートを取る案も出て対立した。結局、高家村の真々部を通る案が採用され、明治二十三年（一八九〇）に梓橋が架けられ、新糸魚川街道が開通した。

当時は木造の橋だったので、大水が出て流され、度々架

け替えられた。現在のコンクリート橋に架け替えられたのは、昭和六年（一九三一）のことであった。昭和三十九年（一九六四）に拡幅工事が行われ、現在に至っている。

梓橋は安曇野市と松本市をつなげる重要な橋となった。だが自家用車の普及が進んだ現在、朝夕の交通渋滞が目立ってきた。平成二〇年（二〇〇八）、渋滞緩和のため、アルプス大橋が開通したが、交通量の増大に伴って、さらなる対策が必要となり、令和四年度に再度拡幅工事が予定されている。

## 田沢橋と光橋

江戸時代、光と田沢にも渡し場が設けられていた。

光の渡し場は、現在の光橋より一〇〇メートルほど下流にあった。南村から渡し場へ二本の小径が通じ、渡し場からは、重柳の原村と、踏入恵光院の二集落へ通じる道があった。また明治一二年（一八七九）の道路絵図には、徳治郎から田沢の沢ノ渡を経て大口沢に至る道が描かれており、犀川の渡河には渡し舟を使ったと考えられている。

これらの渡し場は、寺所や踏入の人々が光や田沢の山に刈<sup>かり</sup>敷<sup>しき</sup>集めに行く時など、日常的に利用されていた。

だが一方で、会田騒動の舞台にもなった。明治二年（一八六九）に起きたこの事件は、新政府の直轄地となってい



旧田沢橋（後方に新しい田沢橋が見える）



昭和51年（1976）の光橋

た会田で発生した。一揆勢は近隣の村々の有力者の屋敷を襲撃しながら光城山を越え、光の渡しから犀川を渡って、松本藩領の重柳に至っている。

また江戸時代の貞享年間（一六八四―八八）、執田<sup>しゅうた</sup>光村<sup>くわむら</sup>の和田甚左衛門が芝切（開発者）として中堀へ移住するまでは、毎日光の渡しから中堀へ通っていたと伝えられている。安曇野の歴史的事件の一コマに登場する渡し場である。

田沢橋が初めて架けられたのは、明治三七年（一九〇

四）である。当時は木橋で、洪水の際に度々流失した。昭和二四―二六年にも修理を行ったが、その後三年半かけて鉄筋コンクリート橋への架け替え工事を行い、昭和三〇年（一九五五）一月に完成した。現在、昭和五五年（一九八〇）の豊科インター田沢寺所線（現在の県道五七号安曇野インター堀金線）の開設に伴って架けられた新田沢橋とともに利用されている。

光橋は、昭和二八年（一九五三）に木橋が架けられた。

しかし軽自動車が一台通れるほどの幅員しかなく、重量制限もかかっており、来たるべきクルマ社会に対応できる橋ではなかった。

また犀川の増水のたびに損壊し、昭和三〇年、三六年（一九六一）、四一年（一九六六）、四七年（一九七二）、五八年（一九八三）の五度にわたり復旧工事が行われた。

現在の光橋は、平成元年（一九八九）に豊科町が国補橋梁整備事業として着手。平成八年（一九九六）に着工し、完成したのは、平成一三年（二〇〇一）のことであった。国道一九号や豊科インター附近の渋滞解消などが期待された光橋は、安曇野への東の玄関口として、今も多くの車両が行き交っている。

（逸見大悟）

# 5 法蔵寺の山門

あゆみ

法蔵寺ほうぞうじは山号を周岳山しゅうがくざんといい、永正三年（一五〇六）に吉野梶海渡に領主の丸山丹後守が創建した浄土宗寺院である。慶長一六年（一六一一）の成相新田宿の建設に伴い、戦国時代の館跡であった現在地に移転した。

江戸時代は寺領を持ち、寮舎が六坊もある大寺であったが、松本藩による厳しい廃仏毀釈によって明治四年（二八七二）に廃寺となった。明治維新後、境内に松澤求策らが学んだ成新学校が開かれ、安曇野における自由民権運動の原点となった。寺院は明治一三年（一八八〇）に再興された。

## 山門（県宝）

山門は、寛政元年（一七八九）に建てられたことが棟札からわかる。正面屋根には唐破風が付き、各所に唐獅子や龍などの精細な彫刻が施されている。

棟梁は、下諏訪の大隅流の宮大工伊藤（柴宮）長左衛門。



法蔵寺山門（長野県宝）

彼の作品には、諏訪大社下社春宮幣拝殿（下諏訪町重要文化財）、水上布奈山神社本殿（戸倉町重要文化財）などがある。法蔵寺山門も、彫刻の密度と出来栄から、彼の代表作の一つとされる。なお、本堂手前の鐘楼門も伊藤長左衛門によって寛政五年（一七九三）に建てられた。

### 元・安楽寺の庫裡

本堂の右手の庫裡は、間口が大きい信州特有の本棟造りで、正面の白壁が目立つ重厚な木造建築である。

もとは安曇野市堀金烏川岩原にあった江戸時代中期に建てられた安楽寺の庫裡であった。廃仏毀釈によって安楽寺のほとんどの建物が壊されたが、この庫裡だけは穂高の豪商によって移築して利用された。再興した法蔵寺に仮の本堂として明治三八年（二九一二）に移築された。

（原明芳）



山門の精細な彫刻

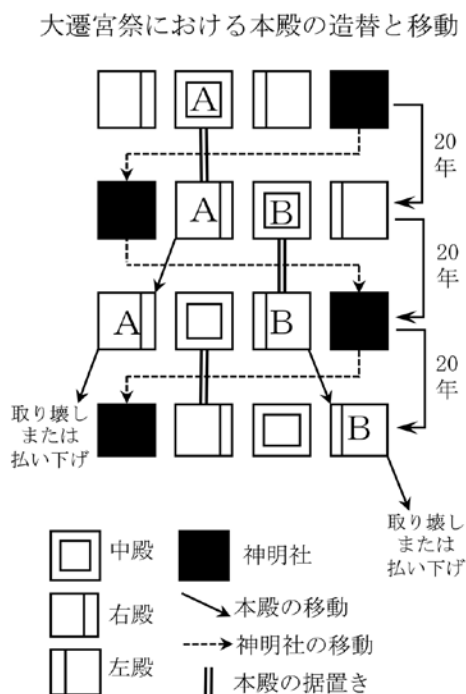


本堂と庫裡（元・安楽寺庫裡）

# 穂高神社の払い下げを受けた神社の本殿



穂高神社の本殿（向かって右から左殿、中殿、右殿）および神明社（左）



青木治『穂高神社とその伝統文化』をもとに作図

本書『豊科の宝』が刊行された令和四年は、穂高神社の小遷宮の年に当たっている。遷宮とは、社殿の修理や建替えのため、御祭神を一時的に仮殿へとお遷しすることである。

小遷宮は六年ないし七年に一度の本殿の修理を指し、かつては「御破損」と呼ばれた。対して本殿の建て替えを大遷宮と呼び、数えの二一年に一度行われる。大遷宮祭は、穂高神社の最大の祭儀と言ってよいだろう。



穂高神社から払い下げられた本村神社の本殿

最近大遷宮祭が行われたのは平成二一年のこと。その七年後の平成二八年には小遷宮祭が行われた。さらに六年後の令和四年も小遷宮祭の年にあたり、この七年後の令和一年に次の大遷宮祭を迎えることになる。

主祭神を祭る本殿は三棟あり、それぞれ一柱ずつ、中殿ほたかのみことに穂高見命、左殿に綿津見命、右殿に瓊瓊杵尊が祭られている。また別宮として天照大御神を祭るやや小さめの神明社があり、あわせて四棟が並んでいる。

大遷宮では新たに中殿が造られる。それ以前の中殿は左

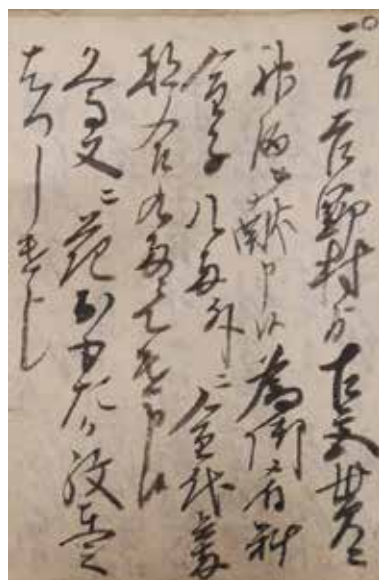
殿または右殿として使われるが、この時、その本殿は動かさず、次の大遷宮で外側に移動させる。またその次の大遷宮で、いちばん外側に来ていた本殿が取り壊されることになるが、近世から現在までの例をみると、ほとんどが近隣の神社に払い下げられていた（右頁の図を参照）。穂高神社で都合六〇年間、主祭神を祭る本殿として鎮座したあと、ほかの神社の本殿として再び活躍するのである。

中世までは七年に一度、本殿以外の「庁屋」「御門屋」などもそっくり建て替えられていたようである。現在のようにならぬ二〇年周期で大遷宮祭を行い、その間、六ないし七年の間隔で小遷宮が行われるようになったのは、江戸時代前期の寛文九年（一六六九）以降である。

いちばん古い穂高神社の本殿はどこ？

青木治著『穂高神社とその伝統文化』によれば、穂高神

| 建築年         | 払い下げの年      | 移築先     |
|-------------|-------------|---------|
| 宝永六年（一七〇九）  | 明和六年（一七六九）  | 吉野神社    |
| 享保一四年（一七二九） | 寛政元年（一七八九）  | 本村神社    |
| 明和六年（一七六九）  | 文政一二年（一八二九） | 及木伍社神社  |
| 寛政元年（一七八九）  | 嘉永二年（一八四九）  | 真々部諏訪神社 |



明和6年の吉野神社への「古宮」払い下げの記録  
(穂高神社・東大祝家文書)  
最後の二行に、「かへる又二花おもたか紋これあり、はつし遣わし申し候」とある

社から払い下げを受けた本殿として、現在最も古いものは、小田多井八幡神社の本殿という。寛延二年（一七四九）に払い下げられたことから逆算すると、元禄二年（一六八九）の建築となる。その次から史料の残りが十分ではない中ではあるが、左の表の通りと推定されている。

これ以降は省略するが、穂高地域の神社への移築が多く、平成元年（一九八九）には、戦後に開拓された豊里の豊里穂高神社に払い下げられている。

一方、江戸時代にさかのぼってみると、豊科地域の神社への払い下げが多い。明和六年（一七六九）の大遷宮の記録には、四月三日に吉野村の人々が、御神酒と「御肴料」として金子八両と、さらにもう一両を持参して、「古宮」を貰い受けていったと書かれている。

また「古宮」正面の墓股にあつた「花おもだか紋」を取り外した、とも書かれている。沢瀉は松本城主・水野氏の



吉野神社の本殿

家紋である。穂高神社の遷宮には、松本藩が深くかわつていた。遷宮のたびに松本城主からは初二〇俵が下賜されていた。だがそれだけでなく、本殿の建築にも関与してい



真々部諏訪神社の本殿（上）と墓股の沢瀉紋

たようだ。この明和六年の大遷宮の記録にも、郡奉行や作事方の役人とのかわりを示す記述が見られる。

だが当時、城主は水野氏から戸田氏に交代していた。移築とはいえ更新される吉野神社（江戸時代は諏訪明神と称した）の本殿に、以前の城主の家紋を付けたままにするわけにはいかなかったのである。

ところで『豊科町誌』では、真々部の諏訪神社（江戸時代は諏訪大明神と称した）の本殿の建築年について、若干の疑問を投げかけている。本殿の墓股に、沢瀉紋が取り付けられたままになっているからである。

この家紋の状況を重視すれば、当社の本殿は、すでに戸田氏の時代となっていた寛政元年の建築ではない。水野氏が改易された享保一〇年（一七二五）以前の建築ということになる。であれば、これまで最古とされていた小田多井八幡神社より古い、寛文九年の建築、つまり最古の穂高神社の本殿になるのではないか、という問題提起である。

だがそうであっても、真々部への払い下げは、寛文九年から六〇年後の享保一四年（一七二九）、戸田氏の時代になってからの移築となる。なぜ吉野神社の時のように沢瀉紋が取り外されなかったのだろうか。建築様式の検討も踏まえて、今後の研究が必要である。（逸見大悟）

# 1 玄蕃稻荷

細萱げんばいの玄蕃稻荷いなりは京都伏見稻荷から勧請かんじようしてきた稻荷社と伝えられている。本殿の裏側には大王農場北を流れる除沢川が流れており、最盛期には馬で参拝に来る客もいて、この川が馬で一杯になったともいわれている。家内安全・豊産・豊蚕・千客万来など、さまざまな願いをかなえてくれる神と考えられていた。祭日は初午はつうま・八十八夜・七月一日の山開きの日の三回があり、特に二月の初午の日は賑やかであった。現在も初午の日には、お参りする人が多く、お札やだるまのほか、稻荷の太巻きなどが売り出され、購入していく人が多い。

養蚕が盛んであった昭和初期までは、松本平・安曇平をはじめ小谷村や四賀村などの遠方からの参拝者もあって、たいそうな賑わいだった。松本の養蚕や蚕種を扱う家も、この神社にお参りに来たという。豊蚕を願う近在の家々では、米の粉で繭玉をかたどった団子をつくり、本殿に供えたので、繭玉の団子が五く六俵もそなえられ、神社の周辺の家々に配った時代もあったという。本殿に供えられている繭玉団子をもって帰り、その年の「お蚕様Ⅱ養蚕」があたると、感謝の意味を込めてもらってきた団子の倍の数の団子をお供えした。



初午の日の境内（2021年）

参拝の帰りには豊蚕を祈願して眉と髭の黒いだるまを購入する人も多く、養蚕がほとんど行われなくなった現在も家内安全を願って購入していく。また、現在は受験のための合格祈願、子宝祈願などを願って参拝する人もいる。社務所前に南向きに建てられた昔の本殿と言われているお社の中には、松本の清水から移された男根像がまつられており、子宝に恵まれない夫婦がお参りしたところ子宝に恵まれた。そのことが評判になって以来、お参りするとご利益があると言われている。

稻荷信仰はこんな風にそれぞれの時代を生きる人々の求めに応じて、ご利益の内容も少しずつ変化しながら、現在に至っている。境内の千度石には「天保十一年」の銘があるところから、文化・文政時代の一八〇〇年代初頭には、神域が形成されていたものと考えられている。玄蕃稻荷は現在まで、豊科地域をはじめとする近在の人々の様々な願いを聴き、見つめてきた神といえよう。（倉石あつ子）



御守と太巻稻荷寿司



境内にある小授け稲荷

## 2 熊倉の子ども念仏

春彼岸の中日。梅や桜、桃などの花が一斉に咲き出す頃、高家熊倉区の町村と柳原では、寛政一〇年（一七九八）に建てられた念仏供養塔の前の広場で、子ども念仏が行われる。

「善光寺様」とも呼ばれるこの行事では、子どもたちが輪になって座り、その真中で、鉦を叩く子どもの調子に合わせて、念仏を唱えながら大数珠を回す。

かつては、小学校一年生から六年生の男の子のみで行うもので、朝から夕方まで、念仏に飽きると遊んだりして休みながら一日中回したという。子ども念仏の時には、その冬に新しく編んだネコ（厚手のムシロで、囲炉裏端などに敷いた）を三、四枚敷いた。一日敷いたネコは、夕方にはすっかり平らになって馴染み、使いやすくなっていたという。

彼岸は盆と同様、先祖を供養する大切な期間でもあった。嫁に出た娘が里帰りしたり、家族が亡くなって初めての彼岸には、近親者がお参りしに来るなど、賑やかだったという。農家の多い豊科では、春彼岸を境に田畑の準備が始まる。子ども念仏は、その前の大切な行事でもあった。

（宮本尚子）



鉦に合わせて、念仏とともに数珠を回す子どもたち（平成24年（2012））  
（写真提供：下田忠寿）

# 3 豊科の道祖神と石造物

安曇野は道祖神の宝庫。道祖神はムラの入り口などに祀られ、ムラに災厄が入るのを防ぎ、人々、家々の安全を守ってくれる神と信じられていた。縁結びの願掛け、子どもの無事な生育、五穀豊穰などさまざまな願いをかなえてくれると信じられ、子どもの願いもきいてくれる神と考えられていた。祭日は八月・一月・彼岸などさまざまで、道祖神仲間、子供組などと呼ばれる小学生を中心にした子どもたちが、この神の祭日を主導した。

そして、道祖神は街中にも野の道にもあちこちに見られる。平成七年（一九九五）刊行の『豊科町誌』に掲載されている道祖神の数は一三五体。それ以降、観光のために立てられたものも含めれば、その数はもっと増えているかもしれない。

「道祖神」などと刻まれた文字碑と、男女の像が彫られた双体道祖神が並び立つところもあり、バラエティーに富む。作られた年代は一八〇〇年代のものが多く、そんな中で、少し変わった道祖神がみられる。豊科本村の大日堂前に集められた石造物の一体に、まるでハンゲルのような文字を刻んだ「アビル文字の道祖神」がある。

碑のアビル文字は向かって右から、「ヤチマタヒコノカ

ミ」「ヤチマタヒメノカミ」「クナトノカミ」の三神が刻まれている。ヤチマタ（八衢）・クナト（岐）が分かれ道・辻などを意味する語であるところから、道祖神として祀ったのだという。ただし、この石造物は、本村の村庄屋丸山家に屋敷神として祀られていたものを、明治末から大正初期に現在地に移したものとされる。本村中と刻まれている



豊科本村のアビル文字の道祖神



真々部殿村の木造道祖神。子どもたちが持って各家を訪れる



本村の文字碑

るのは、移動した折、木戸で共有するものだからということとで刻んだものと伝えられる。道祖神として祀られるようになったのも、このころからという。

その他、豊科地域の中には、写真のような多様な道祖神碑がみられるし、真々部殿村の木彫りの道祖神なども見られる。

殿村のものは、古川<sup>ふるかわ</sup>犁<sup>すき</sup>を考案した古川氏が子どもたちのために作ったものという。木彫りの道祖神の首には紅白の布をより合わせた紐がついていて、一月一日、「御年頭<sup>ごねんとう</sup>」といって小学生たちが像を担いで家々を回る。各家の玄関に立つごとに「おめでとうございます」といって、道祖神を前に倒して頭をさげさせる。嫁を迎えた家、新築した家などは、小学生にご祝儀をはずむ。

(倉石あつ子)



真々部の道祖神



NHK連続テレビ小説「おひさま」のロケのため新たに制作された、「おひさま道祖神」



踏入の道祖神



中曽根の双体道祖神

# 4 七夕と道祖神祭り

安曇野の七夕は月遅れの八月七日に行われる。

豊科に限らず七夕に道祖神祭りを行う集落は多い。道祖神に、短冊や七夕の飾りをつけた笹が供えられているのを、市内のあちこちで見ることができる。夏に道祖神祭りを行うのは、安曇野の道祖神祭りの特色でもある。

豊科高家中曽根夫領<sup>ふりょう</sup>では、八月六日朝、子どもたちが、祭りの用意をする。道祖神を傘のついた提灯や、願いごとを書いた短冊<sup>たんざく</sup>などをつけた竹で飾る。

もともとは子どもだけで行っていた祭りだが、今は大人も手伝っている。飾りつけが終わると、大人も子どもも、道祖神にお参りし、子どもたちはお菓子やジュースをもらって解散となる。

一時期、夫領では、子どもがいなくなって、道祖神祭りは大人の宴会だけになっていたが、平成二〇年頃から、子どもが増えてきたので、七夕の道祖神祭りができるようになった。七夕の飾りは、八日の夕方片付ける。飾りはその年の当番が次の年まで預かっておき、祭りが近づくと、次の年の当番が受け取りにくることになっている。

子どもどころ道祖神祭りをしたというMさんやIさんから次のようなお話を伺った。



七夕飾りをした中曽根夫領の道祖神（2013年）

昭和三〇年頃までは、道祖神祭りに参加するのは男の子だけだった。道祖神の場所は、現在より一〇〇メートルほど北で、隣にはつるべ井戸があった。

祭りの時は、道祖神の小屋掛けもした。暑い盛りでもあったので、拾ヶ堰で水遊びをした後に小屋掛けした。小屋

は、道祖神を巻き込むようにして、ネコ（藁わら）で編んだ厚手のムシロ）で作った。天井がなかったので寝泊りはしないが、近所の畑から盗んだ枝豆を茹でて食べたり、よその家のトマトを取ってきたりして怒られもした。七夕まんじゅうも作ってもらった。その頃は、どの家でも養蚕かいこをしており、夏蚕かっごが終わってお金が入ると餡子あんこを買って、家で作った小麦と餡子で七夕まんじゅうを作ってもらい、二



道祖神になにを願う？

日間くらいは食べていた。安曇野では、七夕まんじゅうを、収穫した夏野菜とともに七夕様にお供えする風習がある。七夕は、夏の収穫を祝う祭りの日でもある。

（宮本尚子）



高家飯田道祖神の七夕飾り（2016年）。  
かつては、疱瘡ほうそう流しの赤い輪が供えられた

# 5 成相・新田のあめ市と福俵曳き

正月七日、成相と新田には、御柱が立てられる。

成相の御柱は八坂神社の南西にある成相コミュニティセンターの敷地に立てられ、新田の御柱は新田公民館の敷地に立てられる。どちらも、交通量の多い道路わきに立てられることから、立てる時も倒すときも細心の注意が払われる。

成相と新田の御柱はともに、昭和三〇年頃まではそれぞれ



新田の御柱（2015年）



成相の御柱に取り付けられた福俵  
（2018年）

れ新田神社と成相八坂神社に立てており、七日の朝には、子どもたちが「おんべをたてるで出ておくれ」とふれまわった。この時の御柱は、五、六間ほどの高さだったというが、それ以前は一〇間（一八呎ほど）もあった。御柱の中心ほどには大小の福俵（ふくへ）を取り付けられる。正月一五日に御柱を倒すと、飾りとして取り付けられたキンチャクやヤナギバナ（紙垂）は、一年の無事を祈るお守りとして各家に持



人間ピラミッド（2018年）



若者と地域の人々が福俵を引き合う（1991年）

ち帰られ、福俵は前年に慶事のあった家に納められる。かつての宿場町、後には商店街となった成相・新田らしく、福俵を納める先は、事業所などが多く、平成二七年（二〇一五）には新しく建てられた市庁舎に納められた。御柱を倒す日は、あめ市の日でもある。初市でもあるあめ市は、明治初め、成相の八坂神社に市神いちがみを勧請かんじょうしてから

始められた。福俵は、あめ市のなか行われる「福俵曳き」ののちに納められる。

成相・新田の福俵は大きく重い。かつては二〇貫（およそ七五ななご）あったという。福俵を曳いて、町中を練り歩くのは、法被はっぴ・股引ももひき・足袋たびといういで立ちの若者たち。福俵に何本もの縄を取り付け、「ワツシヨイ、ワツシヨイ」と

いう掛け声とともに、数人がかりで曳き回す。途中で、堰などの水に福俵を浸すことで、重さはさらに増す。成相・新田それぞれに設えられた市神様の前では人間ピラミッドが披露される。道路に莫産もぞが敷かれ、その上に三、四人が横になる。「ネロ、ネロ」という掛け声で、横になった人の上で福俵が練られた後、福俵の上に若者たちが乗って人間ピラミッドを作る。上段にオヤカタが立ち上がると、観衆から拍手喝采が湧き起る。



福俵を引き合うのは今も昔も変わらない（2018年）

福俵を納める際も、若者たちと納める先に引き入れようとする町の人々との間で、福俵を引っ張り合う攻防戦が繰り広げられる。街道を行き交う人々も足をとめて見守る中、最後は、町の人々が勝ち、福俵が納められる。

福俵曳きが終わると、午後は、成相・新田ともに神輿<sup>みこし</sup>が出る。豊科のあめ市は、御柱の福俵と初市の神輿、歳神と市神が交錯する一日でもある。

## 吉野の御柱

吉野の町村・中村・荒井・梶<sup>かじ</sup>海<sup>かい</sup>渡<sup>と</sup>の御柱は、市内の他の御柱のように、紙垂などで飾りつけない。一年を通して御柱は道祖神の傍らに立ったままだ。毎年正月には、ゴシンボクといって、一辺ほどの竹筒に御幣や水引で飾りをつけたものを、御柱に取り付ける。昔は堰の土手などにあったクヌギを使ったが、現在は手に入れるのが難しくなり、竹筒に変えられた。ゴシンボクは、小正月に降ろされ、前年に慶事のあった家に入れられる。ひとつとは限らず、いくつもゴシンボクが取り付けられる年もある。慶事の数だけゴシンボクがあるからだ。

## 「チンチンガラガラドウソジン」の思い出とともに

## 中村の御柱



吉野中村の御柱に取り付けられたゴシンボク（2018年）

中村では、一月二日朝、集会所に集まって子どもがゴシンボクを作る。昔は子どもだけで作ったが、このごろは、大人も手伝っている。小正月の頃にはゴシンボクを降ろし、祝いごとのあった家に納める。

昭和六年（一九三一）生まれのMさんの話によれば、昭和三〇年代、祝いごとといえ、前年に男児の生まれた家、屋根を葺替<sup>ふきか</sup>えたり、屋根の峰を変えたり、「取り婚<sup>とりこん</sup>礼」といって、嫁や婿をもらった家などであった。嫁に行ったり、婿に行ったりした家は対象にならない。女兒が生まれた場合も対象にならなかった。必ず一月一四日にゴシンボクを降ろしたので、学校があれば、登校する前に納めに行った。「チンチンガラガラドウソジン」と歌いながら行き、「おめでとうございます」と言って座敷などに放り込み、ご祝儀をもらった。乱暴に投げ込んで、畳を切ってしまうこともあったが、おめでたいことだからと怒られることはなかった。

ゴシンボクの行事を行ったのは、小学一年生から六年生の男の子だけで作る子供仲間だった。兄弟がいても入ることはできたが、女の子は入れなかった。ゴシンボクを投げ込んでもらったご祝儀で文房具などを買って、仲間に配っ



御柱を立てる。かぞえて7年に一度のことなので、立てる技術の継承も難しい。(2018年)

た。ゴシンボクは一年ほど床の間に飾る。竹で作られるようになってからは、家に投げ込むようなことはなくなり、子どもたちも恥ずかしそうに玄関から手渡すだけになった。子どもが少なくなり、現在は、男女の区別なく参加できるようになった。

### 継承の難しい御柱立て 梶海渡の御柱

梶海渡では、平成三〇年（二〇一八）一月一日に新しい御柱に立て替えた。何しろ、御柱を立て替えるのは、かぞえて七年に一度のうえ、それを六組の当番でまわしている。当番を経験するのは、生涯に一度か二度であるため、前回どうやって立て替えたか、忘れてしまうこともしばしばだという。そのせいか、本来、色紙の紙垂などで飾りつけない御柱に、間違えて飾りをつけてしまったこともあった。

御柱立ての当日、子どもや大人五〇人ほどが、集落のなか、御柱を曳いてくる。以前は大口沢から曳いてきたが、この年は、国道一四七号線の拡幅工事で伐採した吉野神社の社叢の木を使った。ビニール紐を裂いて作った払子はっすのようなオンベを振って音頭をとる。

梶海渡の道祖神は、田の畦にある。かつては往来だったが、ほ場整備で田の畦になり、道祖神もそのまま残され

た。

御柱が道祖神の傍に到着すると、御柱を取り付けるための柱に、根元を合わせる。御柱の上には「オシメ」と呼ばれる竹筒に笹と御幣をつけた飾りを取り付ける。次回まで

柱が立つと人々から拍手がおこった。  
御柱立てとゴシンボクを取り付ける行事は別で、ゴシンボクは子どもたちが行うことになっている。現在は、PTAと育成会がその役を担っている。  
(宮本尚子)

これは降ろさない。風雨で取れてしまうこともあるので、長い釘で打ち付ける。そのほかの飾りはわら縄を二重にしたものを七ヶ所巻きつける。



御柱曳き。細竹にビニールを裂いてつけた「オンベ」で音頭をとる



御柱の上には、オシメと呼ぶ笹と御幣で作った飾りがつけられる

# 6 消えた村 コオロギ

豊科地区だけでなく、安曇野市内の皆が親しんでいる山、光城山。そのちよつと長峰山寄り、白牧の集落跡の向かい側ぐらいの場所を右に入ると、すぐ左手に子ノ神の道祖神がある。道祖神を左手に見て、まっすぐ二、三〇分ほど尾根道を歩いて少し下った所に、コオロギ（蟬）という集落があった。

白牧から車道を渡って歩き始めると、じきに右側に光城山の山並みとその向こうに安曇野の市街地が見下ろせる景色が現れる。目の高さの向こうの谷には、豊科カントリークラブのきれいな緑の芝生が見え隠れし、振り返って見ると、長野道の高速道路がある。ちょうど、四賀バス停あたりだろうか。安曇野の市街地まで用事を足しに行ったコオロギの集落の人々も、この景色を見ながら、自分たちの集落まであと一息と、ほつとしながら足を止めていたかもしれない。もちろん、高萩集落の方からものぼっていきけるが、あまり交流はなかったという。

集落は山の尾根付近ではなく、尾根を曲がりこんでちよつと下った場所に、人の眼から隠れるように家があったようだ。それもそのはず、この集落には、以下のような落人伝説が伝わる。



草むらに隠れて難をのがれた落人（村上紀子画）

平家が滅びる少し前のこと。源義経の大軍に敗れた木曾義仲の家来の一人が、命からがら、コオロギのあたりまで落ちのびてきた。長い距離を歩いて疲れたので、家来は草原に横たわり、コオロギの声を聴きながら、ついうとうとしてしまった。ところが、急にコオロギの声がびたりとやみ、家来は異変に気付く。すでに追っ手はすぐ近くに迫っており、家来は慌てて草原に身をひそめた。

運よく、敵は家来を見つけることなく通り過ぎていった。家来は、良かった、助かったと、コオロギが異変を知らせてくれたことに感謝し、ここを終の棲家とすることにした。やがて、ここに四軒の集落ができ、コオロギに命を助けられたことを忘れぬために、集落の名前もコオロギと決めた。

それ以降ずっと四軒の集落があって、養蚕、炭焼き、麦、大豆、蕎麦などのほか、凍み豆腐づくりを生業としていたという。昭和四〇年代ごろから、便利さを求めて山の集落を離れていった。

現在は、平成一〇年（一九九八）の大崩落によって集落跡もほとんど見る事ができなくなり、仕事に使ったと思われる軽トラックが残され、人が植えたと思われる鬼灯ほおずきが色づいていた。遠くで鹿の鳴き声が響いた。（倉石あつ子）



かつてコオロギの集落のあった跡地

# 7 豊科に伝わる「おはなし」

かつて豊科の家々は、三世代とか四世代が一緒に暮らしている家が多く、子どもの世話は年寄りに任されることも多かった。そんなとき、年寄りには昔から伝わるいわゆる「昔話」をして、仕事から帰る親を待った。「むかしむかしあるところになあ」とはじまると、子どもは身を乗り出し「うんうん」「それから」などと、先を促す相槌を打ちながら聞き入った。やがて、核家族化が進みテレビが普及したことなどによって、テレビ放映される「日本昔話」などが祖父母の話に代わるようになった。

## 鳥吞爺

むかし、あるところに百姓のじいさんがいたって。ある日、たんぼを起こしていたら、何の鳥だか知らねが、小鳥が飛んできたってさ。その鳥を爺さんが取って食べちゃっただって。そしたら、爺さんのへその所から足が出てきたって。それで、その足を引っ張ると

ピピンピヨドリ ゴヨタカラモツテコイ ピンシンコロリン

とゆっただって、ひっぱるたんびに。



鳥吞爺（村上紀子画）

（と、町誌の話はここで切れているが、この後、「話を聞きつけた殿さまが爺さんを城に呼んで鳴かせてみる。と、宝をもってこいとは縁起がいいと、爺さんに褒美をとらせ、爺さんはこの後豊かに暮らしたとき」という部分が欠落してしまっている。）

## 馬鹿婿

むかしむかし、あるところに馬鹿婿があつたそうなの。あるとき、嫁の家に里帰りしたら、牡丹餅<sup>ぼたんもち</sup>を出してくれて、

それがうんとうまかった  
って。それで、牡丹餅を  
お土産にもらって帰った  
だって。婿はその名前を  
忘れないように「ぼたも  
ち ぼたもち……」と繰  
り返し言いながら帰った  
って。ところが、途中  
で、川を跨ぐ時に「どっ  
こいしょ」と掛け声をか  
けたら、その途端に「ぼ  
たもち」を忘れてしま  
い、「どっこいしょ どん  
っこいしょ……」に変わってしまつて、家に着いたら、  
「お土産にどっこいしょをもらってきたぞ」といったそう  
な。おしまい。

（馬鹿婿話にはこのほか色々なパターンがあるので、日  
本中にどんなパターンがあるか探してみて下さい。）

## 日光寺の狐

下鳥羽の日光寺には老狐が住んでいた。この狐、下鳥羽  
の人たちには決して悪戯をしなかった。ある時、上手の老



馬鹿婿（村上紀子画）

人が日光寺へごみさらい（焚きつけの松葉などを集める作  
業）に行った。この老人はひょうきんな人だったので、今  
日こそ俺が狐を化かしてやる、と老狐が木の下で昼寝をし  
ているのを確かめてから、いちっこ（松葉やゴミを入れる  
縄製の籠）をかぶって、ごみさらいを持って、遠くで踊っ  
て見せた。目をさました老狐は、自分が老人をだましたと  
思つて喜んでそれを見ていた。老人は「しめた」とばかり  
に、だんだんに狐に近づき、ごみさらいを振りかざして老  
狐を殴りつけた。老狐はさつと身かわして逃げ、どこへ  
ともなく姿を消してしま  
った。仕方なく、老人  
はそのまま家に帰った。  
が、老狐の怒りはもの凄  
くて、このことがあつて  
から、今まで悪戯された  
ことがなかった下鳥羽の  
人々にも、葬式帰りにご  
馳走をとられる、あるい  
は日光寺の林の中で道が  
分からなくなるなどの被  
害が及ぶようになった。

（倉石あつ子）



日光寺の狐（村上紀子画）

# 1 郡の中心地「豊科」

## 「豊科」(とよしな)の誕生

今では違和感なく使われている「豊科」(とよしな)という地名は、江戸時代以前には存在しない。そもそも最初に「豊科」村となった地域は、松本藩の行政区画では、成相組と保高組という二つの組に分かれていた。成相組は現在の松本市島内地域や梓川地域の岩岡村を含んでいたし、保高組は名前のとおり現在の穂高地区を中心として、かつて東穂高村・西穂高村であった地域が含まれていた。江戸時代が終わり、明治時代になると、新たな行政区画が編成された。

明治四年(一八七二)四月に戸籍法が發布されると、戸籍を管理する行政区が設置された。上鳥羽村・下鳥羽村・成相本村・成相町村・成相新田村は第六八区に、吉野村は寺所村・踏入村・細萱村・重柳村と共に第六九区となった。続いて整備された大区小区では、第六八区が第三小区、第六九区が第四小区となっている。

戸籍の管理とは別に、学校の運営やその他の事務を行う村も整備されていく。明治七年(一八七四)には江戸時代

江戸時代の村々と組分け

| 組   | 村 名                                                                          |
|-----|------------------------------------------------------------------------------|
| 成相組 | 上鳥羽・下鳥羽・成相本・成相町・成相新田・真々部・飯田・小海渡・中曽根・熊倉・岩岡・小宮・高松・南中・北中・青島・下・町・北方・上平瀬・下平瀬・犬飼新田 |
| 保高組 | 橋爪・狐島・貝梅・等々力・等々力町・保高・保高町・白金・矢原・柏原・牧・吉野・細萱・寺所・重柳・踏入                           |

※下線がある村が最初に「豊科」となった



明治7年(1874)合併布達書

|                              |                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>明治七年十月廿二日</p> <p>筑摩県印</p> | <p>信濃国安曇郡</p> <p>上鳥羽村</p> <p>下鳥羽村</p> <p>本村</p> <p>吉野村</p> <p>成相町村</p> <p>成相新田村</p> <p>豊科村</p> <p>右八ヶ村合併</p> <p>豊科村</p> <p>右村々合併申付候条、以来豊科村ト相唱可申候、然テ八從前各村役場ニ有之候諸簿冊等無洩取難候上、更ニ改称之村名ニ相改当県布達第百十号之旨ニ照準シ、夫ニ整理可致候、尤村方ニ寄即時諸簿冊合帳差支候儀モ候ハ、当分之内何耕地分卜記載置候儀ハ不苦候条、廉々厚相心得示後一層親睦協和弥以御趣意柄遵奉可致、此旨相達候事</p> |
|------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

の村を数村合併し、新しい村とすることを筑摩県が指示している。この時、誕生したのが「豊科」（とよしな）村である。

豊科村誕生の証明書である筑摩県からの通達は、額装され豊科町が保管してきた。通達には、合併する上鳥羽村・下鳥羽村・本村・吉野村・成相町村・成相新田町村が書き上げられ、「右六ヶ村合併 豊科村」とある。豊科の文字には「トヨシナ」と振り仮名がある。村名に振り仮名を書くことは稀であり、新たな言葉として「豊科」が生まれたことが分かる。昭和三〇年（一九五五）刊行の『豊科町誌』には、「豊科、トヨシナという村名は、鳥羽のト、吉野のヨ、新田のシ、成相のナから合成された。「成合」という案もあったらしいが、豊科の方が採択された（豊科村誌）。（中略）それはこの寄合世帯の名称としてきわめて適切であり、清新にして典雅、ながく人々の慣用に堪えるものであった。伝えて藤森寿平の発案にかかるといふ」とある。実際に藤森寿平（桂谷）の発案であったかは定かではないが、確かに現在豊科の名称は地域に定着した。

## 南安曇郡の中心地として

明治十一年（一八七八）に郡区町村編成法が公布されたことにより、大区小区制は廃止された。代わりに郡長を置

くことになり、郡役所が必要となった。南安曇郡の郡役所は現在の新区に置かれることとなった。役場は最初、藤森武平家宅を年一二〇円で借りて設けられた。明治二十四（一八九二）には新庁舎が建てられている。郡の政治の中心が村内に置かれたことにより、郵便局や警察署が整備されていった。その後、大正八年（一九一九）には、郡役所の隣に公会堂も建設されている。この公会堂は地元出身者である丸山盛一の寄付金もあり建設された。こうした役場の設置には、豊科村の地理的条件だけではなく、江戸時代以来、周辺村を成相組として取りまとめてきた大庄屋層・村役人層の手腕が大きかったとされる。

郡制は大正一二年（一九二三）に廃止となり、公会堂は豊科町に譲渡される。郡役所の期間は約四〇年であったが、様々な施設を設置する契機となり、町の発展に寄与した。郡役所が設置されたこ



建設中の南安曇郡公会堂

とによる経済効果を会田<sup>けつるい</sup>血涙はこう記している。「町村長となり、郡会議員となり、衛生組長となり、消防組長となり、軍人分会長となり、郡役所や警察署へ紋付を着、袴を穿いて若しくはフロック（フロックコート）でやって来る位な連中は矢つ張り、会議の済む迄は滞在もして、或は宴会し、或は買物もし或は芸者を買ふものである、見よや、毎次の懇親会、歓迎会、送迎会等に土着の豊科町民の見るは少なく、何れも近郷近在の名誉職或は外来居住の月給取の方多きを以て見ても証するにあらずや。百人の宴会一つあらば豊科成相町に一人平均五円宛費へば五百円、敷島一つ宛でも十円と言う事になる、」（「南安曇郡役所廃庁舎を如何に処分すべき乎」『信濃不二』第七七号、大正六年）。こうした新田区、成相区の発展を基礎として、大正四年（一九一五）には豊科村は南安曇郡で最初の町「豊科町」となった。

## 昭和合併の「豊科町」

周辺村である高家村・南穂高村・上川手村の豊科町への合併の動きは昭和二七年（一九五二）頃から本格化する。豊科町内では当初、三田村・烏川村も含めた合併案があった。交渉は五ヶ村全てと行われており、昭和二九年（一九五四）三月には、三田村・烏川村にも合併の申し入れを行

ったが実現されなかった。

南穂高村との合併は元々、大正末期に合併の構想があったため円滑に進んだ。昭和二九年四月には二ヶ村に先行して仮調印を行っている。一方で、上川手村は松本市・東筑摩郡部・豊科町に隣接する立地から、どの市町村と合併するか判断に苦慮していた。村内でも豊科町に最も近く、生活圏も豊科町と一体であった徳治郎区は最初から豊科町との合併を望んでいたが、南部の集落の意見が大勢を占め、松本市への合併で意見をまとめてしまう。ところが、この合併案は松本市から拒否されてしまった。再び村内の合意をまとめたところ、豊科町への合併が多数を占めたため、豊科町へ合併することとなった。しかし、合併後も村内北部の集落では東筑摩郡部への合併を切望する動きが消えなかった。

高家村は、真々部区が明盛村（三郷村）への合併を希望していた。この時期、中学校の整備が自治体合併と共にすすめられていたが、真々部区では温明（瑞穂）中学校（後の三郷中学校）への編入もすすめていた。これは真々部区が一日市場区と深い繋がりを持ち、水利や商業圏においても一体であったからである。真々部区の合併への反対運動は激しく、集落の代表者が県議会に陳情を行うなどの具体的な活動を行っていた。長野県当局もこの動きを重視し、真々部区に分村について、具体的に対応するよう町に求め



昭和29年（1954）町村合併による協定書

ている。合併後の昭和三〇年（一九五五）九月二四日には住民投票が行われ、分村賛成が有効投票の三分の二に達せず不成立となり決着した。

合併に関し、上川手村北部や高家村真々部区からは反対意見があったが、昭和二九年一月一九日に豊科町は南穂高村・上川手村・高家村の四ヶ町村で合併の調印を行うことになった。合併調印書には、各村の問題を抱えながら、合併に至ったことが文面から読み取れる。まず、町税は四ヶ町村で統一することができず、昭和三二年度まで不均一賦課を行う。次に、高家村の学校建設負債に関して、新町が全額

負債を負う代わりに、南穂高村・上川手村へは交付金を支払う。こうした問題を抱えながら新豊科町は誕生した。合併の翌年刊行された『豊科町誌』には、合併の経過を記した「とよしな」第五三号からの引用として、「新町に望むもの」が紹介されている。「道路交通の発達充実は日に進み、隣りの松本市との時間的距離は益々短縮せられつつあり、松本の経済圏への吸収が一層濃化されつつあるので、これらの点を深く反省考慮すべきであると思う。先ず以つて新町二万の人々の大半を占める農家の経済力を培養し、而して松本の経済圏から独立して、新町二万とその周辺地域の購買力を掌握出来るような商業態勢を速かに確立すべきであると思う」。ここには、南安曇郡の中心地として発展してきた豊科町を、松本市へ追従する自治体とするのではなく、独自に発展していきたいという自治体としての矜持が表現されている。

（青木弥保）



昭和29年（1954）合併調印式の様子

# 2 時代を映す学校教育

明治五年（一八七二）八月発布の学制により、明治六、七年には成新学校（本校は新田町村）や研成学校（本校は柏原村）の支校を含め、各村に学校が設置された。当時の在籍者数は左の轟家文書の通りである。就学率は、明治七年（一八七四）五月、轟家文書によると、男八八割・女二割である。男女共同参画が当たり前の現代と比べて、明治当初の世相を見ることができる。

明治三四年（一九〇一）豊科尋常小学校の校則を見ると、第一条から御真影や教育勅語に関わることが記されている。第一九条には、「火災

洪水等非常ノ場合ニ於テハ先ヅ御真影及ビ勅語謄本ヲ奉護シ次ニ人命書類器物等手ノ及ブ限り之レヲ保護スルヲ要ス」とある。

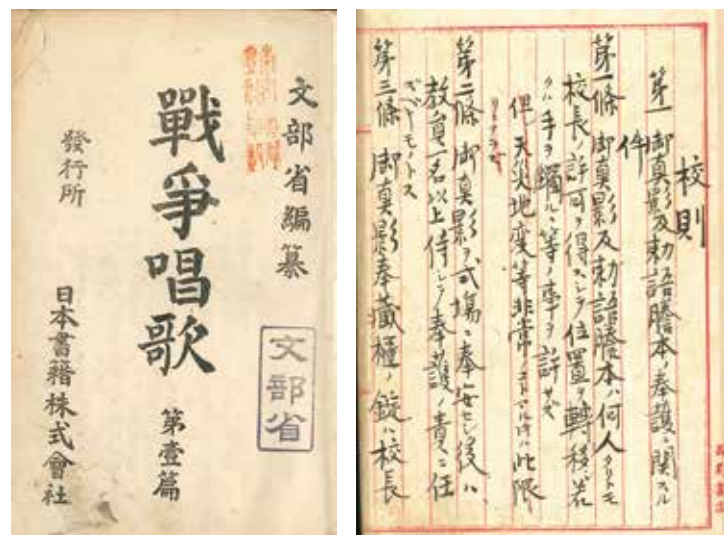
明治三十七年（一九〇四）、日本はロシアとの戦争を迎える。その年の文部省歌『戦争唱歌』を見ると、その緒言に「本書ハ日露戦争ニ関スル唱

歌ヲ編集シタルモノニシテ高等小学校教科用ニ充ツル目的トス」とある。

高家小学校跡地に哲学者西田幾多郎揮ごうの石碑（市指定文化財）が建っている。昭和一五年（一九四〇）一一月

| 生徒名     | 父名 | 母名 | 住所   |
|---------|----|----|------|
| 生徒百十三人  | 男  | 女  | 無倉村  |
| 生徒七十六人  | 男  | 女  | 飯田村  |
| 生徒七十四人  | 男  | 女  | 真金村  |
| 生徒百五十八人 | 男  | 女  | 下島村  |
| 生徒百三十三人 | 男  | 女  | 新田町村 |
| 生徒六十八人  | 男  | 女  | 吉野村  |
| 生徒三十九人  | 男  | 女  | 寺所村  |
| 生徒二十九人  | 男  | 女  | 踏入村  |
| 生徒五十八人  | 男  | 女  | 細萱村  |
| 生徒四十二人  | 男  | 女  | 重柳村  |

1874（明治7）年6月轟家文書



明治37年「戦争唱歌 第1編 文部省編さん」（左）と明治34年「校則並諸規定」（右）、いずれも豊科尋常小学校



高家小学校跡の西田幾多郎碑

一〇日、高家小学校で行われた皇紀二千六百年記念式典において、高木幸村長が記念碑の建立を提案した。当初、文字は「二千六百年記念碑」、揮ごう者として首相、文相、県知事、書家の名前が挙げたが、「教育尊重の村風を考え、私たちの心を清めるようなことを」として、碑文、揮ごう者は藤沢利男高家小学校校長に一任された。藤沢校長の師である京都大学高山岩男を介して西田幾多郎の碑文、揮ごうが現実のものとなった。昭和一六年（一九四一）五月一二日、建碑式典の辞として高木村長は「今、世界動乱裡にありて真に日本文化の根底に培い、以て新秩序樹立の使命を思う時、この碑の意義誠に深きを覚ゆ」と述べた。

昭和四五年（一九七〇）四月、南穂高小学校と上川手小学校が統合され豊科北小学校が開校する。昭和四五年三月一三日の上川手小学校学校日誌に上川手地区の住民運動について記されている。「学校統合反対、上川手小存置期成同盟会五名来校。一六日を期して田沢地区の子どもの同盟休校をすることになった旨の通告。学校側は、子どもを休ませることは、闘いとは別のことで、非教育的なことである。今まで育ててきた成果を破壊することであり、子



南安曇郡消防団全団員集合写真 豊科中学校（年代不詳）

どもが傷つくだけであるから絶対に避けてほしいと申し入れる。各部落は、集会を持ち、態度決定をすることになった。」「一六日の学校日誌は「午後一時一〇分、休校を取り止めて役員に引率されて集団で学校に児童到着。代表者来りて、あいさつ、陳謝して帰る。」とある。

翌年、昭和四十六年二月一日に結ばれた協定に基づいて桜坂区ができ、昭和五七年（一九八二）四月豊科東小の新設へとつながる。

昭和三〇年（一九五五）一月一日豊科町、南穂高村、高家村、上川手村の合併により、豊科中学校が発足する。昭和三五年（一九六〇）一月一日に披露された

校歌の作詞者務台理作は、「安曇野の風物の中に浮かび出ている明るい高原の日の光、澄にとおる山々のすがたさういう自然にふさわしい若い諸君の夢と希望を盛り入れようと思いました。果たしてそれが十分にできたかどうか、もし不足しているのでしたら、そこは諸君の力であふれ出るほどたくさん盛り入れていただきたいのです」と語っている。

豊科中学校の前身は組合立豊穂中学校である。昭和二八



養蚕学習の風景（上）と  
昭和59年 第35回農業クラブ全国大会（下）

年度に生徒会誌『とよほ』が創刊された。「学友雑誌が発刊されたことは、自分達の手で進んで自分達の道を切りひらいて行こうとする心がまえは、民社会の今日に欠くことのできない基本的な事柄でありますし、……」は生徒会長飯沼信義（安曇野市歌作者）の言葉である。

南安曇農業高等学校は、旧南安曇郡役所庁舎を仮校舎として、大正九年（一九二〇）四月一日「長野県南安曇農学校」（県内に一二校ある甲種実業学校のひとつ）として

開校する。学科は、農学科（三七人）・蚕学科（二一人）である。大正期、養蚕業がいかに重要な産業であったかを知ることができる。大正十一年（一九二二）新校舎落成式の席で関谷吾一校長は「顧みれば、大正七年度通常県会に於いて甲種農学校を南安曇郡豊科町に設立するの議まとまり、大正八年より建築にとりかかりまして、これは県当局及び本郡有志諸彦の実業教育振興に対する御熱心なる賜と深く感謝して居る所であります」（『信濃不二』一四六号）と述べた。



大正13年に竣工した豊科高校校舎



昭和26年8月8日  
ソフトボール部全国大会優勝表彰式

農業学校の特色のひとつに「学校農業クラブ」がある。昭和二三年（一九四八）スタートの農業高校生の自主的・自発的な全国組織として誕生した。昭和五九年（一九八四）に開催された第三五回大会は、長野県として初の主催大会であり、当校は、測量競技会場となった。令和二年（二〇二〇）には、開校一〇〇周年を迎えた。

豊科高等学校は、大正一二（一九二三）年四月、豊科小學校の一部を借り「長野県豊科高等学校」として開校する。生徒数は、二学級一〇〇人であった。新校舎の落成は、大正十三年一月一八日であった。当日の様子を校友会誌『校友』に「午後四時締切までに参観者三千名。余興として、一六日より本日まで長野県下青年野球大会あり。

本日より二一日まで四日間、吉野宮神社境内に掛小屋を設け、落語、浪花節、万才等間断なく行われ、本日より三日間に数百発の煙火打ち上げらる。」とある。

昭和二六年（一九五一）には、ソフトボール部が、県大会六試合を勝ち抜き、東海（静岡、岐阜、愛知、三重、長野）大会優勝。さらに八月八日、大阪西宮球場での決勝戦で、四国代表香川県丸亀高校を四対〇で破り全国優勝を果たした。

（平沢重人、逸見大悟）

# 豊科地域の学校変遷図

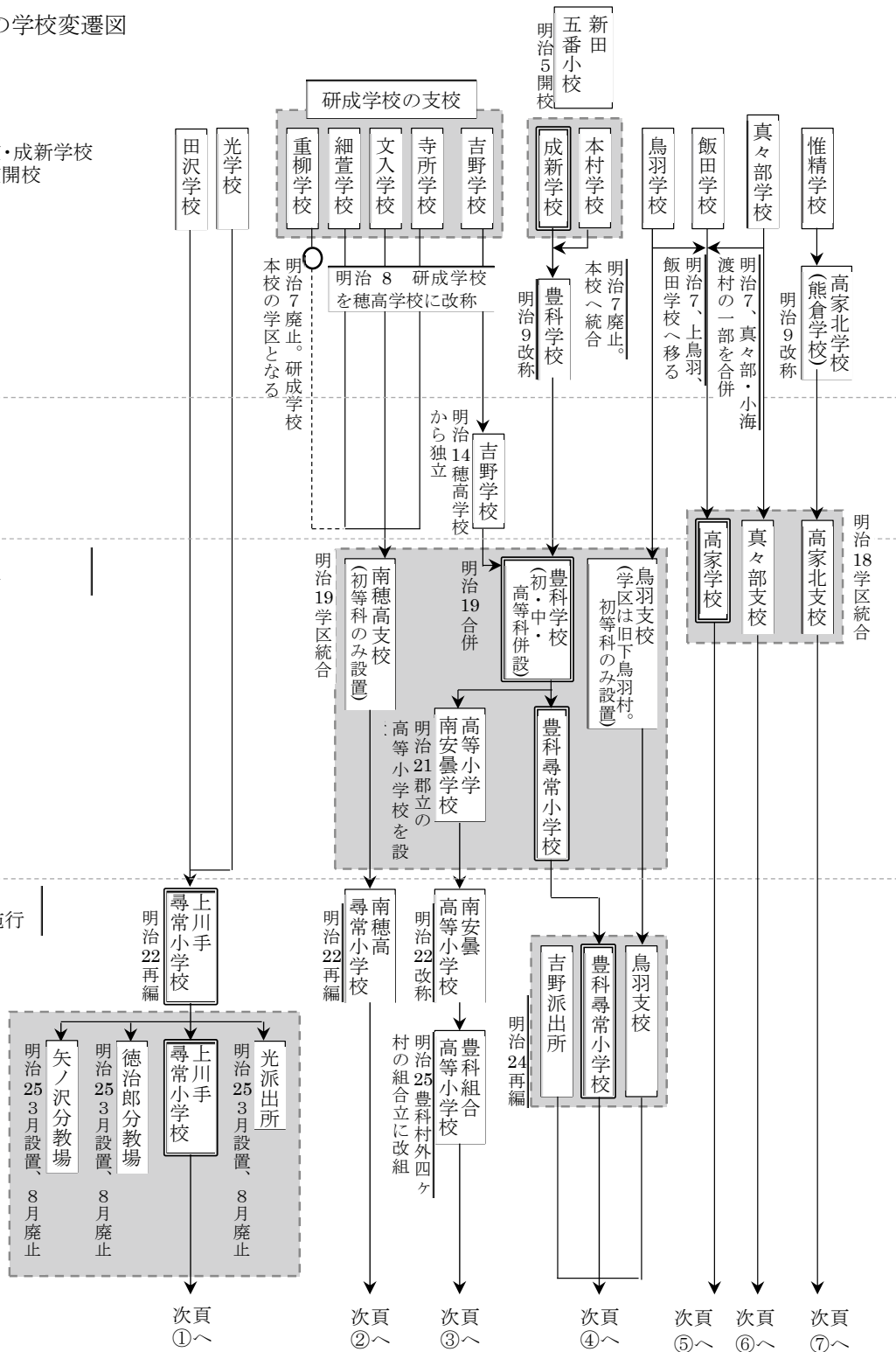
明治5  
学制発布

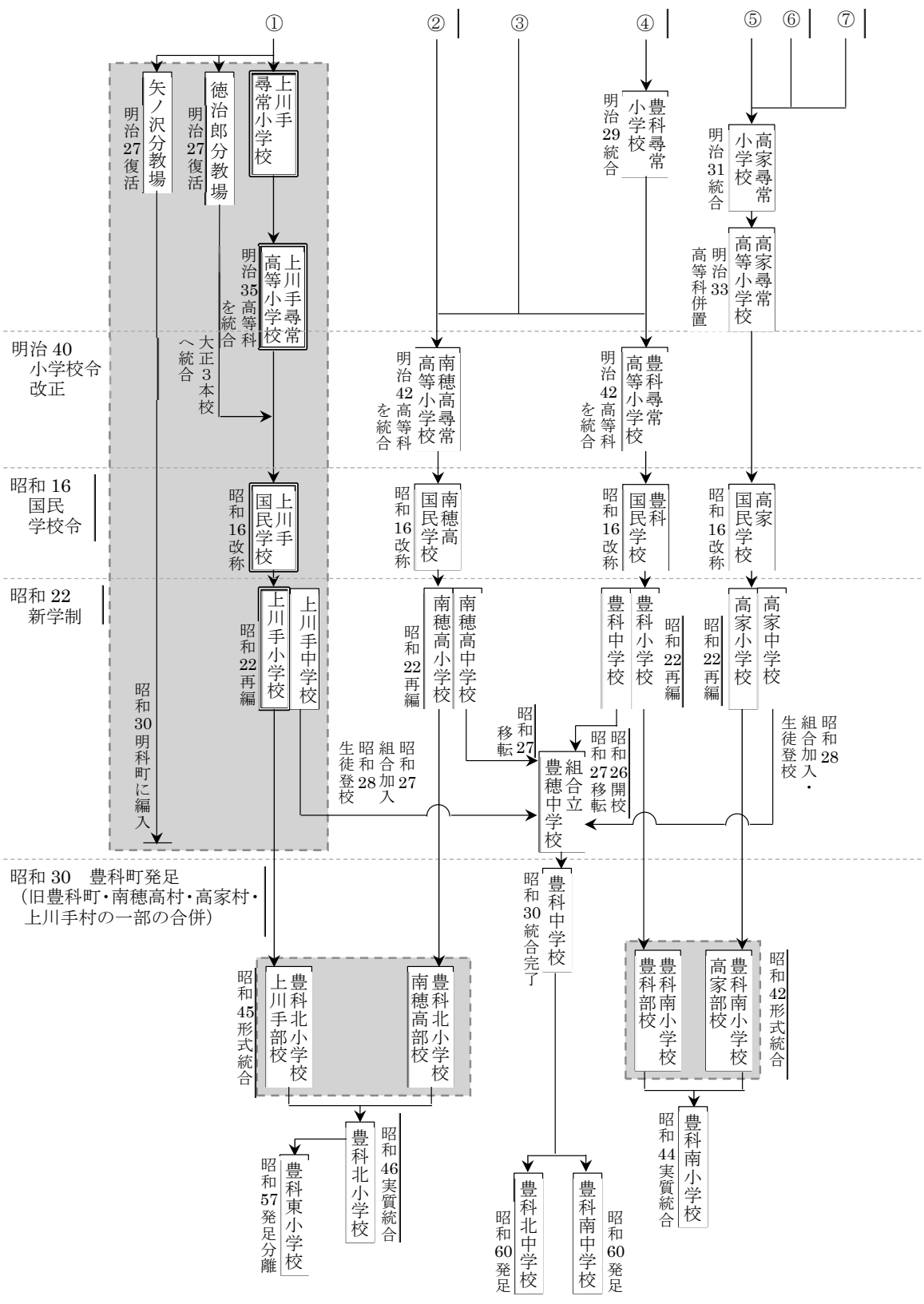
明治6  
研成学校・成新学校  
ほか各校開校

明治12  
教育令

明治19  
小学校令

明治22  
町村制施行





# 3 藤森桂谷

安曇野の近代教育の源流を作り、画人・文人として生きる

豊科新田公民館前庭に建つ藤森桂谷頌徳碑（市指定文化財）は、大正三年（一九一四）四月二六日、發起人太田伯

一郎、野本要次郎、細田八郎、河野自由治、小沢直太、藤森与一郎、藤森平蔵の七名によるものである。建立趣意書に「天稟に於いて温厚仁愛の性と清廉恭謙の資とを有し、行状に於ては、父母につかえて至孝の子となり子孫を導いては硯徳の師となり、先師先輩に対しては有札の弟子となり朋僚に交りては信義の友となり、国体を尊奉し公益を図り窮者を救つては

忠良の民となり、畢生技

を丹精に研きて高雅の美術家となり、居常眼を典籍に曝して篤志の文学家となる（以下略）」とある。画家・文人としての

自己研鑽の姿、家族はもとより、交わったすべての人に対して思いやりにあふれる人柄、学校教育のみならず、青年教育・

社会教育に至る地域の教育力向上のための道筋を創案実践された桂谷の生き様が伝わる文章である。

## 環境や境遇が桂谷の基盤をつくる

桂谷は、二人の兄が早世であつたり、病弱であつたりしたため、大事に育てられた。質屋業を営む商売屋の一人息子であるので、商人としての力量をつけさせたかったのであろうが、書や絵の修行も認められてきた。桂谷は、自伝『ささ栗』に「幼少の頃から書が好きで、時々泣くことがあつても筆墨をやるとすぐに泣き止んだということがある」と記しているように、書を好んでいたことがわかる。また、父郁三郎が歌人であり、母かくが俳人という家庭環境も桂谷が文芸に秀でた要因であろう。

## 教育の必要性を感じ、学校をつくる桂谷

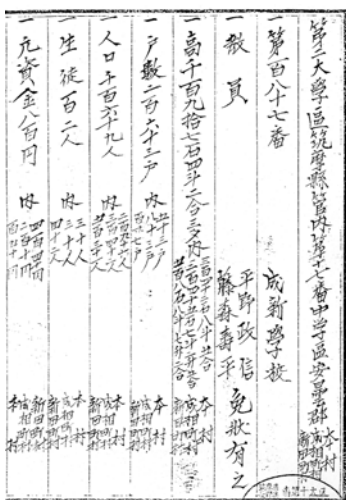
桂谷が絵や歌を学んだ二〇代に交わった中山静逸、藤本鉄石、村山半牧らは画家や歌人であるが、幕末という時代の中で尊王攘夷に動いた人物であつた。彼らと交わつたり



藤森桂谷頌徳碑



法蔵寺境内の「成新学校跡」の石柱



「成新学校資料」 轟家資料

幕末の動乱期に上京し、時代の流れを肌で感じたりする中で、現状を直視する眼力や、あるべき社会の実現のために行動で示す実践力を身につけた人物を育てることの必要性を感じていた。そして民衆には学問がなければならないと公教育の必要性も感じていた。

桂谷は明治三年（一八七〇）九月、松本藩庁に学校設置の建白書を挙げる。明治政府が学制を布く二年前のことである。明治四年（一八七一）、私財を投じ法蔵寺に実践社を開く。塾長に高遠藩から高橋白山を招いている。

明治五年（一八七二）学制が發布されると、郷学設置世話係となり、学校設置のために奔走する。この年、新田に開校した郷学は、「新田五番小校」と呼ばれた。翌明治六年には「成新学校」を設置し、初代校長に就く。

明治八年（一八七五）、青年教育の必要性を感じた桂谷

は、成新学校に小学校卒業生の為の変則科を設けた。ここに木曾から武居用拙を招き、若者を指導させた。松澤求策、降旗元太郎、太田伯一郎などの人材もここから輩出している。

桂谷は、教員の力量向上のための教育会の必要性を感じ、明治十二年（一八七九）に南安曇の教員を穂高学校に集め、集会を開いている（『月桂新聞』明治十二年一月一七日）。信濃教育会創立は明治十九年（一八八六）である。南安曇教育会の設立が全県の連合教育会への重要な役割を果たしたことがうかがえる。

昭和三年（一九二八）一月発行の雑誌『信濃教育』四九五号で信州物故の教育者二九名を特集している。藤森桂谷が取り上げられていることから教育者としての評価の高さがわかる。

## 自由民権に力を注ぐ桂谷

武居用拙は民権思想の考え方を持っていた。桂谷もまた、民意が反映される政治が行わなければならないと考えた。そのためには国民に民権意識を根付かせることの必要性を感じていた。松本で開かれた「政談演説会」に刺激を受け、豊科学校での演説会では自ら演台に立っている。県議会議

員補欠選挙に立候補（当選）するなど政界への道を選択したり、明治十三年（一八八〇）二月一日に結成された「奨匡社」の設立委員二〇名の中に名前を連ねたりするのはこの時期である。

## 文人・画家としての自己を確立しようとする桂谷

母が亡くなった後の桂谷は文芸の道に傾倒する。それは、母の死を長男破麻三に告げる手紙に「借財片付け次第教育従事はやめ申すべく存じ候」にあるように、教育から身を引く決意が記されている。母存命中はしっかりと孝を立てようとしてきた桂谷の献身の表れでもある。

五九歳の時に自宅に「羅漢堂」という庵を建て俗離生活を始めるが、三〇代の頃から度々遊歴の旅をしている。旅の様子を綴った日記『西遊日知』（明治六年）を読むと、桂谷にとって、旅は病に苦しみ、郷里を思い、文芸に心ふ



日記『西遊日知』に描かれている絵



日記『西遊日知』  
（「厚」は桂谷の本名）

るわせながら人としての生きる意味を思索する修行であったことがわかる。

文化庁文化財保護審議委員であった松下隆章は、明治三四年（一九〇一）作の山水「明山秋雲」を見て、「これは傑作である。このくらいの絵を少なくとも一〇年も描き続けていたら横山大観に比肩する画家として名が出たであろう」と言われた。桂谷の作品は、満願寺の天井絵や有明山神社の天井絵・額面として見ることができる。

## 「藤森桂谷文庫」・日記等資料

桂谷死後、遺された資料は宗教や儒教など一九に分類され「藤森桂谷文庫」として豊科町へ寄贈された。その後、昭和五四年（一九七九）の豊科郷土博物館開館に合わせて当博物館へ移管され、令和二年（二〇二〇）には安曇野市



満願寺聖天堂天井絵「竜ノ図」

文書館に移管（九六八点）された。桂谷の日記「ささ栗」や「江南紀行」などの遊学記録など一二〇点と合わせて閲覧できるようにになっている。

平成一八年（二〇〇六）三月、豊科交流学習センター「きぼう」の南側「武蔵野の小径」に没後百年を記念して建立された「藤森桂谷之碑」がある。碑文には「いやふかく しげれる夏草 いろいろの 花咲く秋も 遠からなくに」の桂谷自作の歌が刻まれている。『師表の人 藤森桂谷ものがたり』（平成一八年三月 藤森桂谷没後百年記念事業実施委員会）には、この歌に込められた桂谷の思いを「精いっぱい根をはり、枝をのばし、緑豊かに葉をひろげてしげる夏草が、やがて秋になると、それぞれに見事な花を咲かせることを、例えば若い人たちがそれぞれにはげみ、己をきたえ、みがき、やがて立派な人に成長してくれることを期待している」と記している。



藤森桂谷之碑

## 略歴

- ・天保 六（一八三五） 一〇月六日 豊科新田に藤森郁三郎、かくの長男（由之助）として生まれる
- ・嘉永 三（一八五〇） 四君子絵を描き、和歌を詠む
- ・嘉永 四（一八五一） 二月元服 名を厚とする
- ・安政 一（一八五四） 名を寿平とする
- ・安政 四（一八五七） 雅号として桂谷を名のる
- ・万延 一（一八六〇） 大町佐々木宗元の長女佐々木みちと結婚
- ・明治 四（一八七一） 法蔵寺に私塾「実践社」を開く 塾長は高橋白山
- ・明治 六（一八七三） 「実践社」改め「成新学校」 校長は藤森桂谷
- ・明治 八（一八七五） 一月各村の頭文字を取って「とよしな」と村名を命名する
- ・明治 八（一八七五） 九月成新学校に変則科（後の猶興義塾）を併設 武居用拙が塾頭
- ・明治 一（一八七八） 豊科学校で政談演説会（昼夜二回）を開く
- ・明治 一三（一八八〇） 一月二九日県議会議員補欠選挙に当選する
- ・明治 一三（一八八〇） 二月一日浅間温泉桐の湯で「授匡社」設立趣意書を松澤求策、金井潭とともに朗読する
- ・明治 一三（一八八〇） 一二月県議会議員を辞職する
- ・明治 一六（一八八三） 六月北山学校（池田町）校長として赴任する
- ・明治 一九（一八八六） 四月小倉学校へ転任
- ・明治 二六（一八九三） 自宅に庵が完成、羅漢堂と名付ける 俗離生活を始める
- ・明治 三一（一八九八） 六月二三日満願寺天井絵を完成させる
- ・明治 三二（一九〇〇） 一〇月二一日中林悟竹に多田加助碑文の墨書を依頼する
- ・明治 三八（一九〇五） 五月八日有明山神社額面「連戦連勝図」完成する 七月二六日脳溢血で逝去七十一歳

# 4 長谷川清登飛行士と複葉機の木製プロペラ

豊科町（現・安曇野市豊科）上鳥羽の農家、中野登一郎の次男として生まれた中野清登（のちに長谷川姓となる）は、大正一〇年（一九二一）に、所沢の陸軍航空学校で日本陸軍が招いたフランス航空教育団から、サルムソン二A二型の操縦法を学んだ。

一等飛行機操縦士の資格を取得した後、清登は民間飛行家の道を選んだ。大正一三年（一九二四）、陸軍から払下げを受けたサルムソンを操縦して郷里豊科を凱旋後、松本五〇連隊の練兵場に着陸して松本市民の大歓迎を受けた。



長谷川清登（明治29年（1896）～昭和34年（1959）） 絵葉書（横川裕一氏提供）

これがきっかけとなり、当時の小里頼永市長を会長として後援会が組織された。また松本市は、笹部地区に約一万五〇〇〇坪の土地を確保し、県内初の飛行場を開設し、清登にその使用権を与えた。清登はこの飛行場を拠点とし、陸軍省・通信省の依頼による黒部川上空の連続写真撮影や、山岳遭難の救助のための飛行、飛行学生教育等、民間飛行家として華々しく活躍した。しかし、昭和九年（一九三四）九月の室戸台風で、格納庫・飛行機を失い、その後の活動を断念せざるを得なかった。

清登が所有していた飛行機八機のうち六機がサルムソンであったことが確認されている。サルムソンは二人乗りの使い勝手の良い複葉機で、第一次世界大戦で主力偵察機となり、約三二〇〇機製造された。日本陸軍は将来性を見込んで国内での製造権を獲得、乙式一型偵察機という機種呼称が付けられ、九〇〇機強が製造された。これは大正期では断トツの生産機数で「陸軍は乙式で持つ」と称された。「岐阜かがみがはら航空宇宙博物館」に一分の一レプリカが展示されているが、生き残った機体は無い。

安曇野市豊科郷土博物館と飯沼飛行士記念館は、サルムソン（乙式一型偵察機）の木製プロペラを所蔵している。

博物館所蔵品は、フランスのプロペラメーカーのライセンス品であることを示すステッカーが貼られており、飯沼飛行士記念館所蔵品は、刻印から大正一二年（一九二三）製造の国産品であると考えられる。年代などからどちらにも清登所有機のプロペラの可能性が高く、貴重な航空遺産、地域資料であるといえる。  
（財津達弥）



「（諏訪名勝）諏訪湖水上行飛行の図」絵葉書。（横川裕一氏提供）  
大正期末期に長谷川清登が所有したサルムソンが描かれている



豊科郷土博物館所蔵のサルムソンのプロペラ



プロペラに貼られたフランス「REGY（レジー）社」のステッカー



機種 SALM（サルムソン）、発動機 SALM230Z9（サルムソンZ 9）の刻印



「松本飛行場」格納庫前に5機の飛行機が並んでおり、手前3機の機体番号は「J-TELO」「J-TEXD」「J-BABB」。「J-TELO」はサルムソン、「J-TEXD」「J-BABB」はニューポール81。ニューポール81はサルムソン2A2同様、第一次世界大戦後にフランス航空教育団が持ち込んだ機体で操縦訓練に使用された



飯沼飛行士記念館所蔵のサルムソンのプロペラ

# 5 日本のリンドバーグと呼ばれた飛行士 飯沼正明

## 世界が称賛した航空世界新記録

飯沼正明は、大正元年（一九一二）八月二日、旧南穂高村（現・豊科南穂高）の農家の五男として生まれた。

今も残る彼の手記には、このような一文がある。

「小学校五年生の頃、隣町の出身で今松本にいる長谷川飛行士が、サルムソンで飛んで来て旋回しているのを教室の窓から眺めて、急に飛行機が好きになってしまった。」

大空を舞う自由の翼。少年のこの素直な思いが、彼の後の人生に大きな影響を与えることとなる。

戦前の民間航空は逓信省が管轄官庁で、毎年四名の航空機操縦生を採用するため試験を一月に行っており、飯沼が合格する第十一期には一二七名の志願者が

あった。

昭和六年（一九三二）三月二日、所沢陸軍飛行学校に入校。八ヶ月に及ぶ訓練を受けた飯沼は卒業し、念願の二等操縦士となる。しかしながら当時の二等操縦士は就職先も



飛行学校時代の飯沼正明

少なく、同期生二名は民間を諦め陸軍に入隊してしまう。

この頃の手紙に「就職するといつてもいずれも陸軍関係で、純民間ではありません」と、民間を目指すも厳しい現状と苦悩を吐露している。それでも飯沼は諦めず、教官助手をしながら更に一年間飛行時間を稼ぎ、一等操縦士を目指した。

昭和七年（一九三二）一〇月五日、一等操縦士となった飯沼は、純民間である朝日新聞社航空部に入社。

現在、民間航空といえば航空会社を連想するが、当時はまだ有する旅客機も少なく、民間航空の代表といえば新聞社航空部の飛行機が主要であった。各新聞社は自前の航空部を持ち、記事や写真輸送での報道スピードを競い、また海外親善飛行なども企画していた。パイロット達はその第一線で活躍し、飯沼も名をあげていった。

昭和十二年（一九三七）元旦、朝日新聞社は「亜欧連絡記録大飛行」を発表、同月二〇日、操縦士として飯沼が選定される。

ジェット機時代の今では考えられないことであるが、当時パリー東京間を百時間以内で結ぶということが、世界の航空界の目標であり、欧州の名だたる飛行家が次々と挑戦するも失敗を繰り返していた。国内においてもその日本に向けての飛行に国民の関心が高まってきていた。

「亜欧連絡記録大飛行」はイギリス国王ジョージ六世の戴

冠式の奉祝を兼ね、パリを越えロンドンまでの世界新記録に挑戦するというものだった。それもまだ完成していない、純国産機による日本初の南方コース。この航空路はまだ確立されていない、当時とすれば未知のコースだった。

神風号は三月一九日、三菱重工名古屋製作所にて完成し、各務ヶ原にて飯沼に引き渡されたのは、出発の一週間前の三月二五日だった。

四月一日、羽田飛行場で命名式・出発式が盛大に行われ、天候の回復後、四月六日に立川飛行場より飛び立った。途中一ヶ所で給油し、夜間はビエンチャン、カラチ、アテネで三泊して、現地時間四月九日午後三時三〇分、ロンドン・クロイドン飛行場に着陸。百時間を切り、九四時間一七分五六秒という世界最速の新記録となった。

わずか十数年前の大正時代には、フランスやイギリスより航空教育団を招聘し、飛行機の製造や操縦を教授されていた日本が、純日本製の飛行機、日本人の操縦士と機関士で成功を収めたことは、世界中の人々を驚かせた。

成功裏に完遂するも、ロンドン到着直後より書かれた飯沼の手記からは、この飛行自体決して楽なものではなかったことが随所に読み取れる。

リンドバーグ以来と言われるほど、ロンドンでは熱狂的な歓迎を受け、親善飛行ではベルギー・ドイツ・フランス・イタリア・バチカンを訪問し、国賓並みの歓迎を受け

た。吉田茂駐英大使をはじめ、各国大使も各国の歓迎ぶりと、親善の役割を高く評価し、それを外務省に電報で報告している。

五月二一日、帰還飛行を無事終え、羽田飛行場に着陸した飯沼は、日本各地でも熱狂的な歓迎を受けることとなる。

「亜欧連絡記録大飛行」は、航空宇宙分野の博物館で世界最大規模である、国立航空宇宙博物館（米スミソニアン協会管理・運営／略称・NASM）の機関誌「AIR & SPACE」二〇二〇年八月号において、日本の歴史的な飛行であつたとの評価を受けている。

タイトルは「THE JAPANESE LINDBERGH」と記され、この分野では圧倒的な存在であるリンドバーグの名が冠されたことは、率直に大きな敬意を表していたものと言えよう。

飯沼が打ち立てた世界最速の金字塔は、今もなお日本の航空史に燦然と輝き続けている。  
（飯沼成昭）



当時のポスター



ロンドン・クロイドン飛行場に着陸した神風号と飯沼正明飛行士

# 6 蚕種業家の繁盛

## 蚕種、蚕種製造とは

蚕を育てて繭を作る養蚕農家は、蚕の蛾に産卵させた紙、蚕紙（蚕種紙）を蚕種（蚕の卵）業家から購入して孵化させることから始める。桑の葉を与えて蚕を育て、繭になると出荷した。蚕種業者は、病気に強く、高品質な糸がたくさん得られる繭を作るため、蚕の品種改良を重ねた。それに加えて、養蚕家への蚕の飼育法の指導も重要な業務で、養蚕業の重要な部分を担っていた。ただ、蚕種業者は品種改良に多くの資金と知識が必要だった。そのため、規模の大きな地主や農家など、地域の資本家が兼業することが多かった。

## 秋蚕

従来、蚕は春蚕とよばれ、春に一回だけ孵化するものであった。しかし春蚕は、農家にとっては田植などと重なり、さらに桑に霜が当たって枯れることもあるため、飼育が大変であった。できれば桑の葉が繁茂し農閑期となる夏

| 本光館 |     |     |     | 二化性 |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 一   | 二   | 三   | 四   | 五   |
| 六   | 七   | 八   | 九   | 十   |
| 十一  | 十二  | 十三  | 十四  | 十五  |
| 十六  | 十七  | 十八  | 十九  | 二十  |
| 二十一 | 二十二 | 二十三 | 二十四 | 二十五 |
| 二十六 | 二十七 | 二十八 | 二十九 | 三十  |

蚕卵紙（本光館）



看板「秋蚕種製造業 大東館」

以降の飼育が望まれていたが、蚕の孵化や桑の管理が難しくなかなか実現しなかった。明治三〇年代、蚕種を冷蔵す

ると孵化をコントロールすることが可能であるという事が発見され、夏蚕種、秋蚕種が製造されるようになった。そのため地域によつては、年三回から五回の蚕の飼育が可能となり、繭の生産量が増大したことで生糸の大量生産が可能となった。その結果、日本の生糸の生産量は世界一となり、輸出産業の花形に成長した。

### 蚕種一大生産地 南安曇

南安曇地方は、一九〇〇年代から夏蚕種、秋蚕種の製造が盛んになり、明治時代の終わりから大正時代のはじめには一大生産地に発展した。その背景には、蚕種を冷蔵する

山スアルア本日

信州扶桑館

白繭在来種  
春夏秋蠶種製造  
晩秋風穴  
教師派遣講習生秋養 器具 蠶具 桑治 蠶繭販賣

黄繭改良種  
純系掛合一代交配種  
普及ノ為見本進呈成繭高價引取  
本是秋風穴交配製造秋蠶種 桑治 蠶具 多調製造  
取次申込可

村高穂南郡曇安南縣野長

「扶桑館」の広告（個人蔵）



# 7 紡績会社の隆盛と街の賑わい

## 呉羽紡績の誘致

豊科町は、昭和の大恐慌後、隆盛を誇った蚕種業が大きく衰退し町の繁栄を失った。さらに郡役所も廃止されたため、郡の中心地としての地位も失ってしまった。町は、このような状況を何とかしようと、さまざまな方策を模索した。そこで考えついたのが、工場誘致であった。当時、大規模な工場は、大都市部が急速な工業発展により労働力不足となっていたため、余剰労働力を求めて地方都市や農村部への建設が始まっていた。県内では、鐘紡株式会社かねぼが昭和八年（一九三三）に丸子町（現・上田市）に工場建設をはじめていた。呉羽紡績株式会社は昭和四年（一九二九）に設立され、最新式の機械を導入した綿紡績工場を富山県各地に建設していた。

昭和十一年（一九三六）に呉羽紡績は、大町市に紡績工場建設をはじめた。それをみた豊科町も工場の誘致運動に力を入れることとなった。招致委員会を設立し二〇万平方メートルに近い工場用地の買収などに協力した。その結果、呉羽紡績の子会社である豊科紡績株式会社が設立された。工場



旧豊科紡績の事務所（現存）

の誘致が成功した要因として、豊かな労働力のほか、水力発電による安価な電力、すでに水道が引かれていたことによる衛生設備設置の容易さがあげられている。昭和十二年（一九三七）から工場の建設工事が始まった。しかし、日中戦争が勃発したため建築資材の不足に悩まされ、予定より遅れて昭和十四年（一九三九）にスフや綿織物の工場が開設された。その際には開場祝いが盛大に行われた。従業員は五三八名（男八七名、女四五一名）でのスタートで、二年後には九九三名の大工場となった。ちなみに、当時、綿布の輸出額はすでに生糸を超えており、イギリスをもしのぎ世界一になっていた。

## 戦争中の豊科紡績

日中戦争勃発以降、原綿の輸入が次第に減少していく。そのため、工場はスフ糸、スフ織物の生産に主力を置くようになる。しかし国民生活も制限を受け、特に太平洋戦争が始まると、工場は一般向けではなく軍需むけの生産に転換されていった。昭和十六年（一九四一）、豊科紡績は呉羽紡績に吸収され、呉羽紡績豊科工場となった。戦争が激



豊科紡績の正門（上）と  
工場内部（下）（戦前の絵葉書より 安曇野市文書館蔵）

化した昭和十九年（一九四四）には、原材料が調達できずに工場の生産は低下の一途をたどった。そこで資材を集めて確保するため、政府の強い指導のもと呉羽紡績・三興貿易・大同貿易の三社が合併して大建産業株式会社となった。都市部に空襲が始まると、工場や軍機関は逃れるように地方へと移動を始めた。大建産業豊科工場は、終戦間近の昭和二十年（一九四五）五月二五日、陸軍の制服、軍需用の毛布等を製造する陸軍製絨廠の豊科製造所に貸与さ

れることになり、同廠の毛紡機<sup>けぼうき</sup>が運び込まれ設置された。しかし、本格的な生産には至らず敗戦を迎えることとなった。

## 呉羽紡績の企業城下町、豊科

戦後、再び大建産業に戻ると、製絨廠の毛紡機の機械の払い下げを受けスフ紡機を綿紡機に転換して、綿毛両方の総合一貫工場となった。さらに昭和二十四年（一九四九）には、企業分割によって呉羽紡績に戻った。その頃より、朝鮮戦争特需による好景気で業績を大きく伸ばした。昭和二十七年（一九五二）に毛紡機を三重県鈴鹿工場に移し、綿紡専門工場になった。そのような移り変わりで、昭和三十三年（一九五七）には従業員一〇九〇名の南安曇郡最大の工場となった。豊科町は、呉羽紡績への経済的な依存度が高くなり、豊科町全予算の七五割を呉羽紡績関連の歳入（住民税、固定資産税等）が占めるまでになった。このため、当時南安曇郡の中では唯一、国からの地方交付税を受けていない町村となっていた。豊かな税収により、六三三制の学制実施にもなう校舎建設費用も、町民の負担がほとんどなくて済んだ。また製品の輸送のため、大糸線から工場敷地内まで鉄道専用線の引き込みがあり、豊科駅扱貨物総トン数の四五割が、呉羽紡績に関わるものであった。

このように呉羽紡績は、戦後の豊科町の発展に大きく貢献した。

## 豊科町の繁栄

呉羽紡績の発展に加えて、地方事務所等の県機関が豊科に集まった。さらにバス路線も豊科駅を基点に周辺地区を結んでいた。そのため、豊科は郡都と称されるほどの賑わいとなった。特に、本通りに面した成相商店街は「豊科銀座」と呼ばれる、郡下一の繁華街を形成し多くの人々が行き交っていた。卸売業の年間出荷額は郡全体の九四割を占めていた。通りを一步裏にはいると、ネオンが灯る飲食店街が広がっていた。そ



今も敷地内に残る引き込み線のホーム跡

の手前に「うろたえ橋」がある。給料袋を手にした紡績工場の工員たちが、飲み過ぎてスッカラカンになって、橋のたもとでうろたえる姿が見られたことから、この名が付いたといわれる。戦前からあった大衆芸能の演劇場の「豊科座」は、「豊科劇場」に改名し映画館としてしばらく隆盛を誇った。紡績工場で働いていた人々をはじめ多くの観覧客がここに通い楽しんだ。

## 昭和二三年撮影の航空写真から

東側を通る糸魚川街道（現在の国道一四七号）沿いに繁栄している町並みがみられる。その西側をやや離れて大糸線が通り豊科駅がある。その西側に菱形の広大な呉羽紡績豊科工場がある。この時期はまだ大建産業である。豊科駅の北からスイッチバックで工場に入る引き込み線がみえる。その先に白い屋根が特徴的な大規模な紡績工場がある。敷地の西側には、何棟かの寄宿舎があり、多くの女子工員がいたことがわかる。現在は王子コンテナの工場となっている。その間の南側に正門があり、事務所棟、食堂、体育館



国道147号沿い商店街「豊科銀座」現在の様子（上）と  
うろたえ橋（下）

## 現在の「東洋紡」

呉羽紡績は、戦争特需の後に綿織物等の生産量が低下し、活路を求めナイロンなどの合成繊維に進出する。しか

が並んでいる。プールもある。敷地の南東側には道路を挟んで社宅がみえる。



戦後の呉羽紡績（国土地理院 米軍撮影 昭和23年（1948）9月19日 USA R1785-13）



紡績工場であった建物の現在の様子

し、業績を伸ばすことができず、昭和四一年（一九六六）に東洋紡株式会社と合併することになった。引き込み線も廃止された。その後、昭和五五年（一九八〇）に豊科フィルム株式会社が設立され、食品包装などに用いるポリプロピレンフィルムの製造を目的とした工場が北側に建設されて現在でも生産が続けられている。紡績業から撤退した後、紡績工場の建物は、インターチェンジに近いという好立地から、物流会社の倉庫として利用されている。なお、女子工員の寄宿舎はなくなっている。現在の正門、事務所などは、豊科紡績当時の面影を伝えてくれている。（原明芳）

# 8 商店街の繁栄と祭り

## 豊科料芸組合

南安曇郡下では、江戸時代の終わり頃から養蚕業が盛んになる。中でも明治中頃から始まった蚕種の製造は、儲けが大きいことから多くの人が取り組んだ。その繭、蚕種取引の中心地となったのが豊科の成相と新田である。

明治時代後半からはじまる「うろたえ橋」以南の成相上町追分にかけての料理店と、芸妓などの花柳界の繁栄は、こうした社会的背景からである。なお『豊科町誌』には、大正九年（一九二〇）の時点で料理店七〇店、芸妓八一人という記録が残る。

芸妓の多くは東京など関東からやってきており、唄い、踊り、三味線、お太鼓のほか、お花、茶道、手習いなど、お稽古事に精進していたという。昭和九年（一九三四）には、豊科尋常高等小学校と併設して芸妓学校が開校されたほどである。

昭和に入り、芸妓の人数は、社会情勢の影響を受けた養蚕業の変容とともに徐々に減ってはいくが、戦後の昭和二年（一九五一）、料理店と花柳界は、商店街の活性化を



料芸組合の前身「豊科二芸組合」による四十七士仮装行列（大正4年（1915））



豊科料芸組合仮装行列（昭和29年（1954）夏）

目的に、豊科料芸組合を組織する。そして商工会とも連携して、初市、お花見、夏祭り、恵比須講など、季節ごとの催事と売り出しを行う。中でも昭和二〇年代後半から三〇年代前半にかけての夏祭りは、五〇名あまりの芸妓と役員、料理店の店主と従業員など八〇人を超える人たちが参加して、「神輿祭り」「仮装行列」、それに合わせた「大売出し」などを催している。ちなみに、現在の成相地区の子供神輿（古い方の神輿）は、夏祭りで芸妓が担いでいた神輿である。

その後、芸妓が徐々に少なくなり、夏祭りは行われなくなる。唯一続いたのが「さくら祭り」である。当初は、豊科公園で行われていたようだが、その後、一乗寺の平和堂前の広場に移り、平成三一年（二〇一九）まで「料芸さくら祭り」として

開催された。

## 安曇節

安曇野の社寺を巡ると、短歌や俳句、一ト口付け<sup>ひとくちづけ</sup>など、数多くの句額が奉納されているのを目にする。そのほとんどが明治時代のもので、安曇野ではこの頃、庶民の間でこのような文芸活動が盛んに行われていたことがうかがえる。

一方、大正時代から昭和にかけて、全国的に民謡が流行する。その民謡の多くは、その地域に古くから伝わる唄か、または当時活躍していた作詞・作曲家に依頼して制作してもらった作品である。

対して安曇節は、松川村の医師榛葉<sup>しんは</sup>太生<sup>はふとお</sup>が、安曇平の地の皆さんに七七七五を基本とする歌詞を募り、曲は古くからこの地に伝わる田植え唄などの節を集めて制作したとされる。そのため作曲の註には「榛葉太生の努力により統一」との記載がある。このような方式により制作されたことが「安曇節」の特徴であり、背景に前述の明治時代から連なる文芸活動があるからこそできた技といえる。

この安曇節は、大正一二年（一九二三）九月に成立したとされるが、その後も安曇節の創作活動は続き、明治時代の文芸活動と同様に、神社などに安曇節の額として奉納さ



豊科公園で安曇節を踊る芸妓（昭和13年（1938））



安曇節レコーディング記念写真。

向かって右から3人目が榛葉太生（昭和7年12月19日）

け、その後も、豊科の花柳界で連綿と唄いつがれる。また昭和三〇年代初めには、豊科の芸妓「都小春」により、再レコーディングされ、都小春の尽力もあり、全国的にも知られるようになった。

また、昭和三十一年（一九五六）には、都小春作曲、小口幹夫作詞の「豊科小唄」が制作され、豊科調「安曇節」とともに豊科町の盆踊りの定番曲となる。同年八月には豊科町公民館の主催による分館対抗民謡コンクールが開催されている。二五分館が参加し、予選会を豊科公園で、決勝大会は一乗寺の平和記念講堂前の広場で開催され、二〇〇〇人余りの観衆が集まったとの記録が残る。またこの時

期、全国各地で民謡大会が催され、豊科町からも長野県代表のひとつとして、芸妓と一緒に豊科町役場の女子職員も参加し、「安曇節」を披露している。このことから当時の民謡ブームがいかに大きかったかがうかがえる。

## あづみ野祭り

夏になると各地区で賑やかに催されてきた盆踊りも、昭和五〇年代に入ると若者離れが目立ち、活気がなくなつて

れている。

現在安曇節には、豊科調「安曇節」と、正調「安曇節」がある。前者は大正一二年、出原処士（＝榛葉太生）の名で発表されたもので、後者は大正一四年（一九二五）に、本名、榛葉太生で発表されたものである。両者は唄い方にも踊り方にも違いがあり、正調「安曇節」は現在、松川村の無形民俗文化財となっている。

豊科調「安曇節」は、昭和七年（一九三二）豊科の芸妓「日吉屋金時」によりレコーディングされ、高い評価を受

くる。そんな状況を憂い、当時、豊科町長であった笠原貞行氏の呼びかけで、あずみ野祭り実行委員会が組織される（当時は「あずみ野祭り」と表記した）。構成は、豊科町、町議会、教育委員会、公民館、商工会、JAあづみ、区長会など、豊科町のありとあらゆる団体が参画していた。

祭りのメインとなる「あずみ野ばやし」は、この祭典のために新たに制作された。コンセプトとしては、これまでの盆踊りの曲調とは違い、若者にも受けが良いよう現代風でノリがよい曲を、とは言っても歌詞は安曇野の風俗・方言・人情などが感じられ、踊りの振り付けは斬新なものを、というものであった。以上のことを踏まえて、作曲は当時「青春時代」という曲で一世を風靡していた森田公一氏に、振り付けは日本コロンビア専属の若柳多賀三氏に依頼し、作詞は一般からの公募で、下飯田の中野吾郎氏の歌詞が選ばれる。あわせて、あづみ野祭りのテーマソング「あずみ野の四季」（作詞 藤公之介、作曲 森田公一）も制作され、「あずみ野ばやし」とともに、昭和五五年（一九八〇）七月二七日にお披露目された。

同年八月九、一〇日に「住民の連帯、心のふるさとづくり、活気あふれる町」をテーマに「第一回あずみ野祭り」が開催された。二六の踊り連が参加し、そのほか、「ミス安曇野コンテスト」「あずみ野太鼓」、地元中学生のブラスバンド行進、フリーマーケットなど多くの催しが企画さ

れ、一万人余りが夏の一夜を楽しんだ。  
以降、あづみ野祭りは、参加者も更に増え毎年開催されるようになった。  
(山下泰永)



(右) 第1回あずみ野祭り  
(昭和55年(1980))



(左上) 「あずみ野太鼓」の演奏  
(左下) 地元中学生によるブラスバンド行進

# 1 豊科の名産品

## 玉ねぎの郷を目指して

生産量県下第一位を誇る安曇野市の玉ねぎ。その中心は豊科であるが、昭和二〇年（一九四五）の作付面積はわずか一畝であった。戦後、経済統制が解除され水田裏作として栽培が盛んになり、昭和四一年（一九六六）には農林省から産地指定を受けた。昭和四五年（一九七〇）から始まった減反政策の影響により水田からの転作が増え、昭和六〇年（一九八五）には作付面積が二四畝まで拡大したが、その後は農業人口の減少や兼業農家比率の増加による水稻単作化などの影響により減少し、平成六年（一九九四）には一畝と半減した。

旧豊科町では平成八年度から産地復活に向けた様々な振興策を展開し、「玉ねぎの酒元くん」は「平成一一年度長野県園芸特産振興展」にて最高賞を受賞した。また、行政と住民が一体となった玉ねぎによる町づくりが評価され、「一九九九年度毎日・地方自治大賞」にて奨励賞を受賞し、作付面積は平成一二年（二〇〇〇）には一七畝まで回復した。合併後の平成二四年度には市が重点作物に位置



赤シソを使った甘口の「ロゼ」と、梅を使った辛口の「白」があった  
※現在は販売されていない



三点のデザイン案が融合して誕生した「元気くん」



平成10年に始まった玉ねぎ祭りは、平成29年に第20回を迎えた

付け、機械化一貫体系の普及などに取り組んでいる。その結果、市全域の玉ねぎの作付面積は、平成二三年（二〇一一）の二二・一畝から令和元年（二〇一九）には五二・七畝まで広がっている。

第一回「とよしな玉ねぎ祭り」は、わずか一ヶ所のほ場で始まった。それが現在では「安曇野玉ねぎ祭り」として一大イベントに定着し、市内外の人気を博している。豊科町から始まった玉ねぎの郷づくりの挑戦は安曇野市に受け継がれ、今も続いている。

## 豊科のわさび

豊科のわさび田は重柳地区の万水川沿いにあり、江戸時代には重柳村の刈敷場（採草地）であったといわれている。「重柳」という地名のとおりヤナギが茂る低湿地帯であったことから、通常の農業には向かなかったことだろう。やがて穂高地域と同じく梨畑を経てわさび田となった。穂高川水系の「砂作り」に対し、万水川水系のわさびは「石作り」であり、ほ場が黒っぽく見えるのが特徴である。収穫まで一年半～二年かかる砂作りでは辛みが強く、生わさびとしての出荷が主流であったが、石作りでは砂作りと比べて水温が二～三度高いことから生長が早く、一年で収穫し、加工用のほか、かき苗（分げつ茎）を明科や穂

高に出荷することで大きな収益を得たという。一方で、親株から病気も受け継いでしまう等の難点があることから、やがて種から起こした実生苗や無菌培養苗の普及によりかき苗は主流ではなくなっていくが、砂作りのほ場に石作りのかき苗を植えると生育が良いとされ、重宝されたようだ。短いサイクルで収益を得る営農スタイルと、ハウスによる促成栽培は相性が良かったと見え、一九八〇年代後半にハウス栽培が広まり、およそ六割がハウス栽培となった。生育促進以外にも遮光、凍害や病害虫・雑草侵入の防止など様々な利点があり、ハウス化によって単位面積当たりの収益を増やすことができたのである。

ハウス栽培が多い万水川水系と路地栽培が多い穂高川水系。その違いは、わさび農家の営農戦略の違いによるところもあったようだ。

（斉藤雄太）



重柳のわさびハウス群と万水川  
（北から南を望む）

# 2 拾ヶ堰、未曾有のサイフォン工事

江戸時代後期の文化二三年（一八一六）に開削された拾ヶ堰は、全長約一五段、標高五七〇分の等高線に沿って水平に近い形で水を流す横堰である。そのため水流が滞らないよう、浚渫や改修工事など、維持管理にも多大な労力を要した。なかでも、奈良井川から取水して梓川を横断する「片土手横掘り」は、最大の工夫であったが、その反面で最大の弱点であったかもしれない。

これは、梓川の下流側を横断する土手を築き、ここに松本側から取り入れた水を流し込んでダムのように溜めて安曇野側へ送る施設である。また梓川を流れてきた水は、土手の数ヶ所に設けた隙間から下流へ流していた。

梓川は、普段の水量は少なかったが、ひとたび大雨が降ると、水かさが増し、この片土手も流されてしまう危険があった。そのため関係する村の人々は、たびたび片土手の普請に出かけたと伝えられている。

## 大正九年、伏越の完成

その片土手が大きな打撃を受けたのは、明治四四年（一九一一）のことであった。焼岳が大爆発を起こし、火山灰

梓川を流れ下って河床が上がり、渇水となったのである。

大正五

年（一九一

六）、南安

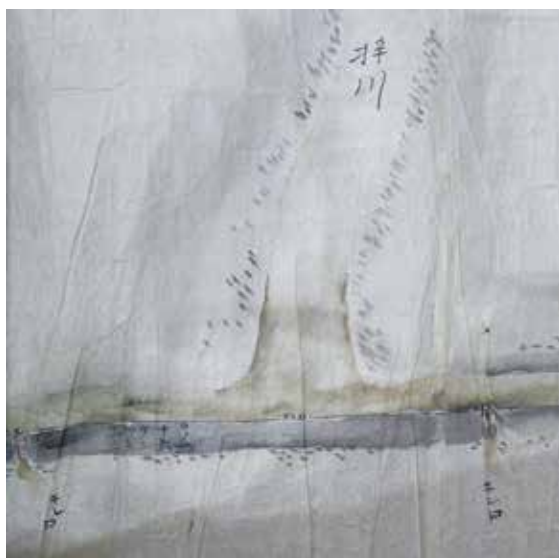
曇郡拾ヶ堰

普通水利組

合は、長野

県に梓川伏越（サイフォン）工事の陳情書を提出、二度にわたる調査・設計により、最大水量三六〇個（毎秒約一〇立方分。個は立方尺のこと、秒あたりに流れる水量の単位）が通水可能な伏越が築造されることとなった。大正七年一二月に開かれた県会で、総工費一六万七〇〇〇円、うち半額を県からの補助とすることが可決された。

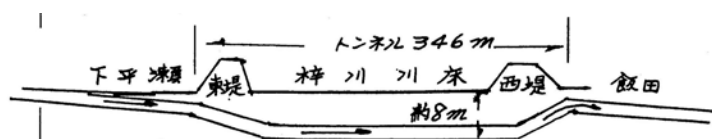
起工は大正八年九月であった。河床から約八分掘り下げ、内径一尺（約三・三分）の馬蹄形のコンクリート管



片土手横掘りを描いた絵図（明治初年）（安曇野市文書館蔵）黒く塗られた土手に数ヶ所「キレ口」が見られる



大正9年に建設されたサイフォンの出口



伏越の断面図（豊科町教育委員会『命の水』より）

を延長一七三間（約三二五<sup>1</sup>/<sub>2</sub>）にわたって埋設する。途中、悪天候にも見舞われ、また大水が出て心配されたが、翌年五月に竣工させることができた。

サイフォン工事は当時の最先端技術であった。拾ヶ堰の管理者で烏川村長でもあった黒岩重義は、県治水委員の岩原愛策とともに先進地の北海道のサイフォン工事を視察して工事に臨んだ。黒岩は、万一失敗した場合には自決する覚悟を極め、短刀を懷に忍ばせて工事に臨んだという。



シールドマシンフェイスのモニュメント

このサイフォンは、昭和二五年（一九五〇）の護岸工事により通水が改善され、平成の初めまで使用された。

### 平成の新サイフォン建設

平成初年、すでにサイフォンは七〇年以上使用され、老朽化が懸念されていた。そこで平成六年（一九九四）に、新サイフォンの建設が決まる。翌七年に着工し、平成一〇年に完成して現在に至っている。

工事では、河床直下一〇<sup>1</sup>/<sub>2</sub>の位置に、三五三<sup>1</sup>/<sub>2</sub>のトンネルを貫通させた。その先端部に取り付けられ、玉石混じりの砂礫層を掘削したシールドマシンフェイスは、拾ヶ堰サイフォンの豊科側の出口近くにモニュメントとして野外展示されている。（逸見大悟）

# 3 工業のまち

安曇野市は合併当時、製造品出荷額（工業統計調査、従業員四人以上の事業所）が県内一位だった。これは言うまでもなく、合併以前の豊科町が同統計で県内上位であったことに由来している。これは、豊科町が機会あるごとに企業誘致・工場誘致に取り組んできたことによる。ここでは太平洋戦争後の豊科町の工業発展の歩みを三期に分けて紹介する。

## 第Ⅰ期 工場誘致条例（昭和二十七年～昭和四九年）

豊科町では周辺町村に先駆けて、昭和二十七年（一九五二）に工場誘致条例を制定している。この条例は、町内に工場を設置する企業に町が奨励金を出すというものであった。

「第一条 この条例は産業の振興を積極的に援助しもつて住民の福祉を図るため町の区域内において工場を新設又は拡充する者に対し奨励金を交付する外敷地の幹線又は提供上水道、下水道、道路の整備並に労務の幹線その他凡する必要な事項について協力援助をするものとする。

第二条 奨励金は町長が必要と認める事業のため左に該当する工場を本町に新設又は拡充する者につきこれを交付することができる。但し奨励金交付の対照は工場及び事業場のみとする。

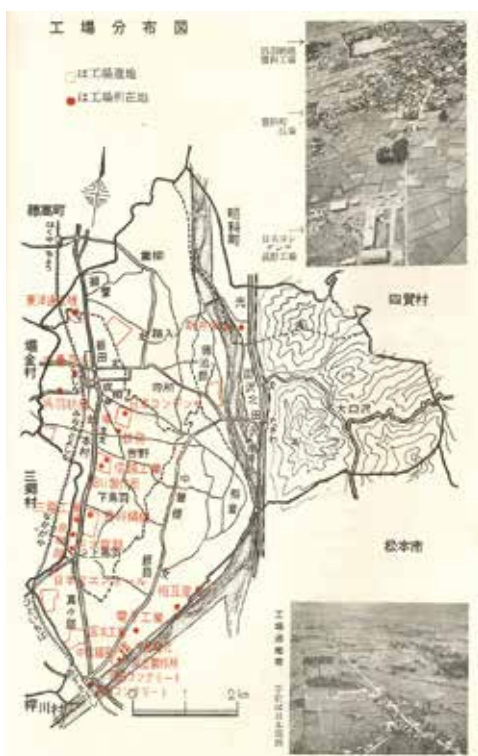
一、投資額 二〇〇万円以上

一、常時使用する工員数 二十人以上

この条例では、奨励金のほか、工場敷地、上下水道、道路の整備などに町が全面的に協力していたことがわかる。

後に昭和三四年（一九五九）には全文が改正され、工場用地造成特別会計が設けられた。この予算は、投下固定資産総額が三〇〇万円以上か、常時使用する従業員が二〇人以上の工場に適用され、初年度一〇割、二年度七割、三年度五割の町民税・固定資産税額を奨励金として交付した。この奨励金を受けた企業・工場の中には日本電熱株式会社、日本コンデンサ工業、東洋通信工業株式会社、ゼネラルエアコン株式会社、電子工業株式会社がある。

この頃の町勢要覧には、「海拔が高いため空気が清潔、北アルプスを控えているので水利がよく衛生的、平たんな盆地なので風水害が皆無、砂礫の扇状地なので地盤が安定している。発電県のため電力が豊富、アルプスから流れる



昭和37年度版豊科町勢要覧の工場分布図

硬質砂利が無尽蔵にあり建設資材が安価に入手できる。主都への交通が便利、農業の近代化により労働力が余剰してきたので工場要員の確保が容易—など、工場創設には最適地帯と自負している」(『とよしな 長野県豊科町町勢要覧 一九六二年版』)と紹介され、町をあげて工場誘致に取り組む姿勢がわかる。工場分布図には、町内の企業・工場が社名入りで紹介され、国道一四七号線沿いを中心に工場適地が設定されている。この中にはまだ工場が設置されていない適地も見られる。

こうした豊科町の取り組みを後押しするように、昭和三九年(一九六四)には松本諏訪地区が国の新産業都市に指定された。『広報とよしな』は新産業都市特集号(昭和四〇年二月号)を組み、長野県知事西沢権一郎、松本市長降

旗徳弥のことは掲載している。昭和三〇年代・四〇年代は多くの企業・工場が豊科町に進出した。町の奨励金を受けなかった企業では、小谷電機株式会社や、株式会社ハーモニックドライブシステムズなどもある。戦前から操業していた繊維業に変わり、機械や製品製造の工場が増加している。

## 第Ⅱ期 高速道路整備(昭和五〇年代後半)

昭和四九年(一九七四)に工場誘致条例は廃止となる。

町のようす (3月末日現在)

|     |        |       |     |       |      |
|-----|--------|-------|-----|-------|------|
| 人口  | 28,128 | (前月比) | +2  | (前年比) | +342 |
| 男   | 13,567 | -1    | +34 |       |      |
| 女   | 14,561 | -3    | +28 |       |      |
| 世帯数 | 8,845  | -1    | +27 |       |      |

転入 248 転出 285 出生 28 死亡 22

完成予定図

### 緑の公園工場

諏訪精工舎を誘致  
雇用・財政面で大きな期待

現在、町では中核自動車道、道路整備事業、新産業都市改修事業、企業誘致、中核校建設、大型自転車道等の事業を進めています。

その一環の企業誘致については、東信町の自然に調和し緑に囲まれた公園的な工場の建設に努めています。

今回の諏訪精工舎の誘致については、多くの地元関係者の皆さんの協力により実現できました。今後、工場完成により周辺の雇用や町の財政面において大きな期待がもたれています。先月18日に地鎮祭が行われ、今年秋には鉄骨二階建て一部工断竣で、延床積3万5千平方メートルの超クリーンな工場が建設され、諏訪精工舎の製造を支援した事業が行われます。

『広報とよしな』の表紙となった諏訪精工舎の工場

この頃、豊科町では高速道路の整備とインターチェンジの設置が準備されていた。高速道路網に直結する立地条件は企業誘致の面で有利に働いた。こうした機運を企業側でも察知し、豊科フィルム株式会社、工場設置や、諏訪精工舎株式会社の工場（現セイコーエプソン株式会社豊科営業所）が誘致されている。

この後、豊科町への工場進出は一旦休止となる。これは、都市計画法の導入以前に設置された工場が、用地拡張を行おうとしても、規制や地価の高騰のために町外へ移転せざるをえない状況があり、また新規進出用地の確保が難航したためである。

### 第Ⅲ期 高家産業団地開発（平成四年～現在）

昭和末期に飽和状態となった工場用地に対して、町外への優良企業の流出を防ぐため、豊科町では産業団地開発を進めた。平成六年度には農村活性化土地利用構想の中に、工場・流通業務施設等団地の建設が位置付けられている。本文には、「昭和三〇年代に工場誘致条例を制定し、さらに昭和三九年の「松本諏訪地区新産業都市」の指定を転機とし、電気・機械を中心に平成四年（一九九二）現在事業所数一二二社を数え製造品出荷額一八四億円を記録するまでになった。しかし、平成五年度事業所数一一七社製造

品出荷額一四四九億円と急激な落ち込みを示した。これは、近年になって比較的大きな企業が工場敷地の拡張が思うようにならないことから、近隣の市町村に流出した影響が大きい。（中略）これらの状況を打開するためには、相当規模の工業・流通業務施設等の団地を造成し、町内外の優良企業の誘致を図る必要がある」とある。まさに

豊科町として新規用地の開発が急務とされていた状況がわかる。その後、農業振興地域の農業地区区域除外認可などを経て、平成一〇年（一九九八）には造成工事が起工され、二年後に高家産業団地として竣工された。当初の分譲では一九社が操業している。

現在、高家産業団地はあづみ野産業団地となっている。



高家産業団地開設当初のパフレット

立地する企業も増え、令和三年（二〇二一）一二月現在、二九社となっている。隣接する長野道梓川サービスエリアにはスマートインターチェンジが設置され利便性が向上した。安曇野市では更なる企業誘致を企画し、地域未来投資促進法のもと、令和二年（二〇二〇）二月に既存団地の北側に区画を拡張することが長野県より認められた。その後造成がすすめられ、令和四年（二〇二二）の稼働を目指し、三社が新たに建設されている。

## 工業のまちを盛り上げる

豊科町の広報誌『広報とよしな』では度々、企業紹介のコーナーが設けられた。昭和五四年（一九七九）八月の一七〇号には、東洋紡績株式会社豊科工場が紹介されている。その後、一〇回に渡り工場誘致条例により町内に進出した企業を中心に掲載されている。この時期は第Ⅰ期と第Ⅱ期の間にあたる。町内でも企業進出が一段落し、まちの産業として工業が定着してきた時期でもある。

次に企業が取り上げられるのは、平成八年（一九九六）九月の三八〇号である。この号から「おじゃまします」というコーナーが始まっている。ここには町職員が実際に企業を訪れ、取材をした内容が掲載されている。豊科町にたいする要望には辛口なものも多い。このコーナーでは、二

一社が紹介されている。

豊科町役場には工業製品等展示コーナーが設置されていた。工場誘致条例から始まった戦後の工業発展は、豊科町の財政を潤し、雇用を生み出し、現在でも安曇野市の産業を支えている。

（青木弥保）



豊科町役場に設置されていた  
展示コーナー  
（平成8年（1996）頃）



# 4 安曇平の玄関

安曇野インターチェンジ

## 安曇野と日本を繋ぐ

長野自動車道安曇野インターチェンジ（IC）は、安曇野地域のいわば玄関口である。周辺には商業施設や事業所等が立ち並び、豊科地域の中でもとりわけ賑やかな一帯となっている。



豊科ICの開通式のパレード

昭和四〇年代から建設が進められた高速道路網は、名神、東名の大都市間を結ぶ路線に続き、昭和五〇年代に入るといわゆる縦貫五道が徐々に開通し始め、長野県も中央自動車道により大都市と結ばれることとなる。そして中央自動車道は岡谷ジャンクションから北へと延伸され、長野市へと至るルー



完成直後の豊科IC。写真の左上の空き地が現在スワンガーデンがある土地（『安曇野に築く』（日本道路公団名古屋建設局豊科工事事務所発行）より）

トが順次整備されていった。昭和六三年（一九八八）に豊科ICが南安曇郡内唯一のインターチェンジとして開設され、その後数年を経て須坂長野東ICまで繋がることとなった。

沿線地域では当初、発表された高速道路開発計画に対し

## 商業と流通の中心へ

豊科ICが開通すると、交通の流れは大きく変わった。当時すでに全国的な高速道路網の発達に伴い、輸送の多くがトラックに依存する形となりつつあり、豊科ICもまた安曇野の出入り口として地域の物流を支える



ハイウェイウォークで高速道路上を歩く  
大勢の参加者たち

て各所で反対する声も大きかった。そのため当時の道路公団も頻繁に地元と協議を重ねる等、苦勞が絶えなかったようである。しかし計画が進むにつれ、街の発展につながるということで期待の聲が高まっていた。また、「地元で農業を営む人にとっては、高速道路の建設に先立って行われた圃場整備事業も大いにありがたかった」という方もいた。開通日の八月三日に先立って、七月一〇日には「ハイウェイウォーク」というウォーキングイベントが開催され、大勢の参加者が完成した高速道路上を歩いて楽しんだ。また、開通後には「アルプスハイウェイフェスティバル」が開かれ、こちらも大いに盛り上がったようである。



現在の安曇野ICの様子（上）と、名称変更当日のサインの変更作業の様子（下）

こととなった。また、インターチェンジ周辺には企業や店舗が立地するようになり、周辺の交通量は目に見えて増加した。平成一〇年（一九九八）にはインターチェンジの北西側に大規模な商業地が完成、「スワンガーデン」と名付けられた。

安曇野市へと合併した後の平成二四年（二〇一二）、豊科ICは新たに安曇野ICと改称された。名実ともに安曇野の玄関口として全国にその名を売り込むとともに、市の一体感の醸成に一役買うことを期待しての改称であった。令和三年（二〇二一）からはさらに、スワンガーデンの高速道路を挟んだ東側にもショッピングサイトの開発が始まっており、周辺地域は今後ますます市の商業的な中心地としての価値を高めていくことだろう。

（幅拓哉）

# 5 県立こども病院

平成五年（一九九三）五月二八日、豊科三一〇〇番地に長野県立こども病院が開院した。全国で九番目のこども病院である。当時の『市民タイムス』にはその記事が大きく取り上げられている。病院には最新医療設備が備えられ、充実したスタッフがそろったの開院であった。小児循環器専門の外科医と内科医五人が一人の患者を診るという、総合的な診療システムが取り入れられた。小児神経科の設置も県下で初めてであったし、骨髄移植のための無菌室も三室備え、やはり県下で初の新生児救急車も準備された。病院内のNICU（新生児集中治療室）は極小未熟児・超未熟児として生まれた乳児を救うための集中治療室である。

県立こども病院の誘致に関しては、高速長野道の豊科（現・安曇野）インターチェンジが近くに出来ていること、農免道路などが通っていることなど、交通の便の良さが大きな要因となった。近距離に豊科（現・安曇野）赤十字病院や信大医学部附属病院があったことも誘致要因としては大きかったという。五万平方メートルの広い敷地内には、赤い屋根の三階建ての病棟、時計台の高い塔が常念岳をバックにして北アルプスの山並みに映え、柳沢京子さんデザインの「こどもだ！ワルツだ！」の陶板画がエントランス



県立こども病院と北アルプス

ホールを彩り来院者を迎えてくれる。

こども病院ができることは、安曇野市民だけでなく県民の切なる願いでもあった。難産の産婦の安全な出産とその後の肥立ち、未熟児の無事な生育などは、どの親も願うことであろう。そのためには設備の整った病院と周産期医療の専門医が必要であった。病院勤務のスタッフは、院長はじめ医師・看護師ともに、有数のスタッフがそろっていた。

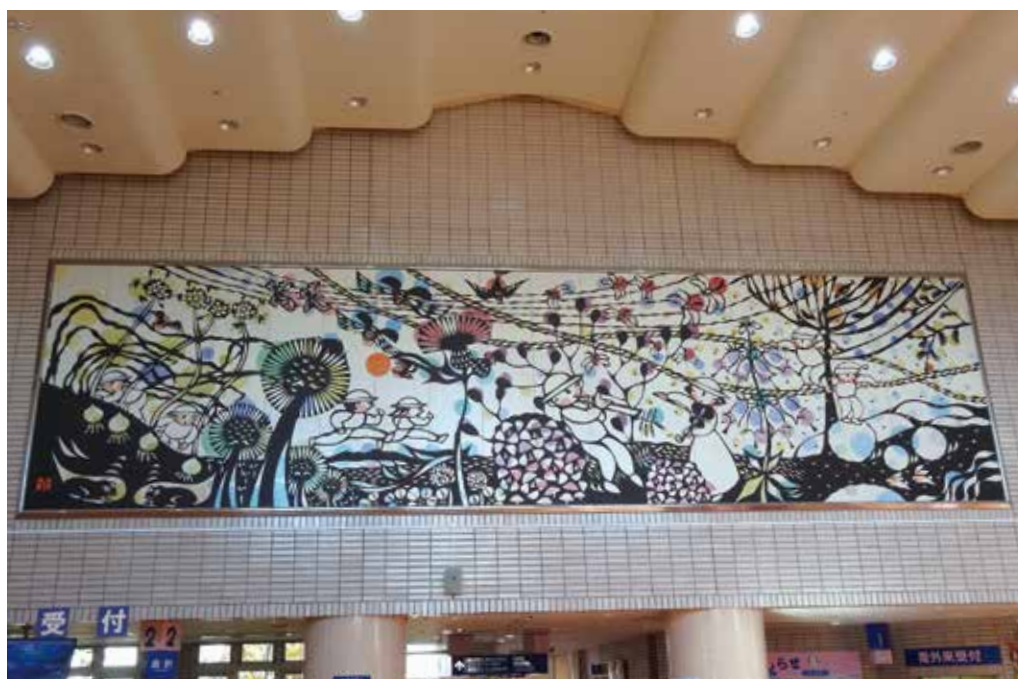
開院後既に三〇年近い時間が流れているが、この間には五〇〇<sup>人</sup>で生まれた胎児を無事生育させることにも成功している。

また、こども病院が開院して二年後の平成七年（一九九五）には、院内学級が設置された。治療のために入院している子どもの中には、入院が長期に及ぶ子もいるため、治療をしながら学習を進める病院内の学校である。教室に通えない子どものためには、ベッドサイドに教員が出向いて一緒に学習することもある。教科のほかに、習字、七宝焼き、折り紙、描画、卓球などを行うこともある。

院内学習は心の中に「はり」を作り、入院中・退院後も自信をもって生きていくことができるように、また学ぶ喜びが生きる喜びになり、退院後円滑に復学できることを目指している。

ここには、自分の命と向き合いながら、つらい治療を乗

り越えて、ひたすら未来を目指して生きていく子どもたちがいる。  
(鈴木桂子、倉石あつ子)



こども病院のエントランスの壁画

# 6 地域の健康を守る

安曇野赤十字病院

## 豊科赤十字病院の開設と街の発展

豊科駅から東へ延びる駅前通りを、国道一四七号線を超えて進んだ先に、ひととき大きな建物が構えている。安曇野市の地域医療の中核として頼りにされている安曇野赤十字病院である。六階建ての病棟は遠方からもよく見え、豊科中心部のランドマークにもなっている。

元々は、伝染病予防法の制定を受け、明治四三年（一九一〇）に豊科村他五か村伝染病院組合の隔離病舎がこの場所に設置されたのが最初であった。戦後、県内には赤十字病院が長野と諏訪の二院しかなく県土の広さに対して少ないとの声があがり、順次増やしていくこととなった。それに伴ってこの隔離病舎を赤十字病院が無償で借り受け、あわせて隣接地にも新築することにより、昭和二六年（一九五一）三月に豊科赤十字病院として開院した。

元が伝染病の隔離病舎だったこともあり、開設当初は人里離れた場所へぽつんと建っているような具合であったという。周囲は田やクヌギ畑に囲まれており、太い道（田沢街道、現在の県道豊科大天井岳線）が少し北に離れたところ

ろを通っているだけだった。それでも

開設と同時に患者がどっと押しかけ、中には入院のために北信や南信からはるばるやってくる方もいるなど、盛況を博したようである。その後、

昭和三二年（一九五七）

に都市計画道路がすぐ南側に開通し、昭和六三年（一九八八）には豊科インターチェンジができ、商業施設の集積が進む等、周辺は徐々に賑わいを増していった。その間、赤十字病院も改築や増築を繰り返しながら徐々に増床を進



開設当初の豊科赤十字病院。隔離病棟の隣に新設された  
（『あづみ野の地に 豊科赤十字病院五十年史』より）

め、平成二二年（二〇一〇）七月には市からの補助金も活用した改築により現在の建物が完成している。

## 地域医療の中核として

赤十字病院の特色として、赤十字の理念に基づき、医療だけでなく災害救護や出前講座等の活動を実施していることが挙げられる。とりわけ昭和三四年（一九五九）の伊勢湾台風や同三六年（一九六一）の豪雨災害（さぶろく三六災害）と

いった大きな災害では、県内の他の赤十字病院と連携して救護班を派遣している。近年では、戦後最悪の火山災害となった平成二六年（二〇一四）の御嶽山噴火や、同年一月のかみしろ神代断層地震、令和元年の台風一九号災害等で被災者の救護に当たっ



現在の安曇野赤十字病院の様子

た。また出前講座は医師や看護師、理学療法士等を講師として派遣しており、公民館や高齢者施設、保育施設等で開催し人気を博している。

さらに、令和二年（二〇二〇）から爆発的な感染拡大を見せ世界中に混乱をもたらした新型コロナウイルス（COVID-19）対策においても、院内のワンフロアをコロナ病床に切り替える等して対応しており、地域の中核的な医療施設として重要な役割を果たしている。

昔から大きな災害や病の流行があれば、常にその脅威に最前線で立ち向かってきた安曇野赤十字病院は、同時に安曇野一円の住民の日常と健康を見守る要でもあるといえよう。（幅拓哉）



令和元年台風19号災害における  
こころのケア活動

# 7 藤森秀夫と童謡祭り

童謡祭りとは豊科公民館で開催されている地域に根付いた音楽祭である。ドイツ文学研究者であった藤森秀夫の作詞による童謡『めえめえ児山羊』がテーマソングとしても歌い継がれている。童謡祭りは筆者にとって、小学生の頃に参加した懐かしい思い出だ。中でも『めえめえ児山羊』の歌詞がよくわからなかったこと、味噌パンをもらえて嬉しかったことが印象に残っている。公民館講堂が満員になるくらい、豊科南小学校と豊科北小学校の児童が集まり賑やかであった。

## 藤森秀夫の生涯

藤森秀夫は、明治二七年（一八九四）に豊科新田の医師藤森与八郎の長男として生まれ、東京帝国大学文学部ドイツ文学科を卒業、その後は慶應義塾、明治大学などの教壇に立ち、ドイツ文学者、また詩人としても名を馳せた人物だ。藤森が童謡の作詞に注力した時期は大学卒業後、間もない二〇代の頃に集中している。この頃は児童文化運動の父とされる鈴木三重吉が、児童雑誌『赤い鳥』を創刊したことを皮切りに、いくつもの児童文学雑誌が創刊された時

期である。発表の場が増えたこともあり作家が文学性の高い歌詞を書き童謡として世に出すことも流行していた。

大正九年（一九二〇）コドモ社から創刊した児童文学雑誌『童話』で藤森は初代童謡担当者に抜擢され、誌面での童謡詩発表と投稿作品の選定を行った。それから大正十一年（一九二二）までのわずく一年九ヶ月の間に『めえめえ児山羊』など四〇余篇を発表している。後世の童謡評論家はこう述べている。「苦心を重ねている藤森の姿はまるで創造期の童謡界の象徴ともいえる。」「はなばなしく現れて、また夢のように消えていった、童謡詩壇でも特異な作家である。」（日本童謡史Ⅰ 藤田圭雄著より引用）

藤森の童謡詩の創作活動は平坦な道のりではなく、作風を確立する前に童謡詩の第一線からは退くこととなった。

大正一二年（一九二三）の関東大震災以降は東京を離れ童謡運動からも遠ざかると、自らの詩作や学者としての研究に勤しむ道を選んだ。熊本、富山、金沢の旧制高等学校で教授として過ごしながら自身の詩集やゲーテやハイネに関する論文や訳詩集を多数出版している。晩年は東京で再び教壇に立ち、昭和三七年（一九六二）東京の地でこの世を去った。

## 奇妙な歌詞

さて『めえめえ児山羊』の歌詞である。三番まである歌詞は全て子ヤギが走って何かにぶつかって痛くて、めえと



『童話』第二巻四号の巻頭を飾る（復刻版・1984年岩崎書店）

なく物語となっており、三番に至っては切り株に当たって首が折れてしまう。まったく、めえとなくどころではない。筆者は馴染みのない世界観に、なんだかおかかない歌だと子どもながらに思いながら合唱したのを覚えている。

森の子ヤギという情景から気付くかもしれないが、この詩はドイツのわらべうたの訳詩である。近代日本の文学者が優れた翻訳家として海外の文化を紹介する例は数多くあるが、この楽曲ばかりが有名となってしまった藤森が複雑な思いをしたのは、そのような背景だからかもしれない。

このわらべうたは『少年の魔法の角笛』（一八〇六）というドイツの民衆歌謡の詩集に掲載されている。この詩集を詩人のハイネは絶賛し、作曲家のブラームスは歌曲『子守歌』で詩集の詩を使用している。グリム童話集と並ぶ有名な古典で、ドイツのマザーグースと呼ばれているほどだ。

ここで訳詩について触れておきたい。ドイツ文学や西洋詩歌の分野の研究者である万足卓（まんぞくたかし）（一九一〇—一九八四）は訳詩の作業について児童向けの図書の中で、「外国の詩歌を鑑賞するためには日本語の詩歌に直さなければならず、二つの言葉は構造、語感、音韻などが異なるため訳詞は難しい仕事となるだろう」と述べている。さらに万足は元となったわらべうた「こやぎ」を訳し解説もしている。「人間の子どもが足や頭などを打って、一度泣きだすとな

かなか泣きやまないの、そんな時にほかの者がきげんとりにこの歌を歌ったものらしいです。眠らない子を眠らせるために子守歌を歌うようにです」(がちょうの歌 楽しい西洋詩歌への招き 万足卓 著 一九六六より抜粋・引用)。

ちなみに、このわらべうたは口伝で残ったため正解がない。どうやら子ヤギが子ヒツジであったり、首は痛める程度であったりと表現のニュアンスに幅があるようだ。そうすると『めえめえ児山羊』の方言や幼児語の言い回し、首が折れるという表現を選んだところに藤森らしさがあるのだろう。

### 柔らかな石碑

藤森に関する記念碑は現在、安曇野市役所本庁舎の北東に鎮座している。昭和三七年(一九六二)一月に藤森の友人等から記念碑の話が持ち上がったが、翌一二月の藤森の死去により話は中断してしまった。しかし建碑の話は立ち消えることなく、町内の文化人や富山高高等学校(現富山大学)の卒業生や関係者からも広く寄付を募り、昭和三九年(一九六四)に完成した。



記念碑と子ヤギ



現在の記念碑 子ヤギの足の石もある

記念碑には子ヤギのような柔らかい肌あいをもつ穂高牧栗尾沢産の石を選び、ブロンズレリーフには藤森夫人の筆による詩が刻まれた。周りを囲む小ぶりの石は子ヤギの四つの足をイメージしている。

この年は、豊科町が高家村、南穂高村、上川手村と合併してから十周年にあたり、式典に引き続いて記念碑の除幕式と第一回童謡祭りを豊科中学校で開催した。

除幕式ではテレビカメラや本物の子ヤギも参加し賑やかに『めえめえ児山羊』を大合唱、さらに中学校の講堂内で



第1回童謡祭り 1964年5月5日に開催

は、豊科小中学校の合唱部や地域の合唱団が参加して第一回童謡祭りが開催された。本居長世作曲の『フリヂア（フリージア）』や山田耕作作曲の『山の姫御』など一〇曲を披露、大変感動的であったと記録が残っている。

童謡祭りは豊科小中学校の敷地内で始められたこともあり、記念碑は当時の中学校講堂の南に位置する「思索の庭」に建てられた。思索の庭は明るく開けた雰囲気であったようだが、現在の場所にあたる南安曇教育会館の南側には木々が茂り、落ち着いた雰囲気となっている。

### 市民がつくる童謡祭り

童謡祭りは昭和三九年（一九六四）から毎年五月五日の子どもの日に開催され続け、地域に根付いた催事として現在も続けられている。会場を豊科中学校から豊科公民館へ、また主催も豊科町教育委員会から童謡祭り実行委員会へと替えながら、三つの内容を柱に実施している。

一つ目の柱である藤森秀夫の詩歌の紹介では、彼の功績を広く知らしめ新たな世代へと受け継ぐことを目的に、童謡祭り当日に詩作品の展示と、とよしな女声合唱団など地域の合唱団による藤森作品の合唱を行っている。安曇野市に合併後は豊科地域に限らず市内の小学生やこども園の園児も加わり、大正時代に作られた童謡は令和の時代にも歌い継がれている。

二つ目の柱、作詞作曲コンクールは、市内の小中学生が音楽をつくる楽しさに触れる機会として開催している。このコンクールは、安曇野市歌の作曲者である飯沼信義氏を

始めとする審査委員たちが、これまで多くの小中学生の瑞々しい感性を見守ってきた。長年審査に携わった飯沼氏は、令和三年の第四〇回コンクールを節目に審査委員長を退任し、今後は新体制で臨むこととなった。

飯沼氏の退任挨拶によると、近年の応募作品は授業の一環として取り組んだ作品が多い、とのことであった。詩や作曲、絵を描くといった創作活動には、ある段階での個人指導が不可欠となるが、授業での指導はどうしても平均的な指導となってしまう。つまり、個々の素質を伸ばす指導と平均的な授業とでは指導の目的が異なるため、出来上がる作品も違ってくる。子どもたちの背景に合わせてコンクールの審査基準も変えていく必要があるかもしれない、と飯沼氏は述べている。今後のコンクールの展開にも注目したい。

三つ目の柱である招待演奏には、参加者に音楽家のよい演奏を聞き、豊かな時間を過ごしてほしいという主催者の願いが込められている。近年では過去に作詞作曲コンクールで最優秀作品を生み出した学生が成長し、演奏家として凱旋演奏を行うといった、よい循環が生まれている。

これらを主軸にして、童謡祭りは第一回から大きな変容することなく親子で楽しむ音楽祭として地域の伝統行事になっている。



近年の童謡祭りの様子

### ご褒美の味噌パン

童謡祭りで忘れられない思い出の味、それが味噌パンである。子どもの参加者は味噌パンがもらえたのだ。ゆえ



童謡祭りの味噌パン  
大人にも配られた

に、筆者は味噌パンとは童謡祭りのご褒美としてももらえるものと思っていた。他で手に入れようとは考えが及ばず、年に一度の味はそれなりに楽しみであった。味噌パンについての話を実行委員長の山本紘子氏に伺うと、昔の小学生は元日に登校すると味噌パンがもらえたそう。元日の登校に驚きつつ、なぜ配るのが不思議であった。

味噌パンの始まりは、軍隊の保存食として考案された説もあるが定かではない。全国的にみると松本地方以外では比較的早くに姿を消してしまったが、松本地方では昭和四〇年代中頃まで小学校などの元日の登校日や運動会などに、日の丸の旗を印刷した熨斗に包んだ味噌パンが児童に配られていた。その後、小学生が元日に登校しなくなっただけで、松本地方では入園・卒園式などの催事で味噌パンは配られ続け、幅広い年代の人々に愛される食べ物になったのはご存知のことと思う。市内の小学校で味噌パンを配らなくなったのに童謡祭りでは当然のように配り続けられていて、時が止まっているようである。

もしかすると子どもたちに、味噌パンの味と一緒に歌の記憶も残るから配り続けているのかもしれない。

ところで、この味噌パンはどこで手に入るのだろうか。食感はいすこくに似ていて、ぽそぽそしている。呼び名こそパンだが、あまじょっぱくて素朴な味わいは緑茶に合う菓子のような。童謡祭りで配られる味噌パンは市内の菓子店で作っているようで、やはりパン屋ではなかった。

### コロナを乗り越えた先に

『めえめえ見山羊』が雑誌に掲載された大正一〇年から数えて令和三年は百年の節目であった。また、童謡祭りが始まった年も令和三年にも東京でオリンピックが開催され、童謡祭りはその間ずっと開催されてきた。多くの人に支持されてきたのは、音楽の力もあるのだろう。

令和三年度のこどもの日はコロナウイルス感染症対策のため、残念ながら開催が先送りとなってしまった。人々が集まる楽しさを忘れてしまう前に、子ども達が生演奏の楽しさや合唱の緊張と高揚感を味わえる再びの開催を願っている。

(水谷優美)

令和二年（二〇二〇）は熊井啓<sup>けい</sup>誕生から九〇年の節目の年であった。安曇野市教育委員会文化課では、例年の熊井啓作品上映会を生誕九〇年記念として行い名誉市民の業績を偲んだ。熊井啓生誕九〇年の記念事業は、安曇野市だけでなく、東京池袋の名画専門の映画館である新文芸坐においても企画された。新文芸坐では、コロナ禍のため一年遅れの令和三年（二〇二一）に熊井啓映画特集上映会を行った。令和三年には、この他にも映画ムック「フィルムメーカーズ」第二三弾として熊井啓の特集が準備されている。この冊子の責任編集は、熊井啓作品とも関係の深い俳優の奥田瑛二氏があたったようだ。このように生誕九〇年を機に熊井啓作品が再び注目されている。コロナ禍の最中に問題となった感染者やその濃厚接触者への不当な差別問題のみならず、繰り返される冤罪事件や社会問題は、現代においても深刻な人権問題であり、不正義を告発する熊井監督の視線は、これらの作品を不朽のものたらしめている。

豊科交流学习センター内に設置された熊井啓記念館には、映画の資料としては異質な掛け軸を展示している。この作品は日本画家伊東深水による作品『西鶴艶女圖』であ



熊井啓（1930—2007）



伊東深水・画／吉井勇・書『西鶴艶女圖』

る。これは、日本映画ファンには垂涎の逸品であろう。伊東深水は、戦前から戦後にかけて美人画を数多く手がけた人気画家で、俳優朝丘雪路の父親である。この掛け軸は溝口健二監督の映画『西鶴一代女』（一九五二年）の劇中に登場する掛け軸で、溝口監督が伊東深水に依頼して映画のために描いてもらったものである。『西鶴一代女』の主演は田中絹代であった。同時期にスランプを感じていた溝口と田中は、この作品に熱意を込めて打ち込んだ。作品はヴェネツィア国際映画祭で国際賞を受賞し、両者ともスランプを脱することになる記念の作品となった。思い入れのある映画の劇中に用いられたこの掛け軸は、歌人で脚本家の

吉井勇の歌が添えられ、溝口の手から田中に贈られることになる。

晩年、田中絹代は、熊井啓監督の映画『サンダカン八番娼館 望郷』（一九七四年）に出演している。『サンダカン八番娼館 望郷』は、戦前に貧困から東南アジアへ出稼ぎに出た日本人娼婦を描いた作品である。戦後、日本の恥部として一般に知られていなかった「からゆきさん」の存在を紹介したノンフィクション作家の山崎朋子氏の『サンダカン八番娼館 底辺女性史序説』を映画化したものだ。

現在ならば中学生の年齢から、「女」を売り、あらゆる男に母性をもって接した主人公「おサキ」。彼女は、初めて恋した男に裏切られるだけでなく、東南アジアへ渡る際に間に入った女衞（ぜび）、兄弟、家族、親戚、さらに世間、国家にも裏切られ続けた。戦後は天草に引き上げ、地域からも見捨てられ、あばら家で猫を相手に極貧の生活を送る「おサキ婆さん」を田中絹代が演じている。田中は役作りのために実生活も「おサキさん」の生活に近づけるほど入れ込み、ベールン国際映画祭銀熊賞の榮譽を受ける作品となった。円熟した演技が

高く評価されたのだが、田中はこれを非常に喜び、記念に思い入れのある『西鶴艶女圖』を熊井啓夫妻に贈ったのである。

熊井はこの掛け軸を戒めの絵画として、仕事中に気分が萎え、安易に陥りそうなときに取り出し、眺めることにしていたようだ。ここには映画製作に関わったスタッフや俳優たちの想いが宿っているのだ。

熊井啓記念館にはベルリン国際映画祭銀熊賞とヴェネツィア国際映画祭銀獅子賞のトロフィーを展示している。世界に名高い映画賞であり、毎年この賞の受賞にあたっては大きな話題になるので、ご存じの方も多いと思うが、二つのトロフィーが並ぶ様は必見であろう。熊井はベルリン国際映画祭銀熊賞を映画『海と毒薬』（一九八六年）で、ヴェネツィア国際映画祭銀獅子賞を映画『千利休 本覺坊遺文』（一九八九年）で受賞している。

『海と毒薬』は、遠藤周作の同名の小説を原作としている。戦時中に捕虜のアメリカ兵を生体解剖した九州帝国大学の事件を題材にした作品で、捕虜の鼓動する心臓を驚づかみにする場面は、保健所に保護された犬を開胸して撮影し、目を背けたくなるほどの描写をしている。原作者から許諾を得て脚本を作ったものの、陰惨な内容から出資者が集まらず、映画化まで一七年もの歳月が流れたという。暗



第46回ヴェネツィア国際映画祭銀獅子賞（1989）



第37回ベルリン国際映画祭銀熊賞（1987）

く重たく難しい内容から、「絶対に客は来ない」と言われ続ける中での製作であったが、封切後は多くの観客が映画館に詰めかけたのだった。

『千利休 本覺坊遺文』は、井上靖の小説『本覺坊遺文』を原作とする。社会派映画監督が代名詞となる熊井であるが、文芸を原作とする作品も多く手がけている。これらの文芸作品の中でも、社会問題を絡めた作品として『千利休 本覺坊遺文』は、熊井にとって『お吟さま』（一九七八年）に続いて、二作目の千利休をテーマとする作品であった。『お吟さま』で秀吉を演じた三船敏郎に、『千利休 本覺坊遺文』では千利休を配役していることから、熊井監督は前作を意識して製作していることがわかる。利休晩年の愛弟子本覺坊が、織田有楽斎との対話を通して、「利休はなぜ切腹したのか？」という謎に迫っていく。本覺坊の幻想の中に現れる利休の姿がその真相を伝えるという、それまでの実証的な作品を手がけた熊井の作風とは異なり、幻想と現実が交錯する作品となった。哲学的な課題の映像化に成功したこの作品は高く評価され、ヴェネツィア国際映画祭で銀獅子賞を受けることになる。

熊井啓は昭和五年（一九三〇）に豊科吉野に生まれ、昭和十一年（一九三六）に松本市に家族とともに引っ越している。後年に発表した私家版の『後・池塘春草の夢』



熊井啓記念館での『帝銀事件 死刑囚』紹介展示

で、「幼年期を過ごした豊科での日々は、計り知れぬ意味を持っている。私の中の豊科は紛れもない忘れえぬ故郷なのである」と記している。戦時下の教育の下、軍国少年として成長するが、終戦とともに手のひらを返した大人たちの変わり身の早さに反発を覚えたという。

熊井啓の初監督作品は『帝銀事件 死刑囚』（一九六四年）である。熊井は、信州大学卒業後上京して、在学中から映画制作を手伝っていた独立プロで助監督を務めていたが、安定しない独立プロでは生活ができないことから、映画会社の日活に入社する。しかし独立プロでの経験が豊富であったにもかかわらず、血気盛んで生意気なことから、なかなか監督に採用されることはなかった。この間、熊井は石原裕次郎や小林旭が出演するエンターテインメント作品の脚本を多く手がけている。往年の映画『霧笛が俺を呼んでいる』（一九六〇年）、『銀座の恋の物語』（一九六二年）なども熊井がこの頃手がけた作品である。監督として作品を製作できなくても、熊井はこうして映画製作の下積みを重ねていったのだ。

『帝銀事件 死刑囚』の製作にあたり、熊井はこの事件を念入りに検証し、死刑判決を受けた平沢貞通の冤罪を確信していくことになる。平沢はコルサコフ症候群を患っており、このため犯行を自供してしまった可能性が高いと言われる。この映画の影響で、冤罪が疑わしいと注目が集ま



『帝銀事件 死刑囚』に関する資料の数々

り、刑の執行が行われないうまま時間が経過したと言われる。熊井啓記念館には、他の作品と比しても膨大な『帝銀事件 死刑囚』の資料を収蔵している。獄中の平沢と面会を重ねて信頼を得た熊井は、平沢から手紙や色紙を送られている。手紙には読みにくい独特の字体で映画の完成を喜ぶ平沢の心情が綴られている。冤罪のテーマは、松本サリン事件後の河野義行氏をめぐる報道被害を映画化した『日本の黒い夏 冤罪』（二〇〇一年）にも繰り返されるものとなった。

熊井啓の作品には安曇野ロケを行った作品もある。そのうち『愛する』（一九九七年）は、豊科重柳地区や穂高駅など市内各地で撮影を行っている。また、エキストラとして信州大学の劇団やまなみOBが参加しているなど、多くの市民が出演している作品である。『愛する』は、遠藤周作の小説『わたしが・棄てた・女』を原作とした作品である。原作は昭和の物語であったが、熊井はこれを平成の物語としている。熊井はハンセン病患者と誤診されたヒロイン「ミツ」の視線から物語を語り、この病気への差別の問題は過去のものではないことを私たちに突きつけている。そして、「ミツ」の選んだ生き方は、人権問題の告発のみならず、人としてあるべき姿をも示している。

（三澤新弥）



熊井啓記念館 内観

# 9 五つの心をひとつに

市役所本庁舎

平成一七年（二〇〇五）に五つの町村が対等合併して安曇野市が発足して以降、市役所庁舎をどのように整備するかは喫緊の課題となっていた。それぞれの町村の役場として利用していた建物は、どれも規模が不足し、また老朽化が進んで耐震性等に不安のあるところも多かった。

合併して当面の間、安曇野市では旧役場建物を「総合支所」として活用した分庁方式をとることとした。本庁機能はそれぞれの総合支所建物に振り分けられ、市長室や総務部の一部だけが県安曇庁舎敷地内に間借りしたごく小規模な「本庁」に入り執務を行っていたのである。分庁方式にもメリットはあったが、一方で来庁者に余分な手間をかけるせいで、事務コストがかかる等デメリットが大きくなり、市の中心であり拠点となる市役所本庁舎の建設を望む声も多かった。

市では平成二一年度に本庁舎等建設基本構想を取りまとめ、以降新本庁舎建設に向けて本格的な検討に着手した。市民ワークショップや説明会を経て翌二二年度には本庁舎等建設基本計画を策定。その中で、建設地を近代美術館から旧豊科プール跡地周辺と決定した。その後、基本設計を経て平成二五年（二〇一三）三月に起工し、約二年間にわ

たる工事によって平成二七年（二〇一五）一月に竣工となった。

この間、工事期間中には現場見学会を開催したり、広報あづみの紙面において工事の進捗状況を毎号紹介したりと、

市民への積極的な周知も進めていた。また

本庁舎の完成を祝って、市無形民俗文化財に指定されている「福俵曳き」が、地元新田区と隣接の成相区の合同で竣工に先立って実施され二つの福俵が納められたり、友好



豊科近代美術館隣に建設中の新本庁舎

都市である神奈川県真鶴町から庁舎の銘板石が寄贈されました。

こうして出来上がった新本庁舎は、延床面積二万一二四七・〇二平方メートル、地上四階・地下一階建てで、プレキャスト・プレストレストコンクリートと鉄骨を組み合わせ、柱頭免震構造を採用したつくりとなっている。「質実剛健で市民に喜ばれ、次世代へ引き継がれる市庁舎」であることを目指して設計されており、同時期に旧豊科プール跡地に整備された防災広場とあわせて、災害等の非常時にも地域の要となって力を発揮することが期待されている。

市の本庁業務はこれをもって一ヶ所に集約され、平成二七年（二〇一五）五月七日から新庁舎での業務開始となった。その直後の五

月二三、二四日には新庁舎開庁イベントが開催され、二日間で約五〇〇〇人の市民等が訪れた。新庁舎に業務が集約されたことにより、効率的でワンストップでの市民サービス提



本庁舎完成を祝っておこなわれた  
新田・成相両区による福俵曳

供がしやすくなり、また旧五町村から市になった一体感の醸成という面でも一役買っている。今後も市の中心となって活躍することだろう。

（幅拓哉）



本庁舎エントランスから見上げる吹き抜けの東側階段



本庁舎外観（正面玄関）

# 豊科南部総合公園

## 市民の憩いの場

安曇野市の南東部、豊科地域でも南寄りの場所に、総面積八・五鈔と市営の都市公園としては市内最大の広さを誇る豊科南部総合公園がある。天気の良い休日ともなると北アルプスの雄大な景観を背景に、芝生広場では家族連れ等が遊びやスポーツに興じ、ジョギングコースは本格的な恰好のランナーから自転車練習する幼児まで様々な利用者が賑わっている。

この公園が整備されたのは合併前の旧豊科町の頃である。平成二年度に策定された基本設計では、公園のテーマを「コミュニティ&スポーツパーク」と定め、かねてより進められていた周辺地域の県営豊科南部地区ほ場整備事業にあわせて用地が確保された。用地取得も含めた総工費は約五一億円にのぼり、平成十一年（一九九九）の完成までおよそ一〇年をかけて整備された。その間、工期を区切り、完成した部分から段階的に共用が開始されている。平成五年（一九九三）に供用開始となった大型遊具は八〇〇〇万円以上をかけて導入され、当時県下最大級のものであ



南部総合公園の芝生広場で過ごす家族連れ

った（現在は老朽化に伴い入れ替えられている）。平成九年（一九九七）に公園のメインとなる芝生広場の他、噴水及び野外ステージ、マレットゴルフコースが共用開始とな

り、平成一〇年（一九九八）には最後の施設となった全天候型のテニスコート一〇面が完成して完成式典や記念大会が催された（平成一一年（一九九九）から一般共用開始）。

## スポーツの拠点として

豊科南部総合公園は、レクリエーション活動だけでなく、本格的なスポーツイベントの会場としても活用されている。例年六月に開催され全国的にファンも多い安曇野ハーフマラソンでは、ここがスタート・ゴール会場として設定され、大会当日は大勢のランナーや観客で賑わうこととなる。

また設計当初、園内の現在の愛犬広場の場所には、床面積六一〇〇平方メートルの体育館が公園の目玉施設として建設される予定だった。これは財政上の理由で一旦凍結とされたが、合併に際しての協議の中で計画を新市に引き継ぐこととされた。これを受けて合併後の平成二七年（二〇一五）に市公式スポーツ施設整備計画が策定され、新総合体育館の整備計画が本格的に動き出す。そして基本計画策定を経て着工、令和三年（二〇二一）に総合体育館が公園の南隣に姿を現した。

市の施設としては初のネーミングライツを設定した体育館は「ANCアリーナ」と名付けられ、令和四年（二〇二

二）一月一五日に開館した。今後は市のスポーツ拠点として、また各種イベント会場や非常時の防災拠点として、南部総合公園とあわせて市の重要な施設となることは間違いないだろう。  
(幅拓哉)



テニスコートの完成式。  
これをもって公園全体の工事が完了した



工事中の公園。奥には公園の目玉であった大型遊具（設置当初のもの）が見える



豊科南部総合公園南側に完成した ANC アリーナ

# 地域へ飛び出し、地域に学ぶ子どもたち

安曇野市の小中学校では、「たくましい安曇野の子ども」の育成を目指し、地域へ飛び出し、地域に積極的に関わりながら体験的な学習を進めていくことを大切にしている。

## ①豊科北小学校

校庭北西側を流れる「せせらぎ」は平成一五年（二〇〇三）から一六年にかけて、PTAの皆さんの手によって造られた。学校付近では地下六メートルのところに北アルプスの雪解け水が育む豊富な地下水が流れる層があり、せせらぎの水は、そこからポンプを使ってくみ上げられている。

豊科北小学校では市環境課や地元企業の方々に講師に招き、せせらぎの水質や水温の調査活動をしたり、安曇野市に地下水が湧き出る仕組みについて学んだりしている。また、自分たちの生活と地下水の関わりや地下水の保全についても学んでいる。

令和元年度の五年生。社会科の授業で地元特産のワサビ



「せせらぎ」での自然観察（豊科北小）



「せせらぎ」でのワサビづくり（豊科北小）

について学んだ子どもたちは「せせらぎは地下水をくみ上げているからワサビが作れるんじゃないかな」と考え、地元の生産者を講師として招いてワサビ作りについて学び、自分たちでせせらぎを整備してワサビ田を作った。その後、一年半に渡って環境整備に取り組みながら、ワサビを育ててきた子どもたちは令和二年度、六年生卒業間近に収

穫し、みんなで頂くことができた。そのワサビは風味が強く、絶品だった。

学びを振り返ったある子は、次のように述べている。

「安曇野には色々な宝があり水がきれいなことやわさびなど色々あってすごいと思ったし、自分がそんなすごいところに住んでいるということを学んだ。きれいな水で宝でもあるわさびをつくれたことが自分の宝です」。

また、ご協力頂いた地域の方からは、「この安曇野の宝でもあるワサビを育てるを通して、自分たちのふるさとを大切にしてもらいたいし、将来この地域にもどってきて活躍してくれたらさらにうれしいです。そして、ワサビを大切にすることも、物を大切にするこ

ともみんな同じだと思います」というお言葉を頂いた。

## ②豊科南小学校

豊科南小学校では、環境教育に力を注いでいる。昭和五〇年（一九七五）に造られた池を平成五年（一九九三）に小川に改修した「日本列島の小川」や平成五年に学校ビオトープとして造成された「百石堰<sup>ひゃくごくせぎ</sup>」がある。水は、拾ヶ堰、勘左衛門堰から引いている。以来、現在まで子どもたちのよき遊び場、自然観察の場、環境学習の場等として大いに活用されている。



百石堰（豊科南小）



拾ヶ堰クリーン大作戦（豊科南小）

平成一二年（二〇〇〇）、毎日のようにポリ袋や野菜くず等多くのごみが流れ込んでいることから、「上流の拾ヶ堰をきれいにしなければ、ビオトープのごみはなくなるならない」という六年生の子どもの提案により、保護者や地域住民と共に「拾ヶ堰クリーン大作戦」が実施された。以降、このクリーン大作戦は続けられ、令和元年度、その功績が認められ、環境美化教育優良校等表彰事業で最

優秀校・環境大臣賞の表彰を受けている。

以前は全長一五歳のうち、わずかに一・五歳の範囲でしか活動が行われていなかったが、豊科南小学校の活動をきっかけに拾ヶ堰流域に位置する堀金小学校や豊科南中学校でも新たに清掃活動に取り組むようになる等、活動の広がりが見られるようになってきている。

### ③豊科東小学校

令和三年（二〇二一）四月の春の遠足で長峰山・光城山に登った豊科東小学校三年生の子どもたち。地域の里山に自力で登った達成感を味わい、自然への関心を高めた。そこで、五月に再度長峰山にバスで出かけ、四月の遠足で自然のことを教えてもらった三郷昆虫クラブ世話人の那須野雅好さんに再び、木や花や昆虫のことを教えてもらった。四月とは違って昆虫がたくさん。ちょっと歩いただけで昆虫がびよんぴよん跳ねたり、葉の裏にも。最初、青虫を見るだけでキャーキャー言っていた子どもたちもいたが、しばらくすると捕虫網を



長峰山山頂での自然観察（豊科東小）



安曇野ふるさとづくり応援団との地域探検学習（豊科東小）

持って夢中で蝶を追いかけていた。この体験学習後、「虫の飼い方」等の本を図書館で借りてくる子がたくさんいたり、「先生、クロアゲハ見たよ!」と報告してくれる子もいたり、日常生活の中でも、大いに自然に目を向けられるようになった。

また一二月には、安曇野ふるさとづくり応援団の方たちと昔と今の地図を見比べながら、豊科東小周辺の探検を行うことができた。子どもたちは、地域の自然や歴史等につ



ショッピングセンター予定地での現地調査（豊科北中）



取壊される直前の豊科劇場の見学（豊科北中）



大王わさび農場でのアレチウリ駆除作業（豊科北中）

いて関心を持って探究し、たくましく成長している。

#### ④豊科北中学校

令和二年度、一年生は調査・体験的な活動が可能な豊科地域をフィールドにして、「豊科を学ぶ」をテーマに総合的な学習に取り組んだ。そして令和三年度、二年生になった生徒たちは、昨年度学んだことをもとに、地域の課題に対して、自分たちに何ができるのかを考え、学習活動を展開した。

生徒たちの願いは、次のようであった。歴史講座は、「豊科の歴史をもっと知り発信したい」「もっと都市化が進み、豊科が発展してほしい」、自然講座は、「もっと川の水をきれいにしたい。ポイ捨てなど自然の環境に悪影響を与えないようにしたい」「外来植物を減らして、在来植物を増やしたい」、産業講座は、「地域の特産物や食材をもっとPRしたい」「美しい風景をPRして、多くの人に豊科の魅力を知ってほしい」、防災講座は、「地域の人たちに分かりやすい避難所マップを作りたい」「防災グッズ、防



おやきの商品開発（豊科北中）

を進めることができた。

これまでの学習の様子は、次のようであった。歴史講座では、昔の豊科の様子が分かる豊科駅前の商店街や今の豊科の様子が分かるインターチェンジ周辺にあるスワンガーデンの商業施設やその東側に新たに開発される所を現地調査し、それを比較することで将来の豊科について考えた。

自然講座では、豊科の川や湧水の水質調査を行った。矢原堰の水質調査や水生生物の観察を行い、湧水のある田淵行男記念館周辺の水質や水生生物と比較し、インターネット

災マップを作り、防災意識を高めた。各講座とも昨年度の体験学習の成果から、新たに具体的な活動につなげることができていた。学習支援の外部講師として、豊科郷土博物館や市環境課・危機管理課の職員、企業関係者の方々にお願ひして学習

で調べたり講師の話を聞いたりして、それらをまとめることができた。また、アレチウリの駆除を行うために、大王わさび農場等で生態の調査活動を行い、実際に現地での除去作業を実施することができた。産業講座では、「まるたか」監修のもと、おやきの具材の配分や量を調整し、新しいおやきの中身を考案した。また、販売活動に向けて包装用シールやチラシ作りに取り組み、実際に販売活動を行うことができた。また、豊科のPR動画制作に向けて、学校周辺の風景を撮影し、スライド編集し、文化祭で上映することができた。防災講座では、イオン豊科店等の周辺の危険箇所や避難経路について現地調査等を行い、マップ等にまとめることができた。また、身近な物を使ってできる防災グッズや防災食についてインターネットで調べ、実際に作製し、体験することができた。

一〇月一日の文化祭・第三七回槻ノ木祭では全校に向けて放送での発表を行うことができた。来年度は、この学習の成果を地域にも発信し、地域のために貢献できる活動をさらに創り出して行くことだろう。

##### ⑤豊科南中学校

令和三年（二〇二一）五月二五日の地域活動の日、全校生徒が地域の防災学習と美化活動に取り組んだ。豊科南中学校では、年一回、生徒が自分の住む地区で清掃活動をする



地域防災学習（豊科南中）

る「地域活動の日」を設けており、昨年度からそこに「地域防災学習」も導入し活動を充実させてきている。各地区のコミュニティセンター等が集まった生徒たちは、地域の方や企業の防災担当の方から防災についての話を聞いた、防災倉庫を見学したり、防災用機器を実際に動かしたりした。

「いつ雨が多く降るか分からないので、防災マップを確認したい」「災害が起きた時に地域の役に立てよう頑張りたい」「普段できない経験ができてよかった。防災意識を高めていきたい」等、自分たちも防災の担い手になることができるように、少しずつではあるが、学習をすることができた。その後、地区毎の分担場所の清掃を行った。

「老人ホームの草取りをしました。今まで以上にきれいにすることを心がけることができたのでよかった」「社務所の清掃をしました。畳にごみが結構ありました。地域の一員として公共の場をきれいにできたのでよかった」「大人の人もたくさんいて、地域の人と関わることは大切なことだなと思った」等、地域の美化活動のよさを改めて実感した子どもたちであった。

今後も地域の美化活動と共に地域防災についての学習を続け、「地域のためにできることを自ら考える力」を大切に育てながら、災害時には、中学生が地域の安全を第一に考え、地域の戦力として貢献できるようになってほしいと願っている。

これら豊科小中学校五校の学びの実践と目を輝かせて取り組む子どもたちこそ、豊科の宝である。子どもたちはきっと、未来に向かってさらに安曇野・豊科の宝に自ら磨きをかけてたくましく育って行くことだろう。（窪田尚幸）

## ○主な参考文献（五十音・年代順）

- ・会田貢 1922『信濃不二146号』信濃不二社
- ・青木治 1988『穂高神社とその伝統文化』穂高神社社務所
- ・安曇野市市民生活部環境課編 2014『安曇野市版レッドデータブック』安曇野市
- ・安曇野市豊科郷土博物館 2019『安曇野市豊科郷土博物館紀要 第6号』
- ・市川健夫監修・松本市立博物館編 2002『鯿のきた道 越中・飛騨・信州へと続く街道』オフィスエム
- ・宇留賀浜雄 1977『穂高わさびの歴史と栽培・加工法』信州山葵農業協同組合
- ・NPO法人楽々安曇野 2012『たのしもう光城山』
- ・小穴喜一 1987『土と水から歴史を探る—古代・中世の土地利用を軸として—』信毎書籍出版センター
- ・小幡喜一・堀内義・小池伯一・石田吉明 2014「長野県安曇野市田沢鉾泉付近の中新統青木層産生痕化石」『長野市立博物館紀要第15号（自然系）』
- ・関東農政局長野統計情報事務所 1986『長野県農林業市町村別統計書（昭和60年）』長野農林統計協会
- ・関東農政局長野統計情報事務所 1995『長野県農林業市町村別統計書（平成7年度版）』長野農林統計協会
- ・関東農政局長野統計情報事務所 2001『長野県農林業市町村別統計書（平成13年度版）』長野農林統計協会
- ・甲能直樹・小池伯一・成田健 2003「長野県の中部中新統青木層より産出した最古のアシカ科鱧脚類」『日本古生物学会2003年年会予稿集』
- ・甲能直樹・小池伯一・成田健 2007「長野県の中部中新統別所累層および青木累層より産出した海生哺乳類化石の概要」『信州新町化石博物館研究報告第10号』
- ・甲能直樹 2020『日本の鱧脚類—海に生きるアシカとアザラシ』東京大学出版会
- ・近藤信行 2015『安曇野のナチュラリスト 田淵行男』山と溪谷社
- ・笹本正治著・安曇野市教育委員会編 2013『安曇野風土記Ⅰ 水で結ばれたふるさと』
- ・自然観察資料集作成委員会 1984『松本盆地のおいたちをさぐる（改訂版）』松本市教育会・東筑摩塩尻教育会・南安曇教育会・北安曇教育会
- ・嶋田哲郎著・森本元監修 2021『知って楽しいカモ学講座：カモ、ガン、ハクチョウのせかい』緑書房
- ・市立大町山岳博物館研究紀要編集委員会 2019『市立大町山岳博物館研究紀要 第4号』市立大町山岳博物館
- ・鈴木重武・三井弘篤編述 1996『信府統記』国書刊行会
- ・続群書類従完成会 1984『新訂 寛政重修諸家譜 第十一』
- ・東京文化財研究所監修 2016『J-BIRD 写真と登録記号で見る 戦前の民間航空機』日本航空協会
- ・豊科赤十字病院 2001『あづみ野の地に 豊科赤十字病院五十年史』
- ・豊科中学校「二十年のあゆみ」編集委員会編 1972『二十年のあゆみ 豊科中学校』
- ・豊科町誌編纂会 1955『豊科町誌』豊科町長 時田季実
- ・豊科町誌編纂委員会 1995『豊科町誌 自然編』豊科町誌刊行会
- ・豊科町誌編纂委員会 1999『豊科町誌 別編（民俗Ⅱ）』豊科町誌刊行会
- ・豊科町教育委員会 1982『命の水 安曇平の水利史・豊科編』
- ・豊科町教育委員会 1982『豊科町の石造文化財 碑編』
- ・豊科町教育委員会 1999『町田遺跡—都市対策砂防事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- ・豊科町郷土博物館 1999『土器づくりのムラへの招待』
- ・豊科町東山遺跡調査会編 1999『筑摩東山—上ノ山・菖蒲平窯跡群発掘調査報告書—』
- ・豊穂中学校生徒会編 1953『とよほ創刊号』
- ・豊科料芸組合 2001『豊科料芸組合 50周年のあゆみ』（パンフレット）
- ・中島博昭 1991『唄え 安曇節』

- ・長野県梓川土地改良区編 2020『真鳥羽堰のあゆみ』
- ・長野県拾ヶ堰土地改良区・拾ヶ堰応援隊編 2008『親子で学ぶ 安曇野の拾ヶ堰ガイドブック』
- ・長野県豊科高等学校六十周年記念事業実行委員会編 1984『長野県豊科高等学校六十周年記念誌』
- ・長野県南安曇農業高等学校創立百周年記念誌編集委員会編 2022『長野県南安曇農業高等学校百周年記念誌』
- ・長野県立歴史館編 2020『令和2年度秋季企画展 稲作とクニの誕生—信州と北部九州—』
- ・長野道建設12年のあゆみ編集委員会編 1989『長野道建設12年のあゆみ（岡谷～豊科）』日本道路公団名古屋建設局
- ・長野農林統計協会編 1974『南・北安曇の農業統計 昭和35～47年』長野農林統計協会
- ・中野正實 1981『夜明けの鐘 桂谷 藤森寿平小伝』豊科町
- ・中野正實 1982『夜明けの翼 長谷川・飯沼飛行士伝』豊科町
- ・農林省統計調査部編 1961『世界農林業センサス市町村別統計書1960年 No.20』農林統計協会
- ・日本地下水学会／井田徹治 2009『見えない巨大水脈 地下水の科学 使えばすぐには戻らない「意外な希少資源」』講談社
- ・日本地下水学会編 2020『みんなが知りたいシリーズ③ 地下水・湧水の疑問50』成山堂書店
- ・日本道路公団名古屋建設局豊科工事事務所 1993『豊科工事事務所記念誌 安曇野に築く』
- ・原山 智・大塚 勉・酒井潤一・小坂共栄・駒澤正夫 2009『地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）松本地域の地質』独立行政法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター
- ・深志同窓会 2006『深志人物誌Ⅲ』
- ・藤田圭雄 1984『日本童謡史Ⅰ』あかね書房
- ・藤森桂谷没後百年記念事業実施委員会編 2006『師表の人 藤森桂谷ものがたり』
- ・松本市立博物館 2008『特別展図録 信州と味噌』
- ・松川村教育委員会編・海川清監修 2009『精選 安曇節集』
- ・万足卓 1966『がちょうの歌 楽しい西洋詩歌への招き』牧書店
- ・三郷村誌編纂委員会 2006『三郷村誌Ⅱ 第二巻歴史編上』三郷村誌刊行会
- ・南安曇教育会編 1982『藤森桂谷の生涯』
- ・南安曇郡誌改訂編纂会 1971『南安曇郡誌 第三巻下』
- ・南安曇郡誌改訂編纂会 1974『南安曇郡誌 第三巻上』
- ・宮坂武男 2013『信濃の山城と館7 安曇・木曾編』戎光祥出版
- ・明治大学文学部史学地理学科松橋ゼミナール 2013『安曇野市における穂高ワサビの生産・加工・販売』
- ・屋敷林と歴史的まちなみプロジェクト 2011『安曇野の屋敷林 その歴史的まちなみを訪ねて』
- ・横川裕一 2015「幼少期の陸軍機・甲乙丙丁己（その3）乙式一型偵察機」『航空ファン64巻9号』文林堂
- ・横川裕一 2019「埋もれた陸軍航空史 日本陸軍機のプロペラ図説（1）輸入機・ライセンス生産機概説」『航空ファン68巻8号』文林堂

---

## ○協力者一覧（敬称略、五十音順）

安曇野赤十字病院、岩崎書店、臼居直之、小池伯一、酒井伸治、清水屋製菓店、下田忠壽、正敬寺、武井重夫、田多井智恵、田淵杉穂、豊科北小学校、豊科北中学校、豊科東小学校、豊科南小学校、豊科南中学校、中日本高速道路株式会社松本保全・サービスセンター、長野県立歴史館、藤森恵美子、穂高神社、松本市四賀化石館、松本市立博物館、丸山武人、宮下智美、村上紀子、望月裕子、山口高史、山本紘子、横川裕一、渡辺克重

---

## ○執筆者（五十音順）

飯沼 成昭（飯沼飛行士記念館職員）  
青木 弥保（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館係）  
窪田 尚幸（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）  
倉石あつ子（安曇野市豊科郷土博物館職員）  
財津 達弥（安曇野市総務部人権男女共同参画課課長補佐）  
斉藤 雄太（安曇野市教育委員会教育部文化課文化財保護係）  
鈴木 桂子（安曇野市豊科公民館長）  
高山 裕司（安曇野市市民生活部環境課環境政策係）  
土屋 和章（安曇野市教育委員会教育部文化課文化財保護係）  
中田 信好（田淵行男記念館長）  
那須野雅好（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館係）  
幅 拓哉（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館係）  
原 明芳（安曇野市豊科郷土博物館長）  
平沢 重人（安曇野市文書館長）  
逸見 大悟（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館係長）  
松田 幸子（安曇野市保健医療部国保年金課国保年金担当）  
松田 貴子（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）  
三澤 新弥（安曇野市教育委員会教育部文化課文化振興担当係長）  
水谷 優美（安曇野市福祉部長寿社会課長寿福祉係）  
宮本 尚子（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）  
山下 泰永（安曇野市教育委員会教育部文化課長）  
山田 真一（安曇野市市民生活部長）

---

本書に掲載された写真及び図版の無断転載を禁じます。

## 『豊科の宝』

令和4年（2022）3月31日 発行

編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

発行 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会  
（中核館：安曇野市豊科郷土博物館）

〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289番地8 TEL 0263-72-5672

印刷 信毎書籍印刷株式会社